茂木遺跡群

稲荷窪B地点遺跡

（「団体営土地改良総合整備事業茂木地区」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書II）

1998

群馬県勢多郡大胡町教育委員会

序　　文

団体営土地改良総合事業に伴う茂木地区の発掘調査は、平成６～７年の２カ年に渡り稲荷窪Ａ地点遺跡、稲荷窪Ｂ地点遺跡が行われました。ここに平成７年度刊行の稲荷窪Ａ地点遺跡発掘調査報告書に続き、稲荷窪Ｂ地点遺跡の報告書を刊行いたします。

今回の発掘調査では、縄文時代～歴史時代の住居跡等が検出され、Ａ地点遺跡と共に当地に於ける縄文文化や古墳文化を解明する貴重な資を提示されたものと思います。今後、本書が地域の歴史や文化を解明する上での一端となれば幸いです。

本書の刊行にあたり、多大な尽力を賜りました関係諸機関・地元関係各位にたいして、心から感謝の意を表すと共に作業に携わった作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成10年３月

大胡町教育委員会

教育長　剱　持　平三郎

例　　言

1．本書は、平成７年度団体営土地改良総合整備事業茂木地区に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査報告書であり、本事業の第２集である。

2．発掘調査地区は、群馬県勢多郡大胡町茂木字稲荷窪と字梅沢に所在する遺跡群であるが、総称して稲荷窪Ｂ地点遺跡と称する。

3．発掘調査は、平成７年６月10日より10月６日まで実施した。

4．発掘調査は、大胡町教育委員会直営で実施し、山下歳信と藤坂和延が担当した。

5．本書の作成は、編集・執筆を山下が行った。

6．発掘調査によって出土した遺物については総て大胡町教育委員会で保管管理している。

7．発掘調査から本書作成の過程で下記の方々や機関からご協力・ご指導をいただいた。記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）

群馬県教育委員会文化財保護課　大胡町農村整備課　㈱測研　技研測量設計㈱　須賀工業㈱
真下高幸　小管将夫　綿田弘美　谷藤保彦　関根慎一　小島純一　子安和順　宮田毅　品田高志
中野純　寺崎裕助　関谷清治　井上美代子　大原きみ子　石井よね　勅使川原幸枝　小沢チヅエ
萩原秀子　菅田ツル　鈴木久美子　五十嵐文江　北爪珠美　田村志づ江　山下雅江

凡　　例

1．発掘区は５ｍ区画を作り、東西方向の西から数字、南北方向の南から北に向けてアルファベットを使用した。

2．遺構実測図の方位記号は、真北を表す。

3．遺構実測図に記した基準線は海抜で表した。

4．遺構・遺物のスケールは下記の通りである。

全体図１：2000　調査区別全体図１：600　遺構図１：60　カマド１：30

遺物図１：３～１：４

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
挿図目次・写真目次

Ⅰ　発掘調査に至る経緯と遺跡の位置、環境……1
Ⅱ　検出された遺構と遺物の概要……1
Ⅲ　縄文時代の遺構と遺物……1～21
Ⅳ　古墳時代の遺構と遺物……22～61
Ⅴ　歴史時代以降の遺構と遺物……61～64
Ⅳ　成果と問題点……65～69

挿図目次

第1図　稲荷窪A・B地点遺跡全体図……2
第2図　Ⅰ・Ⅱ調査区全体図……3
第3図　Ⅲ・Ⅳ調査区全体図……4
第4図　J1号住居跡……5
第5図　J1号住居跡出土遺物（1）……6
第6図　J1号住居跡出土遺物（2）……7
第7図　J2号住居跡……8
第8図　J2号住居跡出土遺物……9
第9図　J3号住居跡……10
第10図　J3号住居跡出土遺物（1）……11
第11図　J3号住居跡出土遺物（2）……12
第12図　1号土坑……13
第13図　2号土坑……14
第14図　1号集石土坑・同出土遺物……15
第15図　2号集石土坑・同出土遺物……15
第16図　包含層出土遺物（1）……16
第17図　包含層出土遺物（2）……17
第18図　包含層出土遺物（3）……18
第19図　包含層出土遺物（4）……19
第20図　包含層出土遺物（5）……20
第21図　1号住居跡……22
第22図　1号住居跡出土遺物……23
第23図　2号住居跡……24
第24図　2号住居跡出土遺物（1）……25
第25図　2号住居跡出土遺物（2）……26
第26図　3号住居跡……27
第27図　3号住居跡出土遺物……28
第28図　4号住居跡……28
第29図　4号住居跡出土遺物……29
第30図　5号住居跡……30
第31図　6号住居跡……31
第32図　6号住居跡出土遺物……32
第33図　7号住居跡……33
第34図　7号住居跡出土遺物（1）……34
第35図　7号住居跡出土遺物（2）……35
第36図　7号住居跡出土遺物（3）……36
第37図　7号住居跡出土遺物（4）……37
第38図　8号住居跡……39
第39図　8号住居跡出土遺物……40
第40図　9号住居跡……41
第41図　9号住居跡出土遺物（1）……42
第42図　9号住居跡出土遺物（2）……43
第43図　10号住居跡……44
第44図　10号住居跡出土遺物……45
第45図　11号住居跡……46
第46図　11号住居跡出土遺物……47
第47図　12号住居跡……48
第48図　12号住居跡出土遺物……49

第49図　13号住居跡 ……50
第50図　14号住居跡 ……51
第51図　14号住居跡出土遺物（1） ……52
第52図　14号住居跡出土遺物（2） ……53
第53図　15号住居跡 ……53
第54図　15号住居跡出土遺物 ……54
第55図　16号住居跡 ……55
第56図　16号住居跡出土遺物 ……56
第57図　17号住居跡 ……56
第58図　17号住居跡出土遺物 ……57
第59図　18号住居跡 ……58
第60図　18号住居跡出土遺物（1） ……59
第61図　18号住居跡出土遺物（2） ……60
第62図　19号住居跡 ……62
第63図　19号住居跡出土遺物 ……63
第64図　Ⅲ調査区溝状遺構 ……64
第65図　円筒形土器集成図（1） ……66
第66図　〃　（2） ……67
第67図　木の葉形土器集成図 ……68

写真目次

PL 1　遺跡全景
PL 2－1　Ⅰ・Ⅱ調査区
2－2　Ⅲ調査区
PL 3－1　J 1号住居跡
3－2　J 1号住居跡出土遺物
3－3　J 2号住居跡
3－4　1号集石土坑
3－5　J 3号住居跡
3－6　2号集石土坑
PL 4－1　1号住居跡（西より）
4－2　同住居跡遺物出土状況
4－3　2号住居跡（西より）
4－4　同住居カマド跡
4－5　3号住居跡（西より）
4－6　同住居跡遺物出土状況
PL 5－1　4号住居跡（東より）
5－2　同住居跡遺物出土状況
5－3　5号住居跡（西より）
5－4　6号住居跡セクション
5－5　6号住居跡遺物出土状況
5－6　同住居跡遺物（№1・2）出土状況
PL 6－1　6号住居跡（西より）
6－2　7号住居跡円筒形土器（№28）出土状況
6－3　同住居跡セクション
6－4　同住居跡編石出土状況
6－5　同住居跡遺物出土状況
6－6　同住居跡カマド前面遺物出土状況
PL 7－1　7号住居跡（南より）
7－2　同住居跡カマド
7－3　8号住居跡（西より）
7－4　同住居跡遺物出土状況
7－5　9号住居跡遺物出土状況（南より）
7－6　同住居跡カマド
PL 8－1　9号住居跡遺物出土状況（近撮）
8－2　9号住居跡（南より）
8－3　10号住居跡（西より）
8－4　10号住居跡カマド
8－5　11号住居跡（西より）
8－6　作業風景
PL 9－1　12号住居跡（西より）
9－2　同住居跡遺物（№4）出土状況
9－3　同住居跡カマド
9－4　13号住居跡（西より）
9－5　14号住居跡（西より）
9－6　同住居跡遺物出土状況
PL 10－1　15号住居跡（西より）
10－2　同住居跡遺物出土状況
10－3　16号住居跡（東より）
10－4　同住居跡カマド
10－5　17号住居跡（西より）
10－6　同住居跡遺物出土状況
PL 11－1　18号住居跡（南西より）
11－2　同住居跡カマド
11－3　同住居跡編石出土状況
11－4　19号住居跡（西より）
11－5　同住居跡カマド
11－6　1号溝

茂木遺跡群

稲荷窪B地点遺跡

（「団体営土地改良総合整備事業茂木地区」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ）

Ⅰ　発掘調査に至る経緯と遺跡の位置、環境

本遺跡の発掘調査は、平成６年度より開始された団体営土地改良総合整備事業茂木地区の平成７年度事業に伴い実施された。当教育委員会は、稲荷窪Ａ地点と同様に遺跡範囲確認の試掘調査を実施し、工事概要に即した取り扱いを当町農村整備課と協議。工事概要から遺跡範囲を確定し、同年６月により発掘調査を開始した。

本遺跡の位置と環境については、平成８年度刊行の稲荷窪Ａ地点遺跡を参照していただきたい。

Ⅱ　検出された遺構と遺物の概要

平成６年度に調査された稲荷窪Ａ地点遺跡と同台地上の北方に続く稲荷窪Ｂ地点遺跡（第１図）では、台地中央部～南西傾斜面のⅠ調査区（第２図）、それに続く台地平坦部のⅡ調査区（第２図）、同台地の西に湾入した低地部から西～南西傾斜面で構成されるⅢ調査区（第３図）、低地を挟んで小さく突出する字梅沢地区のⅣ調査区（第３図）に縄文時代・古墳時代後期・歴史時代の遺構・遺物を検出した。

Ⅰ調査区は稲荷窪Ａ地点遺跡が選地する台地を南北に区画する道路の北方にあり、13号住居跡が位置する東傾斜面から縄文時代の遺構・遺物が集中する台地平坦部、そして西～北方に伸びる西傾斜面から14・15号住居跡が位置する平坦部を総称する。18号住居跡と15号住居跡の位置する平坦部は、ローム面に達する整地事業が行われ為、遺跡の存在は皆無と考えられる。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡３軒、集石遺構２基、土坑が検出され、前期初頭黒浜式期～中期後葉加曽利Ｅ２式等の遺物が出土した。１号集石遺構からは内面朱塗の有孔鍔付土器がある。古墳時代後期の竪穴住居跡は、18号住居跡を最南端として北方に５軒が検出された。

Ⅱ調査区は、Ⅰ調査区から伸びる道路敷部分を中心として調査区を設定し、北方部分で古墳時代後期の13号住居跡を検出したのみである。

Ⅲ調査区は切土部分を中心とした調査区で、台地の西に湾入した小谷地部分と西～南西傾斜面からなる。この調査区では、古墳時代後期の住居跡が12軒、Ｂ軽石を覆土上面に堆積する１号溝や近世と考えられる地割りの溝等を検出した。

低地部で検出された古墳時代後期の竪穴住居跡には、人為的にローム土で埋められた６・７・８・11号住居跡があり、１号溝の掘削土による埋め土と考えられる。

出土品としては、県内では類例の少ない円筒形土器が７号住居跡から、西毛地区で多く見られる木の葉形土器が９号住居跡から検出された。

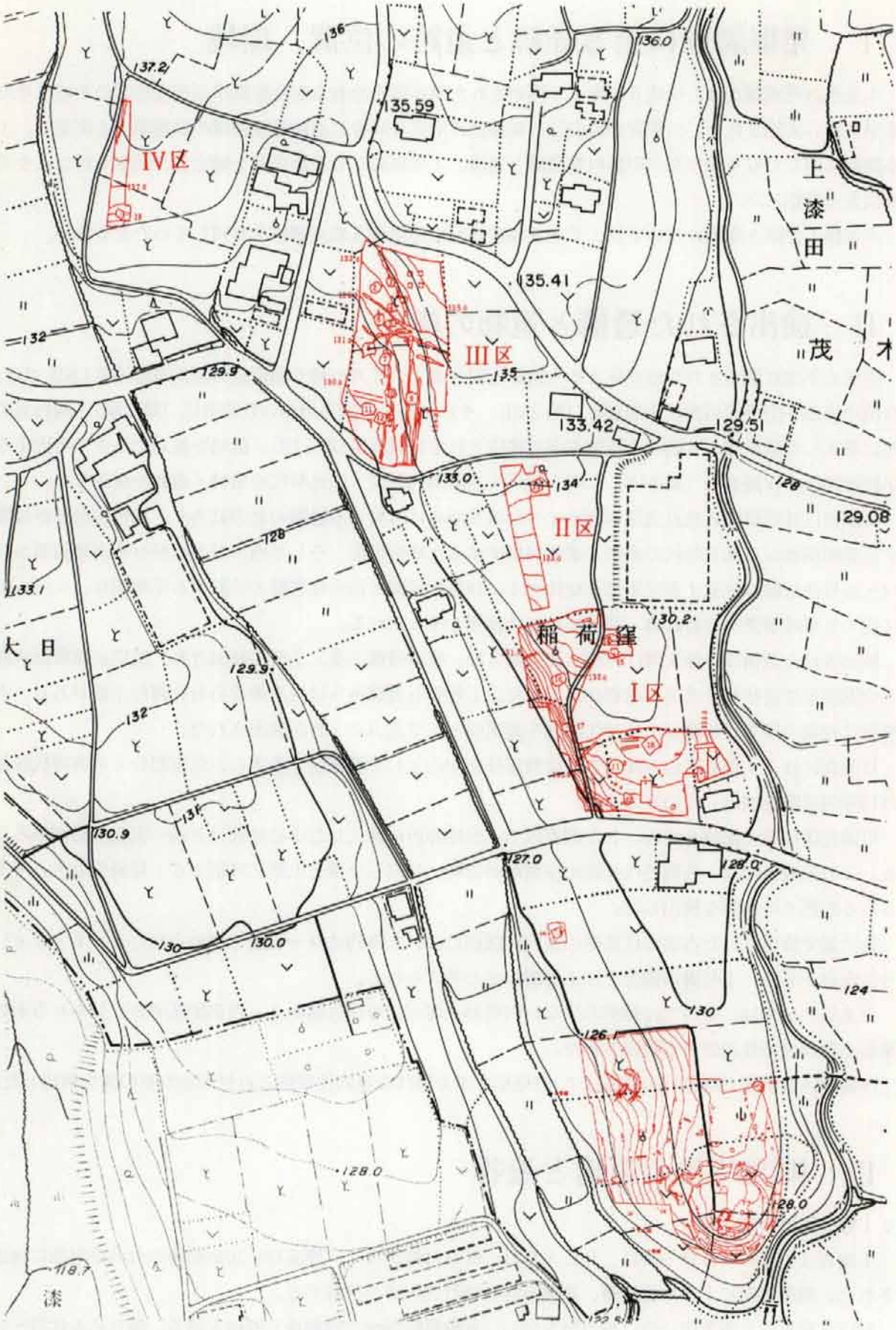
Ⅳ調査区は新設道路部分の調査区で、南端部で歴史時代の竪穴住居跡と近世の地割りの溝を検出した。

Ⅲ　縄文時代の遺構と遺物

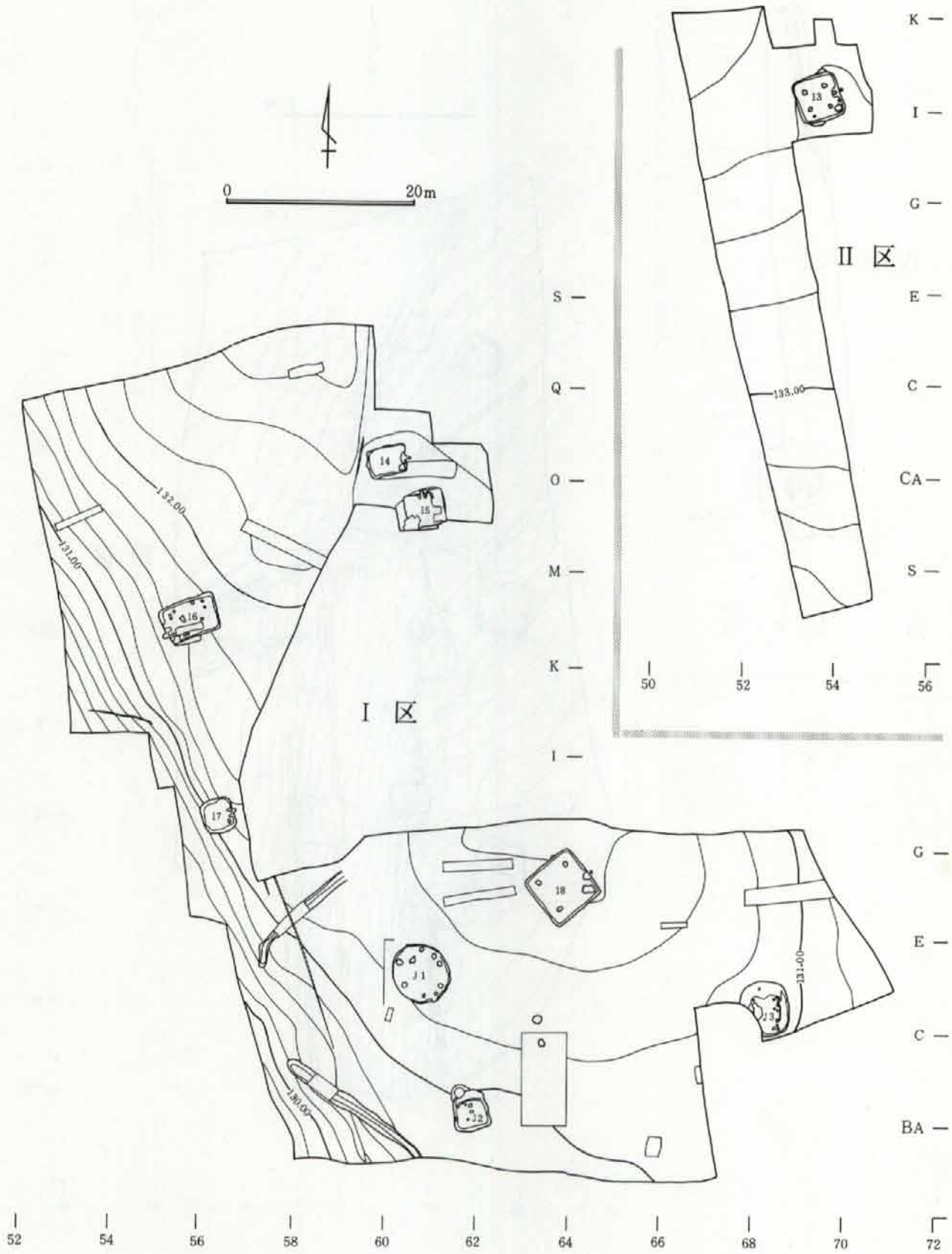
Ｊ１号住居跡（第４図）

Ⅰ調査区のＢＣ・ＢＤ―60Ｇ、ＢＣ・ＢＤ―61Ｇに跨がって、標高131.30m前後の台地平坦部に検出された。南東方向にＪ２号住居跡、北東方向に18号住居跡が位置する。

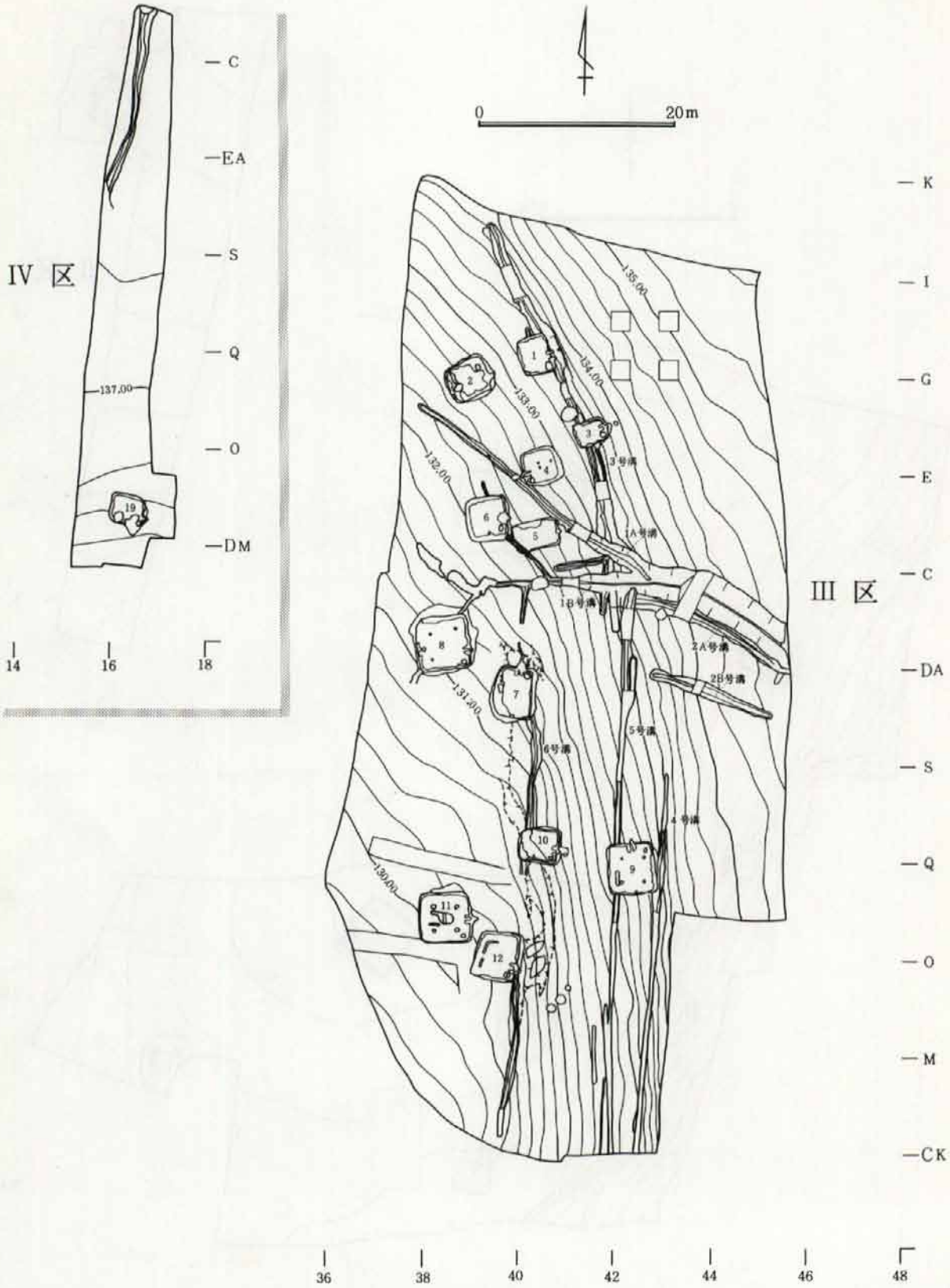
形状は南東～北西方向に長い楕円形を呈し、長軸長6.55m、短軸長5.97mを測る。掘り込みは21～42



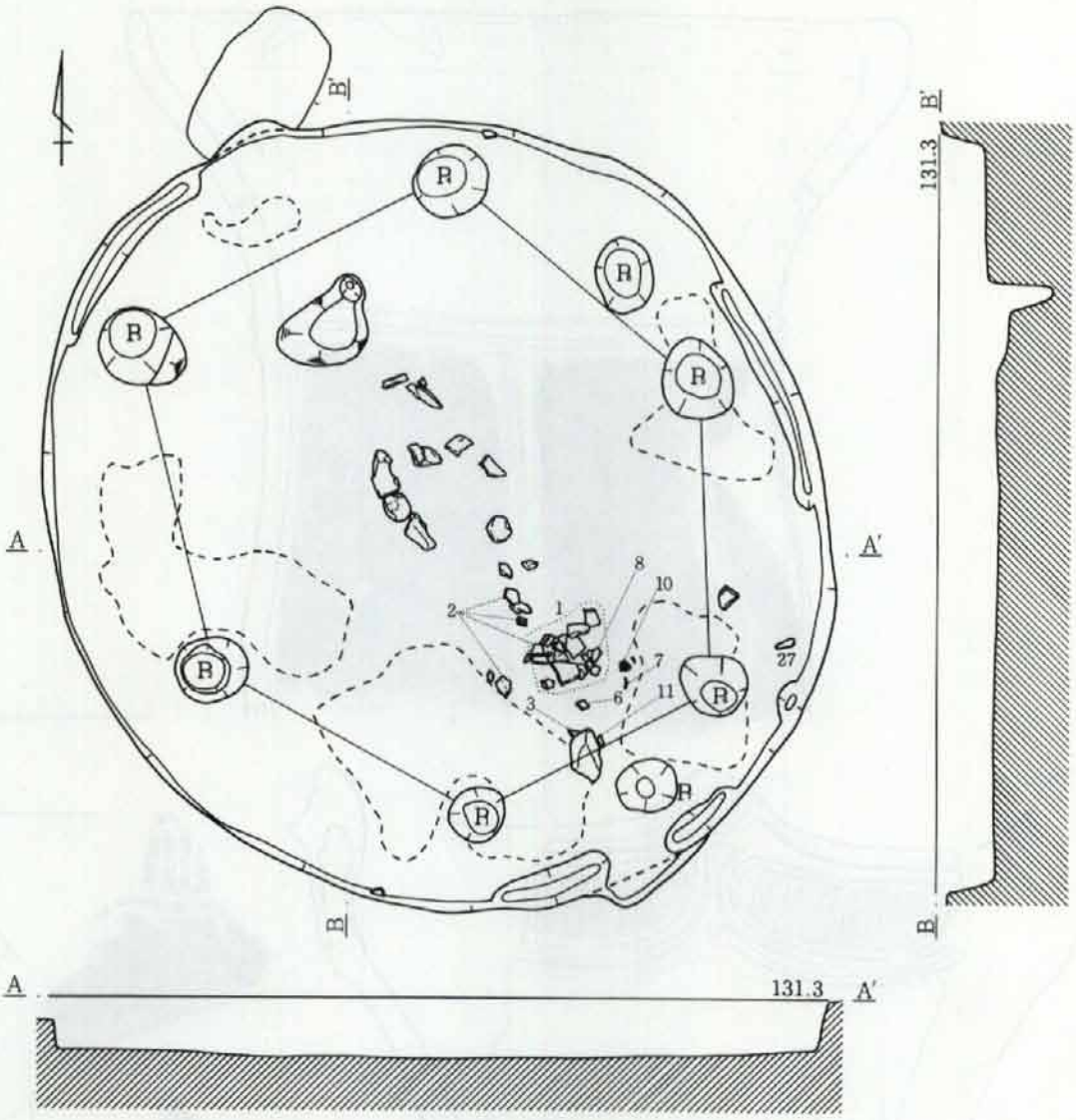
第1図　稲荷窪A・B地点遺跡


0
20m
II 区
I 区
133.00
132.00
131.00
130.00
13
14
15
16
17
18
J1
J2
J3
K
I
G
E
C
CA
S
S
Q
O
M
K
I
G
E
C
BA
50
52
54
56
52
54
56
58
60
62
64
66
68
70
72

第2図　I・II調査区


IV 区
III 区
0
20m
137.00
135.00
134.00
133.00
132.00
131.00
130.00
1A号溝
1B号溝
2A号溝
2B号溝
3号溝
4号溝
5号溝
6号溝
C
EA
S
Q
O
DM
K
I
G
E
C
DA
S
Q
O
M
CK
14
16
18
36
38
40
42
44
46
48

第3図　Ⅲ・Ⅳ調査区

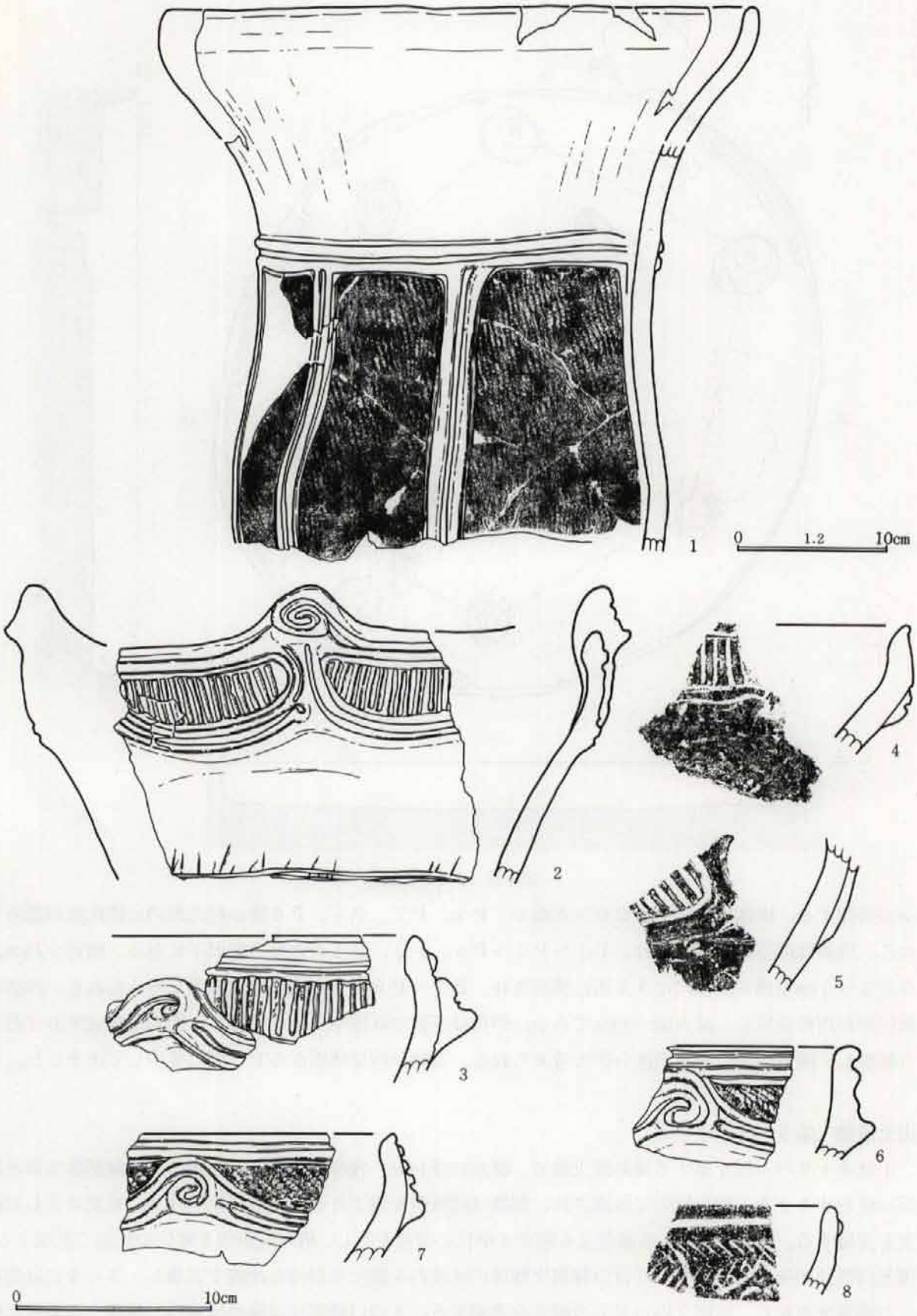


第４図　Ｊ１号住居跡

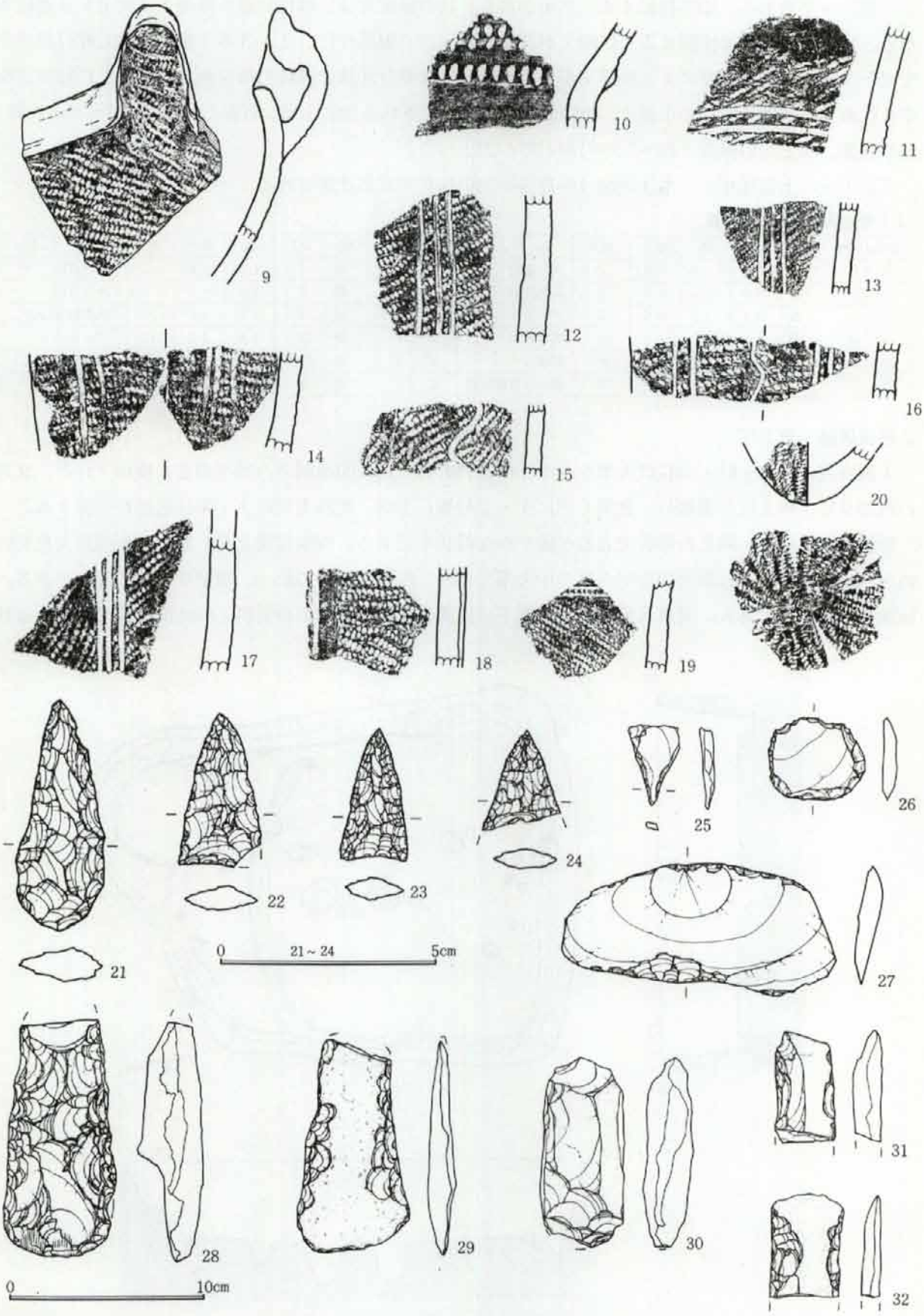
cmが残存する。床面はほぼ平坦なローム面で、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ５、Ｐ６等の柱穴周辺に硬化面が認められる。周溝は部分的に検出され、Ｐ１～Ｐ７～Ｐ６、Ｐ３、Ｐ５の背後の壁面下にある。幅15～20cm、深さ２～５cmを測る。柱穴は９カ所に検出され、Ｐ１～Ｐ６の６本柱穴が主柱穴と考えられる。形状は楕円形が円形を呈し、深さ58～69cmである。炉址は床面のほぼ中央部に位置し、西辺を構成する３石から推察して南方が開口する石囲い炉と考えられる。遺物は炉址前面からＰ５間に集中して出土した。

出土遺物（第５・６図１～32）

１はキャリパー形を呈する深鉢形土器で、復元口径40cm、残存器高36.5cmを測る。口縁部無文帯と胴部は併走する２本１組の隆帯で区画され、胴部は同隆帯を垂下させて方形区画を作る。地文はＲＬの縄文を充填する。２は沈線による渦巻文を施す４単位の突起を有し、楕円区画内を縦位の沈線で充填する。復元口径は39cmである。３～５は口縁部文様体の区画内を縦位や斜位の沈線で充填し、３と６には突出した渦巻文を配し、区画文内はＲＬの縄文を充填する。８の口縁部片は隆帯区画内に沈線を矢羽状に配し、山形の隆帯に沿わせて円形刺突文を施す。９は橋状把手を付し、口縁部無文帯を有する。施文はＲ



第５図　Ｊ１号住居跡出土遺物（１）



第６図　Ｊ１号住居跡出土遺物（２）

Lの縄文を充填する。加曽利E４式に比定される。10の頸部片は、横位に巡る隆帯上に刺突文を連続させる。11の頸部片には沈線による区画文が巡る。12～17の胴部片は、２～３本１組の沈線と蛇行懸垂文を垂下させる。18は隆帯による懸垂文が垂下する。19は平行沈線に連続爪形を施し、胴部と口縁部文様帯を区画する諸磯ａ式期の土器片。20は前期初頭に比定される尖底土器。石器としては、21～24の石鏃、25の石錐、26と27の掻器、28～32の打製石斧が出土した。

床面出土の土器様相から本住居跡は中期後半加曽利E２式に比定される。

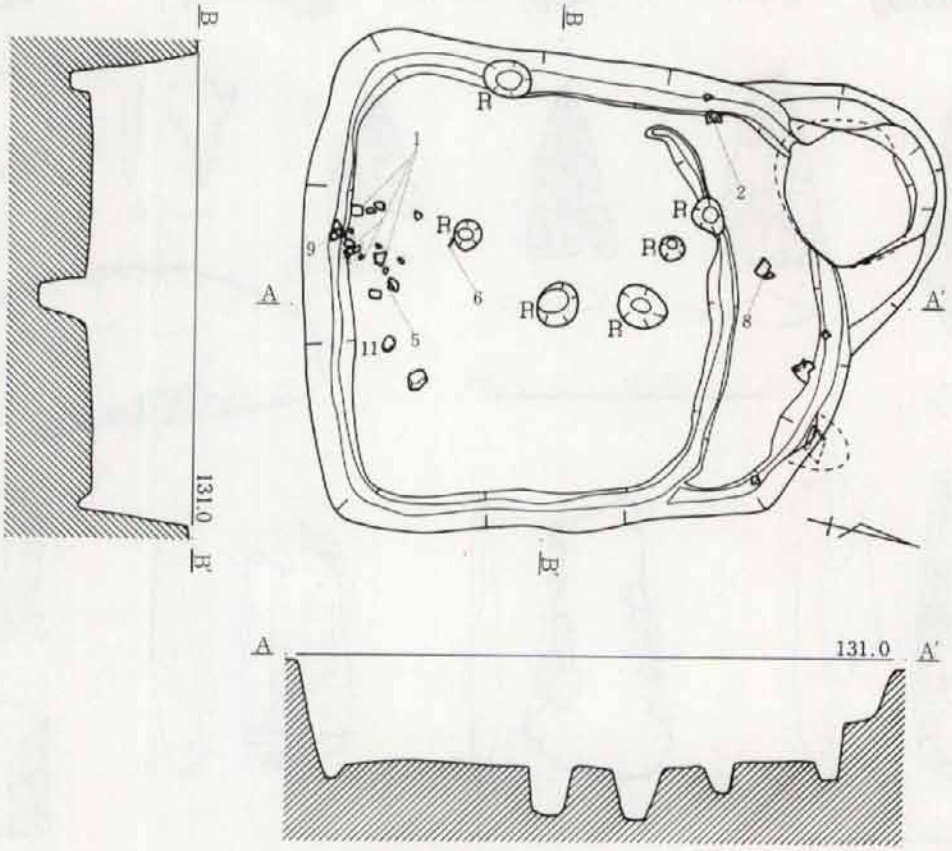
Ｊ１号住居跡出土石器法量

番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質	番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質
21	石鏃	5.3	2.0	0.8	7.4	黒色頁岩	22	石鏃	3.5	1.9	0.6	3.1	黒色頁岩
23	石鏃	3.0	1.5	0.5	2.0	黒色頁岩	24	石鏃	2.3	1.8	0.4	1.4	黒色頁岩
25	石錐	4.1	2.7	0.6	6.0	デイサイト	26	削器	4.3	5.1	0.7	21	緻密質安山岩
27	削器	6.9	14.3	1.3	126	黒色頁岩	28	石斧	12.5	5.8	3.2	275	デイサイト
29	石斧	11.1	5.8	1.4	96	流紋岩	30	石斧	10.0	4.3	2.4	149	緻密質安山岩
31	石斧	5.8	3.1	1.3	30	安山岩質凝灰岩	32	石斧	5.5	4.3	1.1	33	デイサイト

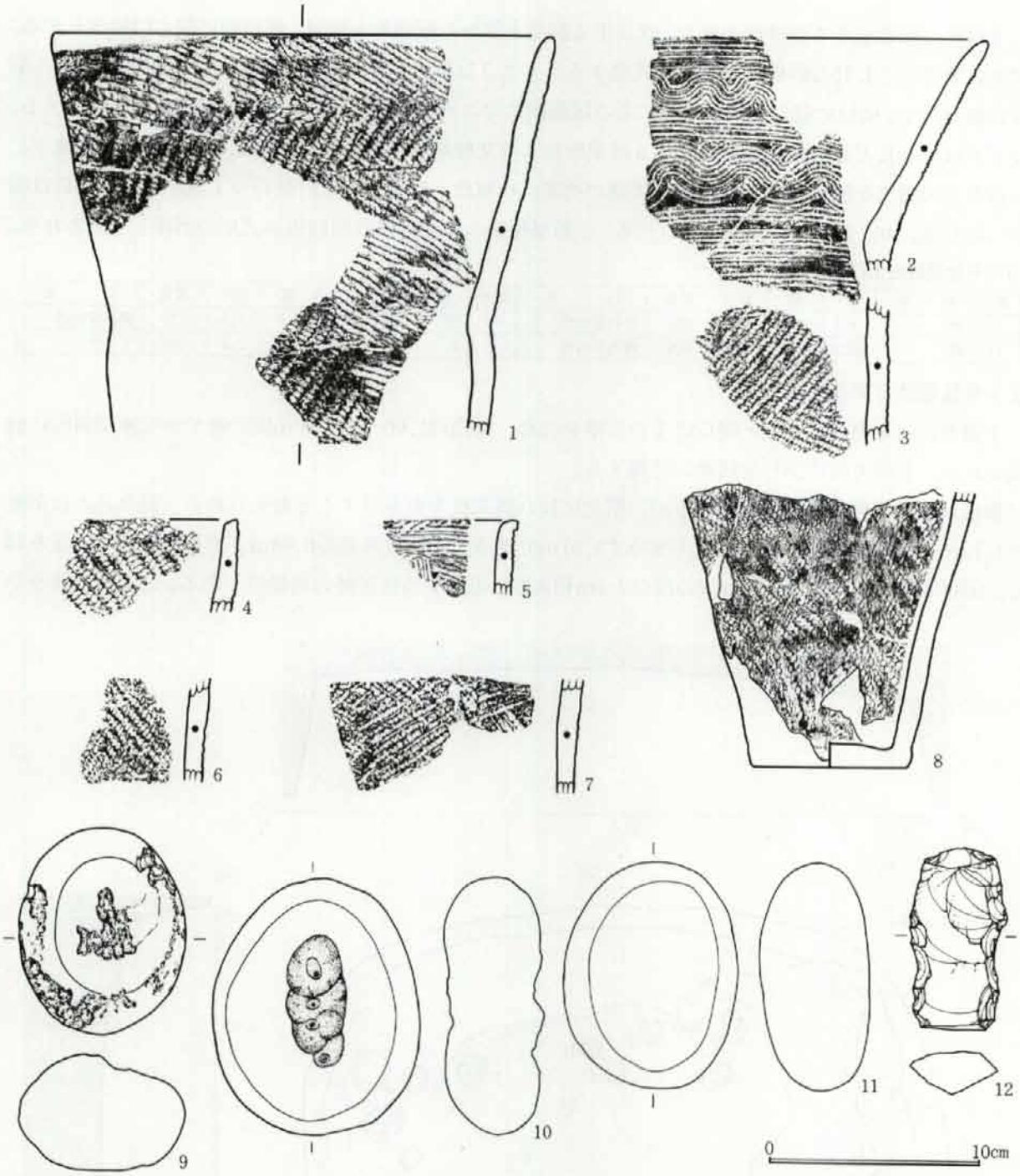
２号住居跡（第７図）

Ｉ調査区のＢＡ―61・62Ｇに大半を占め、標高130.90～131.00m間の台地平坦部に検出された。北辺の西寄りに１号土坑が重複し、北東方向に１・２号集石土坑、北西方向にＪ１号住居跡が位置する。

形状は南北に長い隅丸台形状で北辺が緩やかな弧状を呈する。規模は南北長4.36m、東西最大長3.94mを測る。掘り込みは最大残存が西壁の中央部で85cm、南壁中央部で83cm、東壁中央部で77cmである。床面はほぼ平坦である。周溝は全周し、東壁下の周溝の途中から西方の周溝と60cm前後幅で併走する拡



第７図　Ｊ２号住居



第８図　Ｊ２号住居跡出土遺物

張前の周溝がある。幅10～20cmで深さ８～15cmを測る。柱穴は６カ所に検出され、Ｐ１はほぼ中央部に配され、35×33cmの円形で深さ40cmである。Ｐ２はＰ１の北方30cm程で、42×33cmの楕円形で深さ43cmを測る。Ｐ３～Ｐ５は20～30cm前後の楕円形か円形で深さ15～28cmである。Ｐ６は西壁下の周溝内やや南寄りに配され、39×28cmの楕円形で深さ35cmである。炉址の存在は検出されなかった。遺物は南壁下の中央部分に集中し、北方部分にも散在して出土。

出土遺物（第８図１～12）

1は平口縁を呈する深鉢形土器で、直立する胴部上位から屈曲部を設け、直線的に開く口縁部とする。地文は無節ＲとＬＲの斜縄文を交互に充塡する。２と３は同一個体と考えられ、２は直線的に大きく開く口縁部片で、横位に巡らす平行沈線による区画内にコンパス文を施す。胴部片は羽状縄文を構成する。４と６は、ＬＲとＲＬの縄文を施す。５は条線により文様を意匠する。７は付加条の縄文原体を施す。８はＲＬの縄文を施す底部で、諸磯ａ式期の所産。石器は、磨石３点と打製石斧１点がある。９には細かい敲打痕、10は表裏面に凹痕が見られる。土器様相から本住居跡は前期黒浜式期の所産と考えられる。

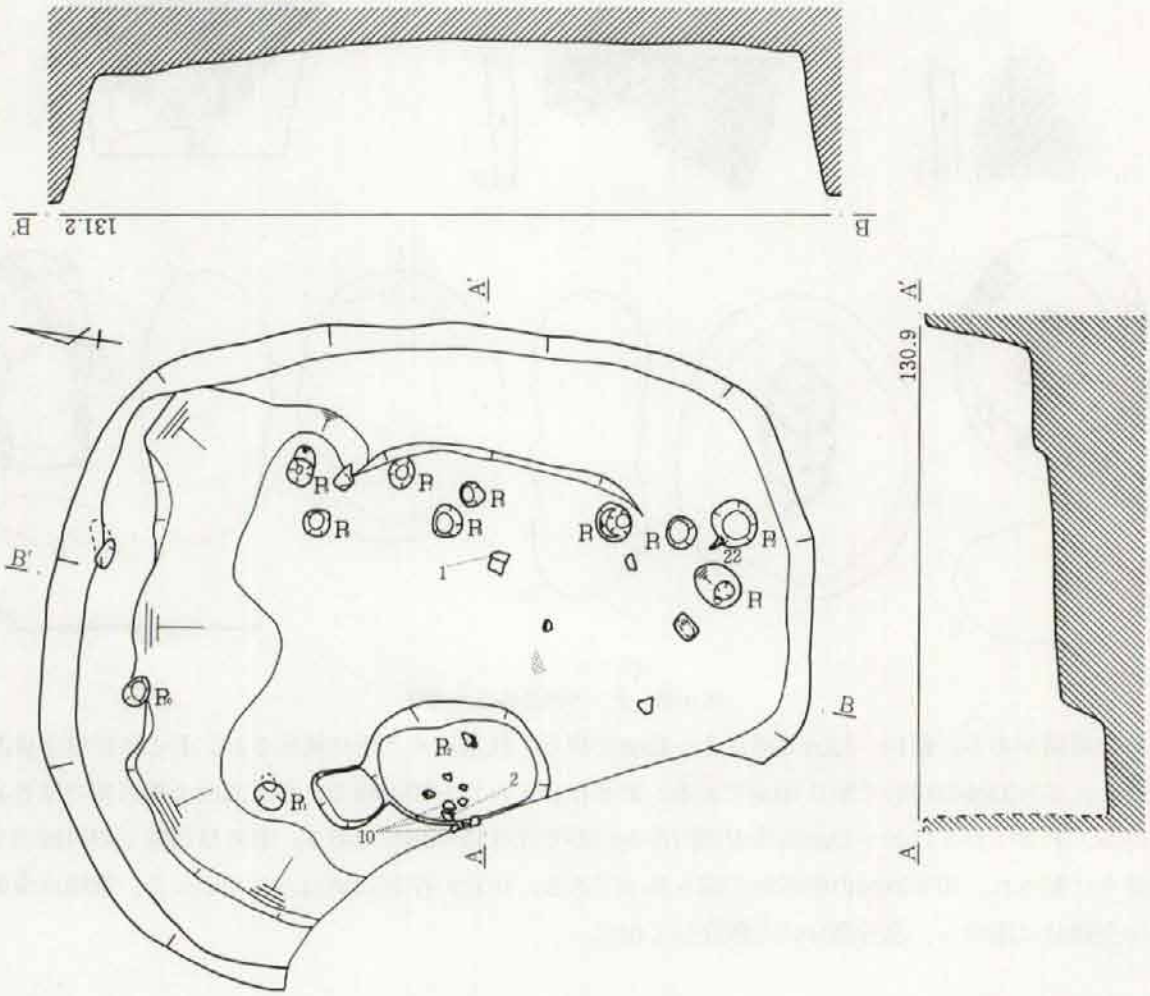
Ｊ２号住居跡出土石器法量

番号	種　類	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	番号	種　類	長さ	幅	厚さ	重量	石　質
9	磨　石	9.7	7.9	5.4	565	輝石安山岩	10	磨　石	12.1	9.8	4.5	712	輝石安山岩
11	磨　石	10.7	8.2	5.2	609	輝石安山岩	12	石　斧	8.6	4.6	2.3	102	デイサイト

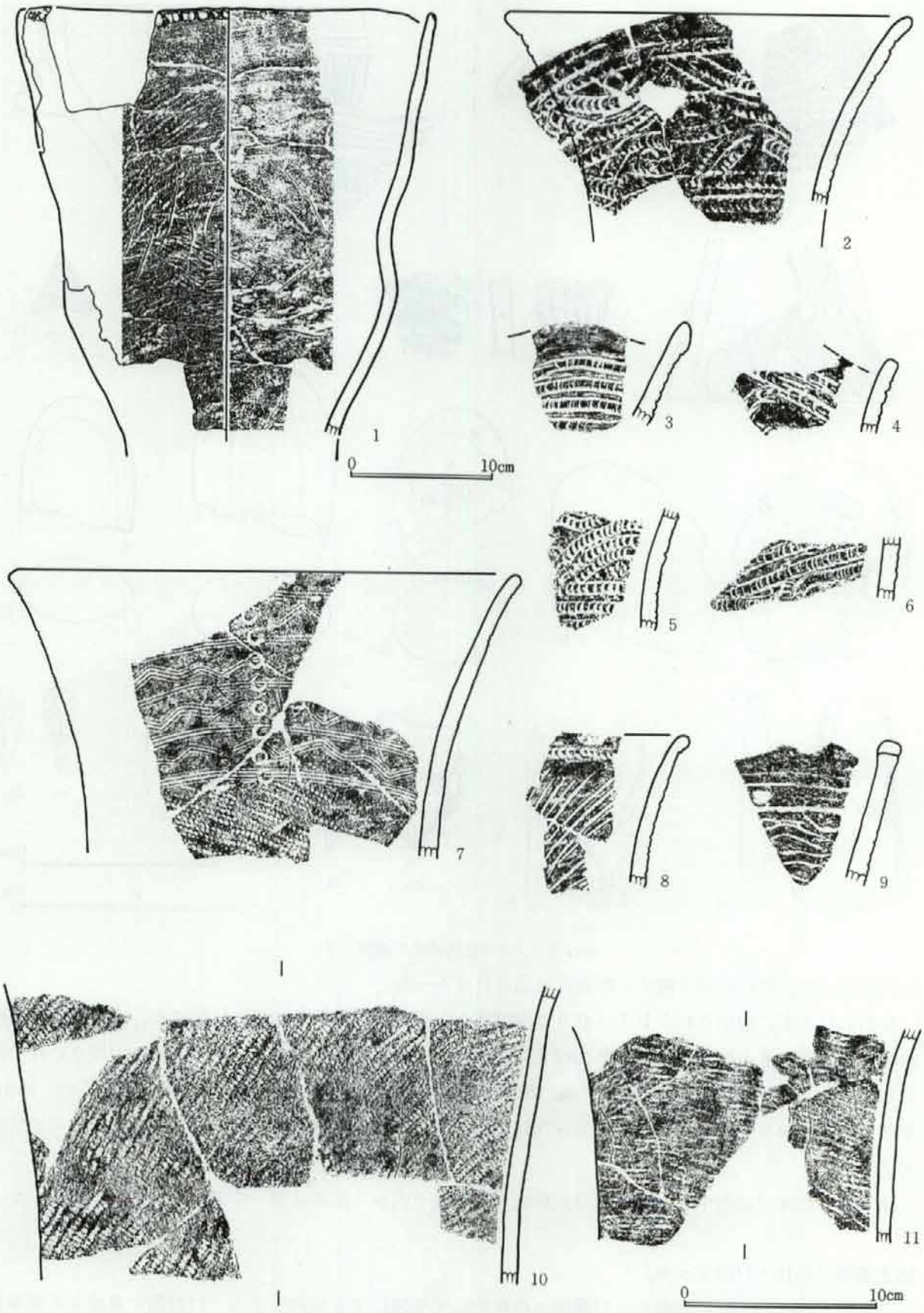
Ｊ３号住居跡（第９図）

Ｉ調査区の東方ＢＣ―67・68Ｇにその大半を占め、標高131.00～131.20m間の緩やかな東傾斜面に検出された。北西方向に18号住居跡が位置する。

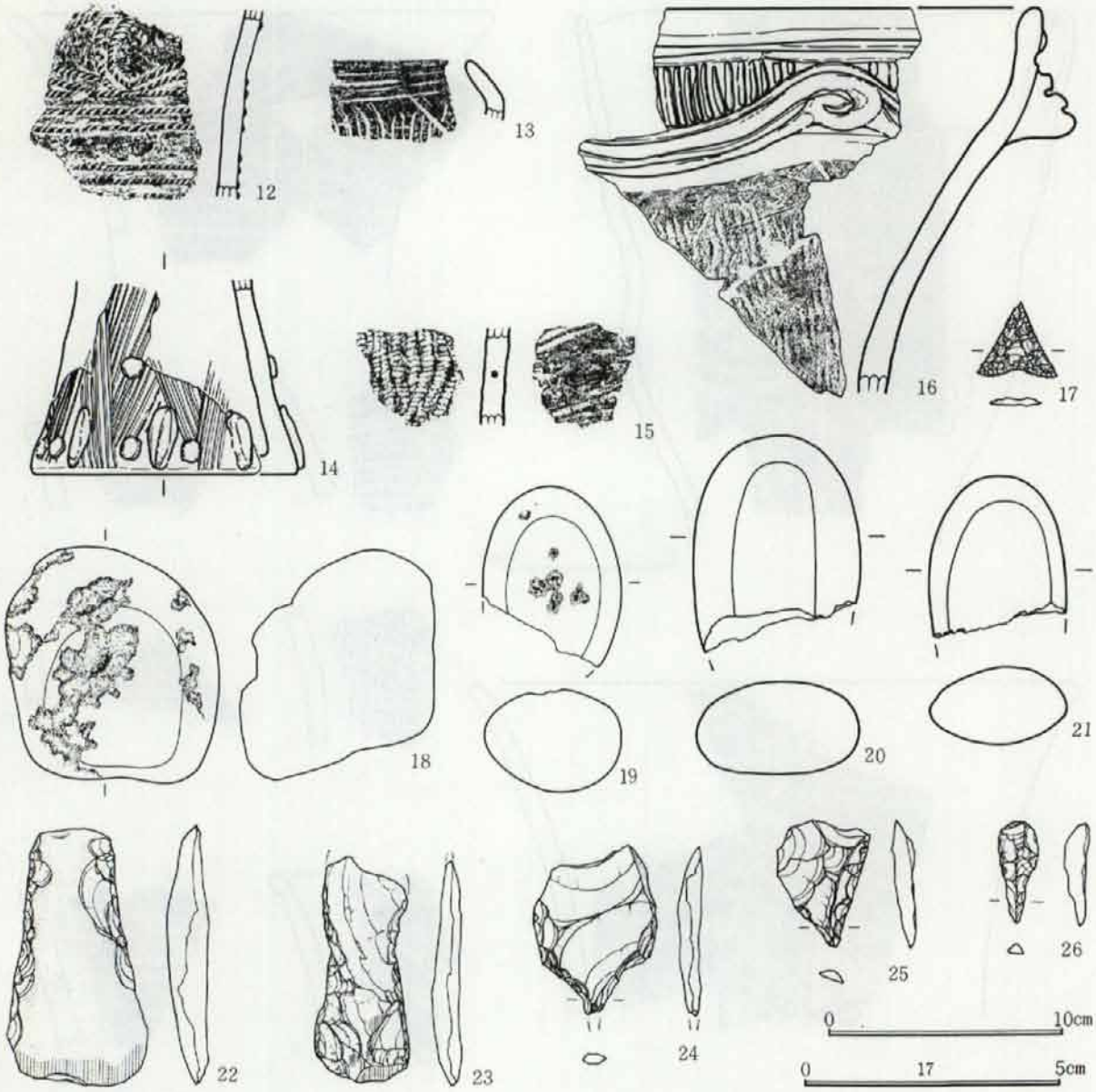
形状は南西部分が調査区外であるが、南北に長い隅丸長方形を呈すると考えられる。掘り込みは南壁で1.13m、南東隅が95cm、北壁中央部分で1.01mである。規模は南北長6.08m、東西長5.35m前後を測る。床面は東壁に併走して10cm程の段が2.3m程あり、重複する住居跡の可能性がある。北方では緩やか



第９図　Ｊ３号住居



第10図　Ｊ３号住居跡出土遺物（１）



第11図　Ｊ３号住居跡出土遺物（２）

な傾斜面が中央部に向けて続く。周溝は検出されなかった。

柱穴は11カ所に検出され、Ｐ１～Ｐ９は南壁下から東壁沿いの段差に部分に配され、20～40cmの円形か楕円形で深さ８～44cmである。Ｐ10は北方の傾斜面への変換部に配され、Ｐ11は斜めの掘り込みで深さ43cmである。中央部の西には南北に長い楕円形の土坑状掘り込みＰ12がある。規模は南北長い1.45m、東西長97cmで深さ40cmを測る。炉址の存在は中央部やや南寄りに分布する焼土部分に地床炉の可能性が考えられる。

遺物はＰ12部分に集中し、南方部分に散在する。覆土内から前期後葉～中期中葉の遺物が出土した。

出土遺物（第10・11図１～26）

１は胴部がくの字状に屈曲し、口縁部が直線的にやや開口する深鉢形土器。口唇部に連続する刻み目を施し、ＬＲの斜縄文を施す。内面は器面調整の削痕が残る。２～６は連続爪形文を伴う平行沈線で文

様を意匠する。3と4は波状を呈する口縁部片。7は平口縁を呈し、4条1組の条線を5段に横位に施し、条線文間に同施文具で鋸歯文を描き、恐らく4単位で円形刺突文を垂下させる。8は口縁部文様帯を連続爪形を伴う平行沈線で区画し、区画内に沈線で肋骨を施す。9は山形突起を付す口縁部片で、平行沈線により波状文を施す。10はＬＲの縄文を充填する胴部片。12は連続する刻み目を施す隆線で文様を意匠する諸磯ｂ式。13はくの字状に屈曲する口縁部片で、平行沈線で文様を意匠する。14は集合条線を矢羽状に施し、円・棒状の貼付文を付す諸磯ｃ式の所産。15は前期初頭の所産。16は隆帯により渦巻文と区画文を施し、区画内を縦位の沈線で充填する加曽利Ｅ２式の所産。石器は、石鏃1点、多孔石1点、磨石3点、打製石斧2点、石錐2点、掻器1点がある。

土器様相から本住居跡は、前期諸磯ｂ～ｃ式期の所産と考えられる。

Ｊ３号住居跡出土石器法量

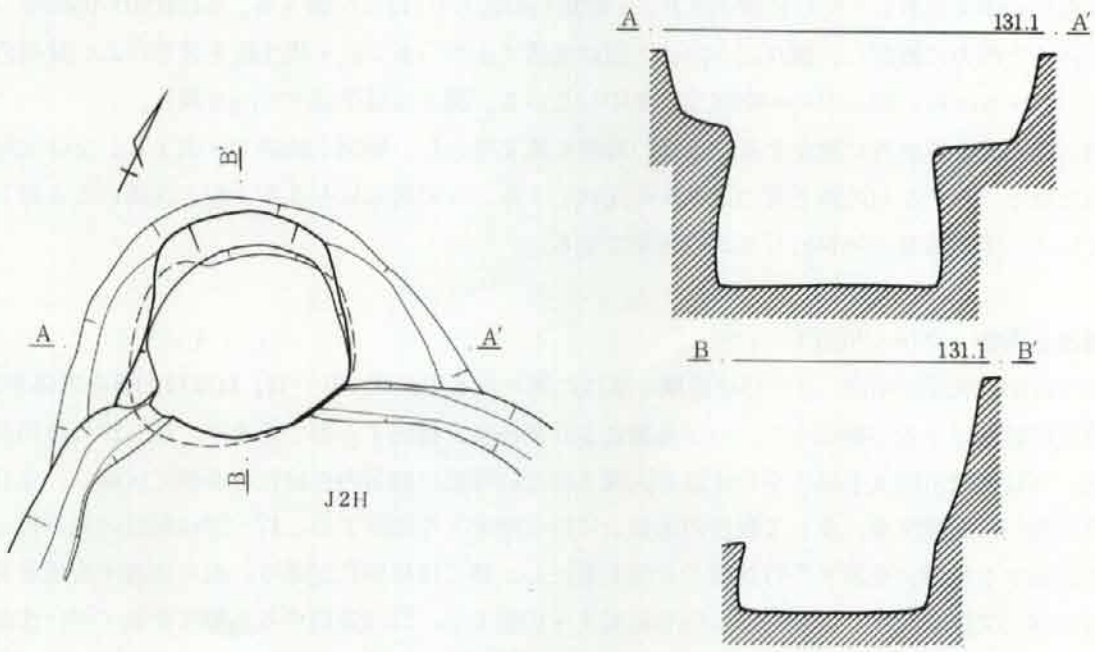
番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質	番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質
17	石鏃	1.4	1.4	0.2	0.3	チャート	18	多孔石	10.3	9.3	8.4	1006	輝石安山岩
19	磨石	7.8	6.0	4.5	210	輝石安山岩	20	磨石	9.4	7.3	5.2	418	輝石安山岩
21	磨石	7.0	5.9	3.5	172		22	石斧	11.2	6.1	1.7	133	緻密質安山岩
23	石斧	9.8	4.2	1.2	50	デイサイト	24	石錐	7.3	5.4	0.9	37	緻密質安山岩
25	石錐	5.5	4.1	0.8	15	デイサイト	26	石錐	4.4	1.7	1.0	6	砂岩

1号土坑（第12図）

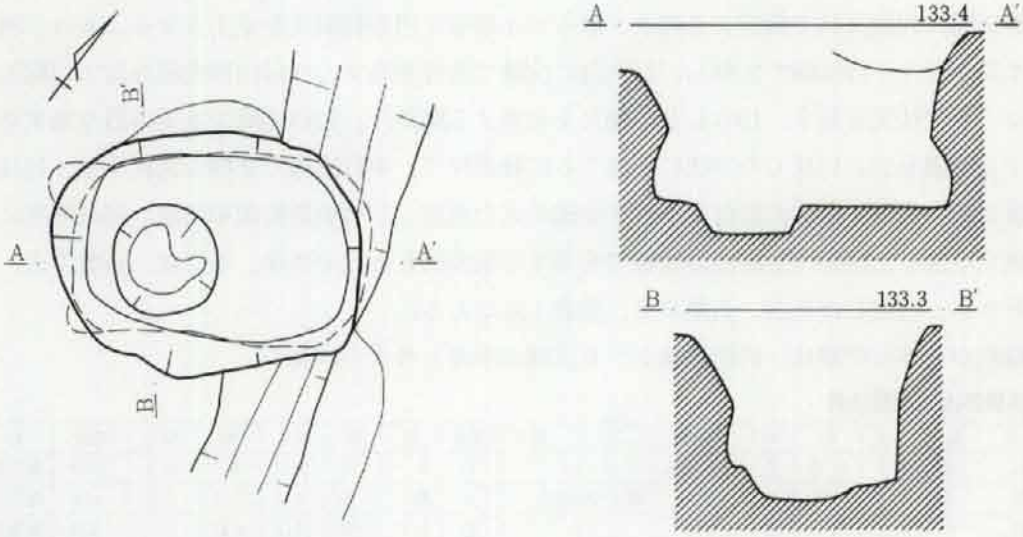
Ｉ調査区で検出されたＪ２号住居跡の北西部、ＢＡ―61Ｇに位置する。2段状の掘り込みを呈し、上部は下部は南北に長い隅丸方形の形状で、南北最大長1.28m東西長2.3mで深さ1.25mを測る。壁面はやや袋状となる。床面は平坦である。出土遺物は皆無であった。

2号土坑（第13図）

Ⅳ調査区の3号溝に切られ、1号住居跡と3号住居跡間の傾斜面のＤＦ―41Ｇに位置する。傾斜方向に長い隅丸方形を呈する。規模は長軸長1.65cm、短軸長1.46cmを測り、掘り込みは袋状とし、最深部で1.06cmを測る。床面の南方に浅い掘り込みを有する。出土遺物は皆無であった。



第12図　1号土坑



第13図　2号土坑

1号集石土坑（第14図）

Ⅰ調査区の中央部ＢＢ—63Ｇに検出され、標高131.20m付近の平坦部に位置する。北方に2号集石が隣接し、南西にＪ2号住居跡、北西にＪ1号住居跡が配されている。

集石は長軸長85cm、短軸長68cmの楕円形の掘り込み内の上面をほぼ覆い、中央部に水平に据えられた2石を囲む様に周縁部に礫を配している。

遺物は集石間と周辺のグリットで検出された。底部から口縁部に至る破片から有孔鍔付土器と考えられる。内面には朱彩が施され、胴部は隆帯で文様を意匠する。

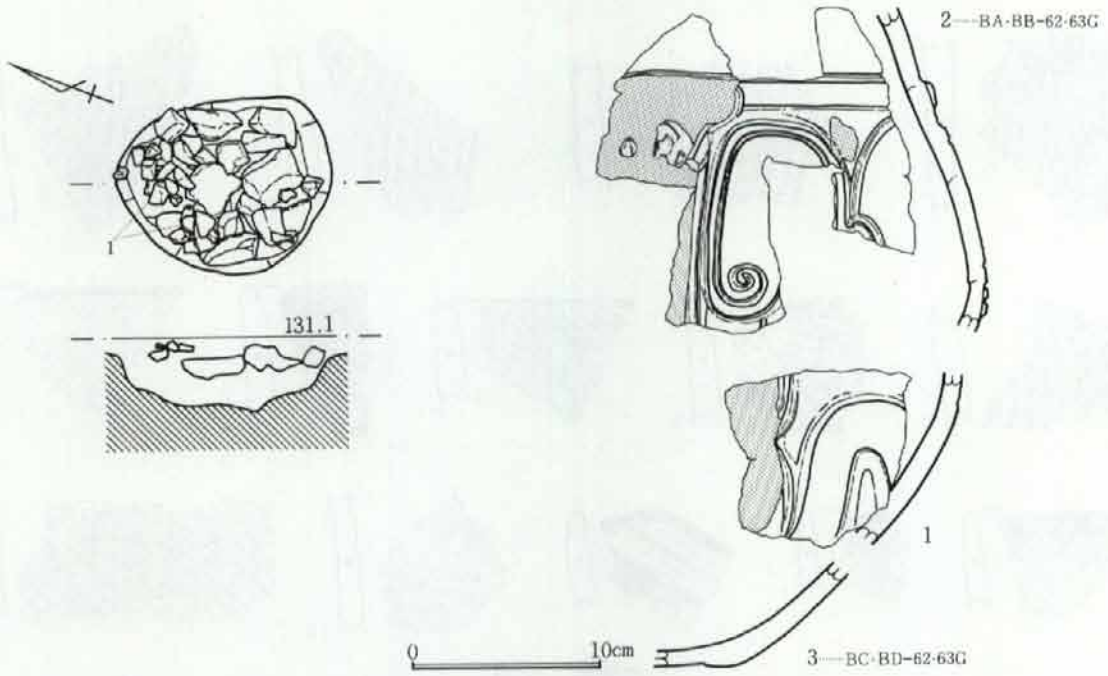
2号集石土坑（第15図）

Ⅰ調査区の中央部ＢＣ—63Ｇに検出され、1号集石の北方1.7mに位置する。集石は90～95cm程の円形の掘り込みと西方に散在し、掘り込み内は上面に堆積するカーボン粒・焼土粒を含むにぶい黄褐色土に配され、25～6cm程の礫が中央～南西部に集中している。深さは最深部で37cmを測る。

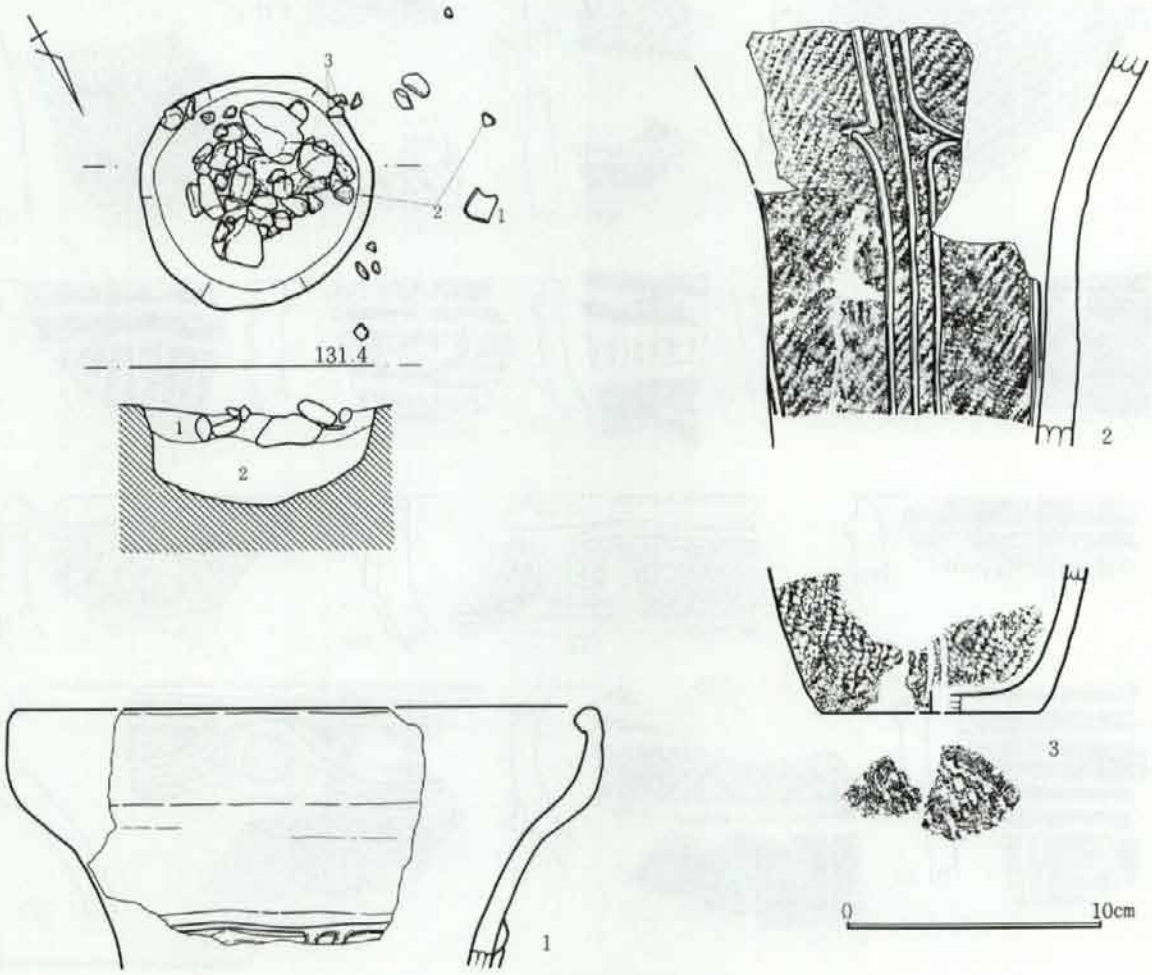
遺物は集石間と遺構外に散在する。1は口縁部を無文帯とし、胴部を隆帯で区画する。2は沈線で3本1組で垂下させ、左右の垂下文の途中を剣先状とする。3の底部にも3本1組の沈線による垂下文を施している。中期後葉の加曽利Ｅ2式の所産である。

包含層出土遺物（第16～20図1～128）

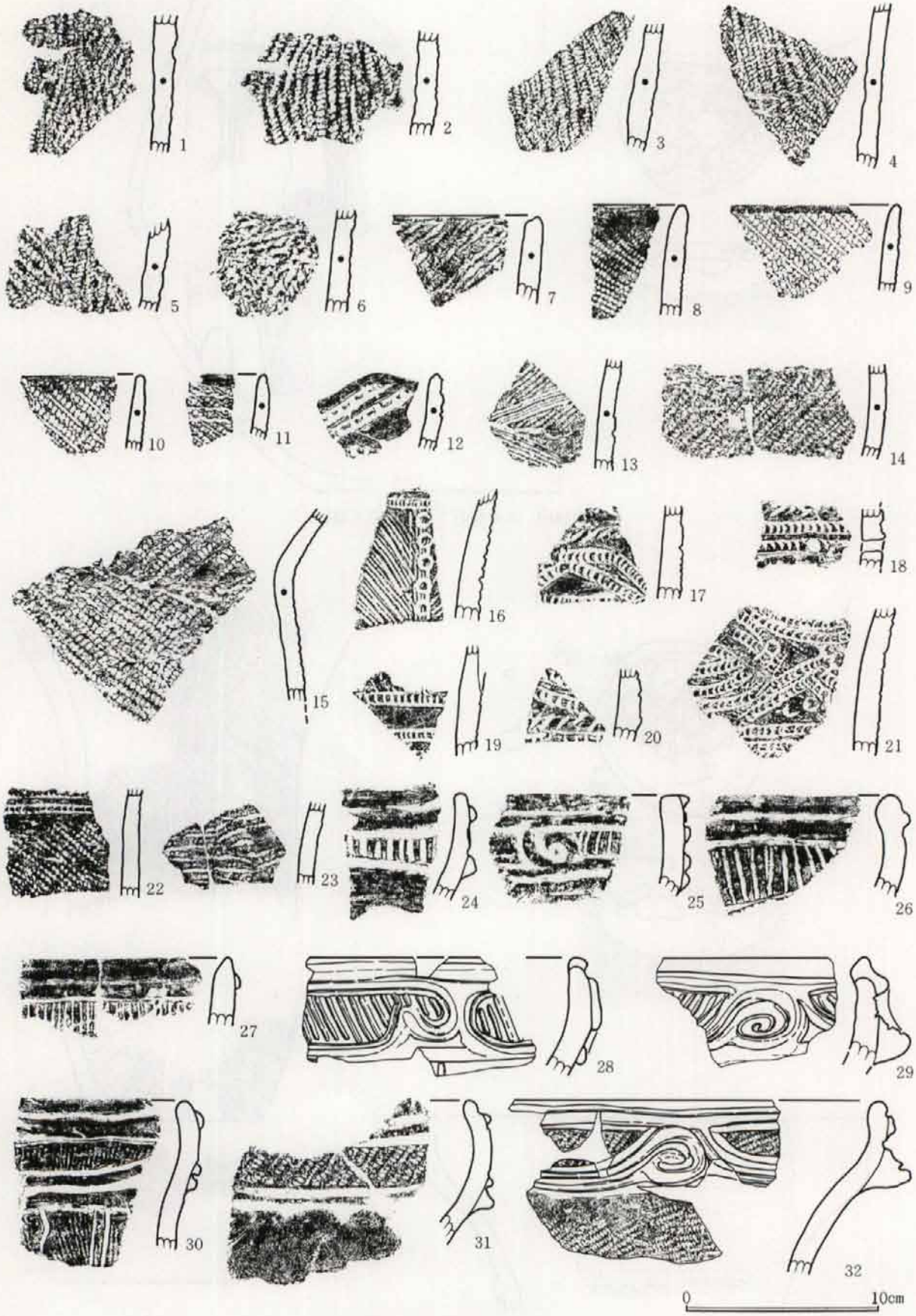
1～5は前期初頭の所産、6～15は前期中葉に比定される黒浜式。9～11，14は付加条の原体を施す。12は波状口縁を呈する口縁部片で、13は条線により菱形文を構成するのであろう。16～23は前期後葉の諸磯式。16は連続爪形文を施す平行沈線で区画された口縁部文様帯内を縦位の条線で区画し、左右対称に条線を斜位に充填する。そして縦位の条線上に円形刺突文を加飾する。17～20は斜位の刻み目を施す隆帯と連続する爪形文を施す平行沈線で文様を意匠し、18には補修孔がある。21は連続する爪形文を施す平行沈線で文様を意匠し、空間部に円形刺突文を加飾する。22は連続する爪形文を施す平行沈線で文様帯を区画し、胴部にＲＬの斜縄文を施す。23は　24～77は中期後葉の加曽利Ｅ2式。24～29は隆帯に



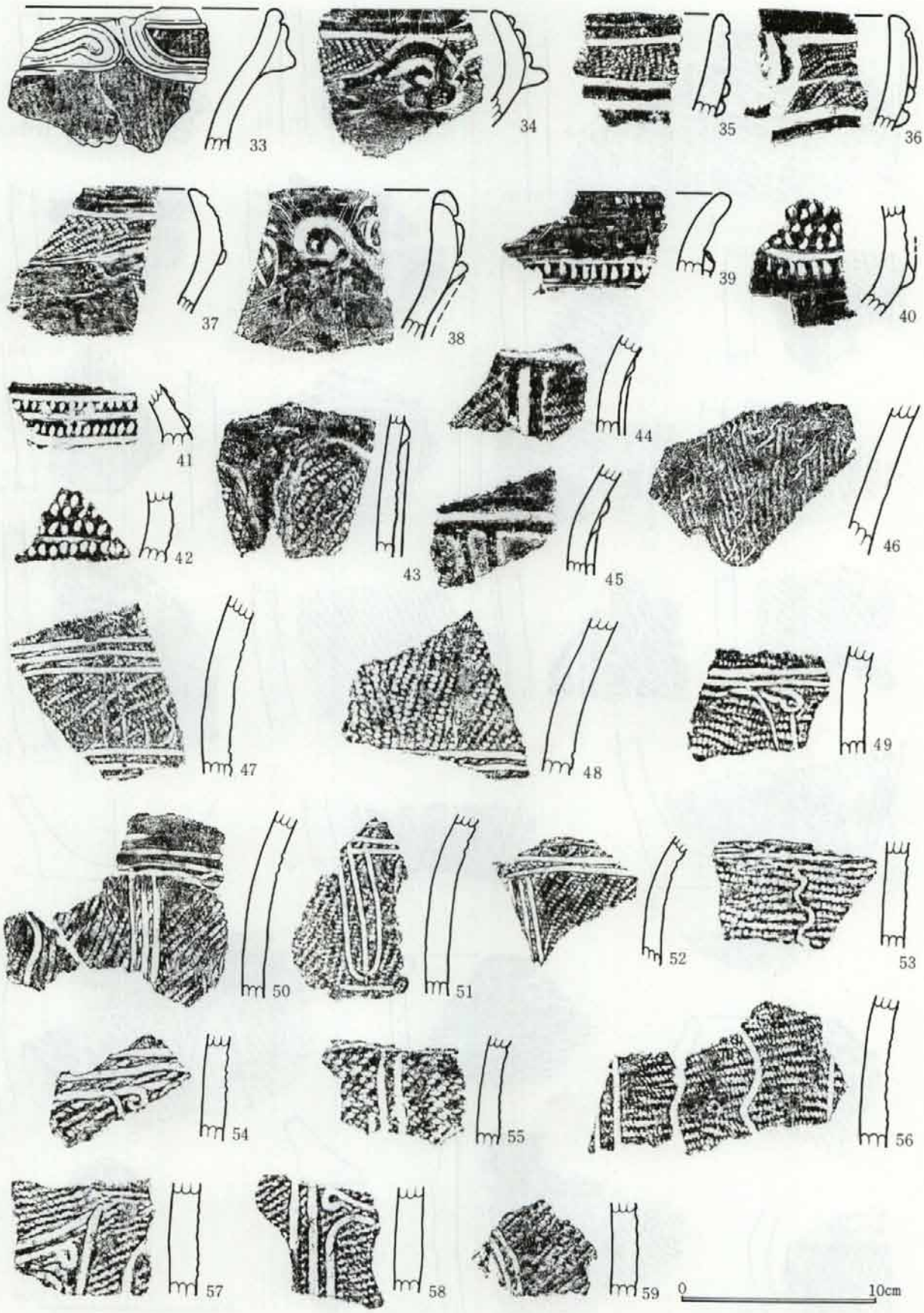
第14図　1号集石土坑・同出土遺物



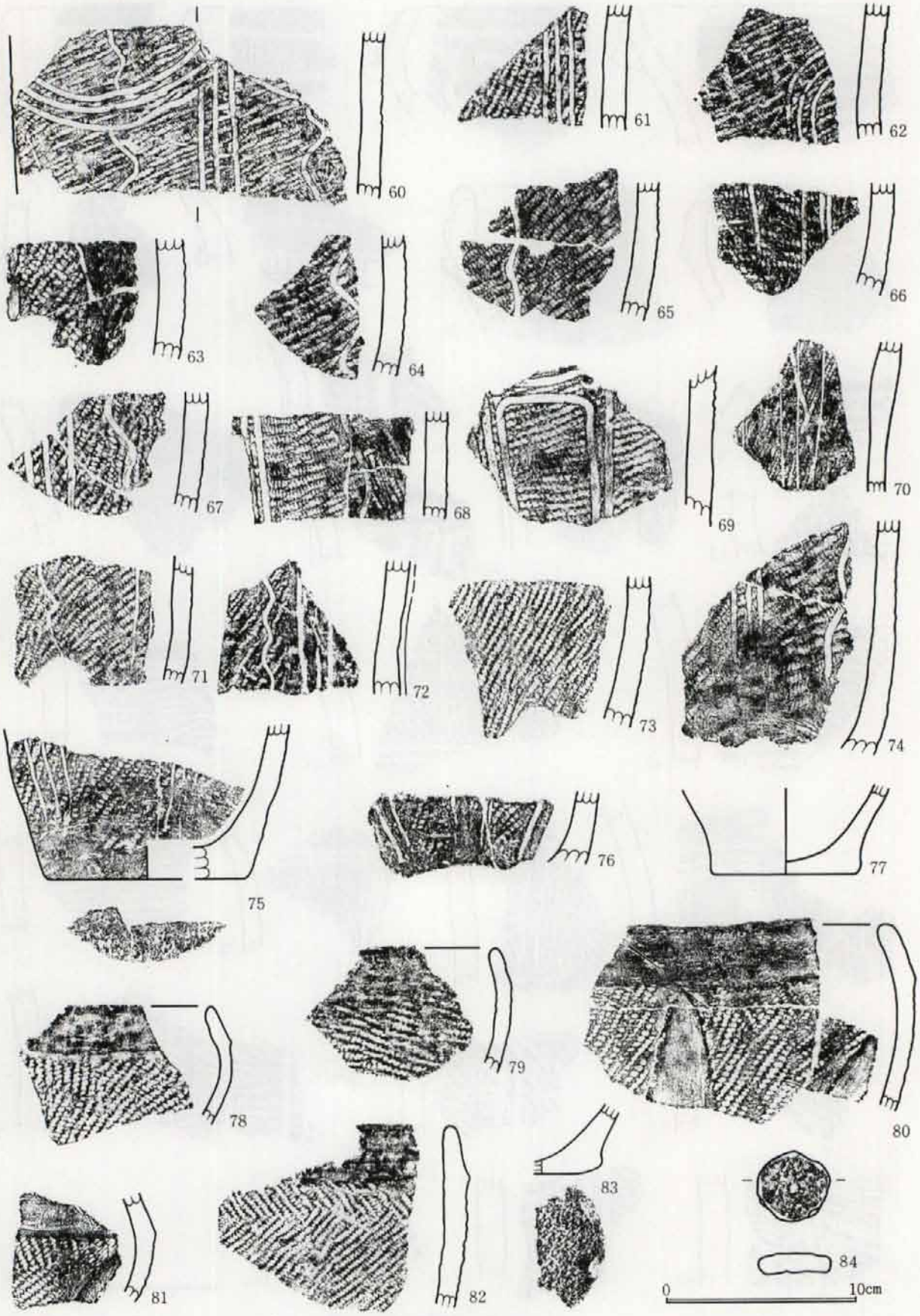
第15図　2号集石土坑・同出土遺物



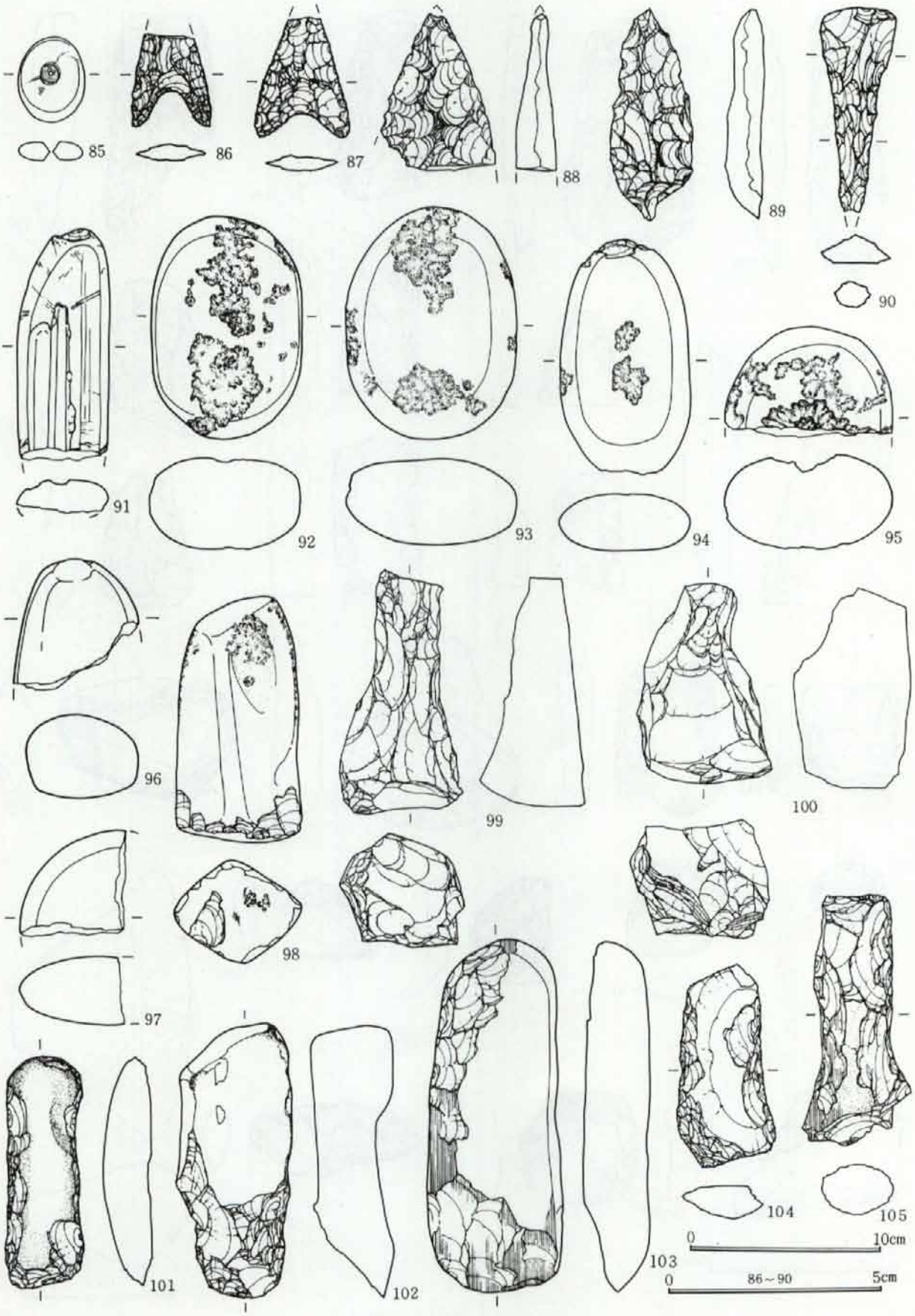
第16図　包含層出土遺物（1）



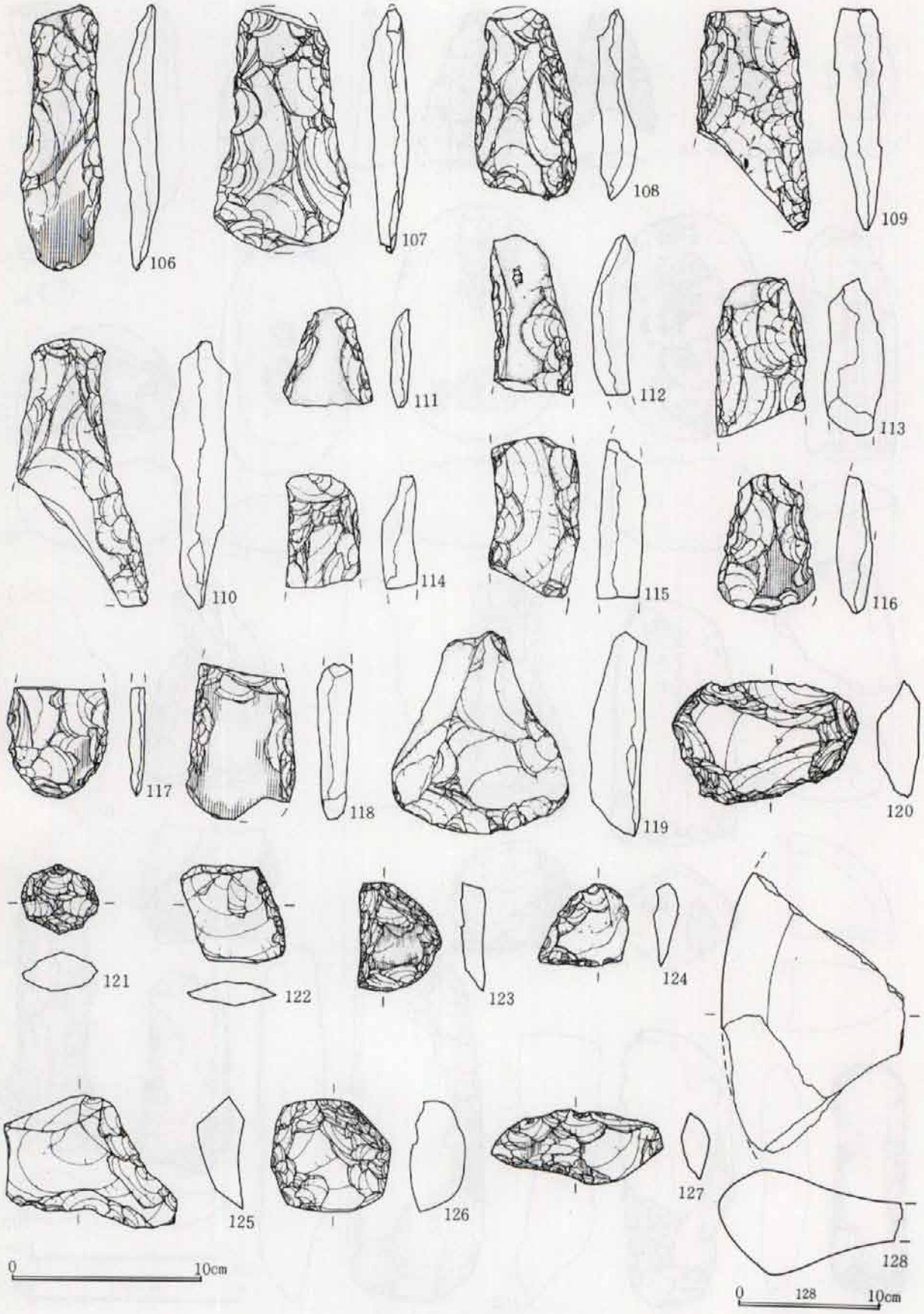
第17図　包含層出土遺物（2）



第18図　包含層出土遺物（3）



第19図　包含層出土遺物（4）



第20図　包含層出土遺物（5）

よる口縁部文様帯の楕円区画内を縦位か斜位の沈線で充塡する口縁部片。30～37は楕円区画内を縄文で充塡する。39～42は隆帯上や沈線文間に連続する刺突文を施す。43～77は頸部から底部片で、その大半が沈線により文様帯を区画して胴部には２～３本１組の懸垂文や蛇行懸垂文を施す。54、57と58には端部を渦巻文とする施文が見られる。78～82は口縁部に無文部を設ける加曽利Ｅ４式。83は後期の所産と考えられる底部片。84は土製円盤。

85は石垂。86～89は石鏃。90は石錐。91は有溝砥石。92～96は磨石。98と99は凡字型石器。128は石皿片。

包含層等出土石器法量

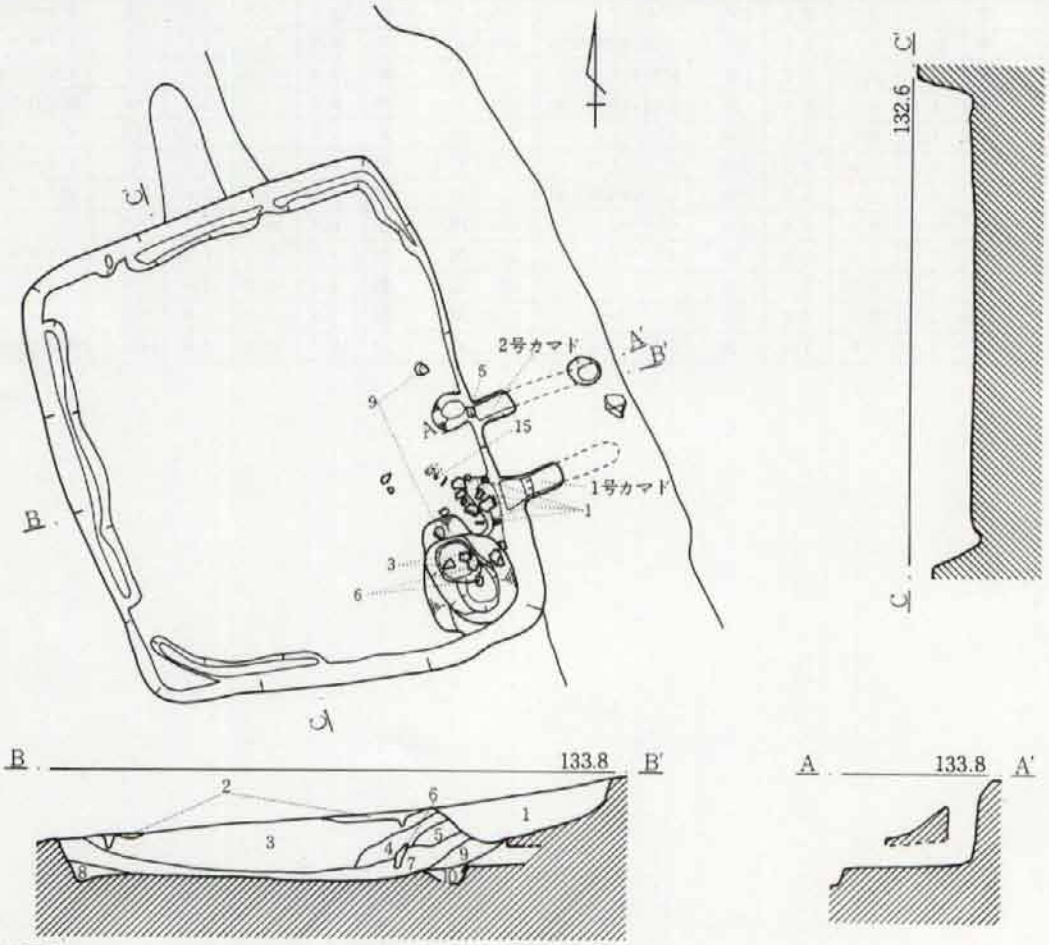
番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質	番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質
85	垂飾	4.4	3.4	0.9	23.4		86	石鏃	(2.1)	1.9	0.2	1.3	頁岩
87	石鏃	(2.8)	2.2	0.2	1.8	黒色頁岩	88	尖頭器	(3.3)	(2.7)	0.9	7.3	黒耀石
89	石鏃	4.0	1.9	9.7	8.5	チャート	90	石錐	(4.8)	1.8	0.7	0.5	
91	砥石	12.2	4.8	1.7	150		92	磨石	11.7	7.9	4.8	694	輝石安山岩
93	磨石	12.2	9.0	4.6	743	輝石安山岩	94	磨石	12.3	6.8	3.0	373	輝石安山岩
95	磨石	5.9	8.9	4.9	306	輝石安山岩	96	磨石	6.9	6.6	5.0	202	輝石安山岩
97	磨石	5.6	5.5	3.7	139	輝石安山岩	98	叩石	12.9	6.7	5.3	635	
99	叩石	12.9	6.4	5.7	441	デイサイト	100	スタンプ形石器	10.5	7.2	6.3	597	デイサイト
101	石斧	12.3	4.1	2.5	167	安山岩質凝灰岩	102	石斧	14.6	6.1	4.7	512	
103	石斧	18.8	7.1	3.5	864		104	石斧	10.7	5.2	1.8	121	安山岩質凝灰岩
105	石斧	13.2	5.7	2.7	210	デイサイト	106	石斧	13.8	4.3	1.8	126	安山岩質凝灰岩
107	石斧	12.6	7.1	1.7	177	安山岩質凝灰岩	108	石斧	10.0	5.3	1.7	102	デイサイト
109	石斧	11.5	5.8	2.4	148	緻密質安山岩	110	石斧	13.9	6.9	3.0	219	安山岩質凝灰岩
111	石斧	5.1	4.7	1.1	30	安山岩質凝灰岩	112	石斧	8.4	4.1	2.0	88	緻密質安山岩
113	石斧	8.2	4.8	3.1	152	デイサイト	114	石斧	5.9	3.9	1.8	51	デイサイト
115	石斧	8.3	4.8	2.2	124	デイサイト	116	石斧	7.2	5.0	1.7	62	デイサイト
117	石斧	5.7	5.2	1.0	39	安山岩質凝灰岩	118	石斧	8.1	5.7	1.6	104	デイサイト
119	石斧	10.6	9.3	2.8	231	デイサイト	120	削器	6.4	9.7	2.3	157	
121	削器	3.6	4.0	1.9	26	デイサイト	122	削器	5.0	5.4	1.3	32	デイサイト
123	削器	5.6	4.3	1.3	42		124	削器	4.3	4.8	1.3	24	デイサイト
125	削器	7.0	9.2	2.4	123		126	削器	5.9	6.2	3.0	150	
127	削器	3.9	8.9	1.5	48	デイサイト	128	石皿	19.5	12.8	7.8	1435	輝石安山岩

Ⅳ　古墳時代の遺構・遺物

1号住居跡（第21図）

Ⅲ調査区の北方に位置するＤＧ—40Ｇの標高133.20～133.50ｍの緩やかな南西傾斜面に検出された。東辺と中央部分に溝状の掘り込みが過り、南西に３ｍ離れて２号住居跡、南東方向に６ｍ離れて３号住居跡が隣接する。

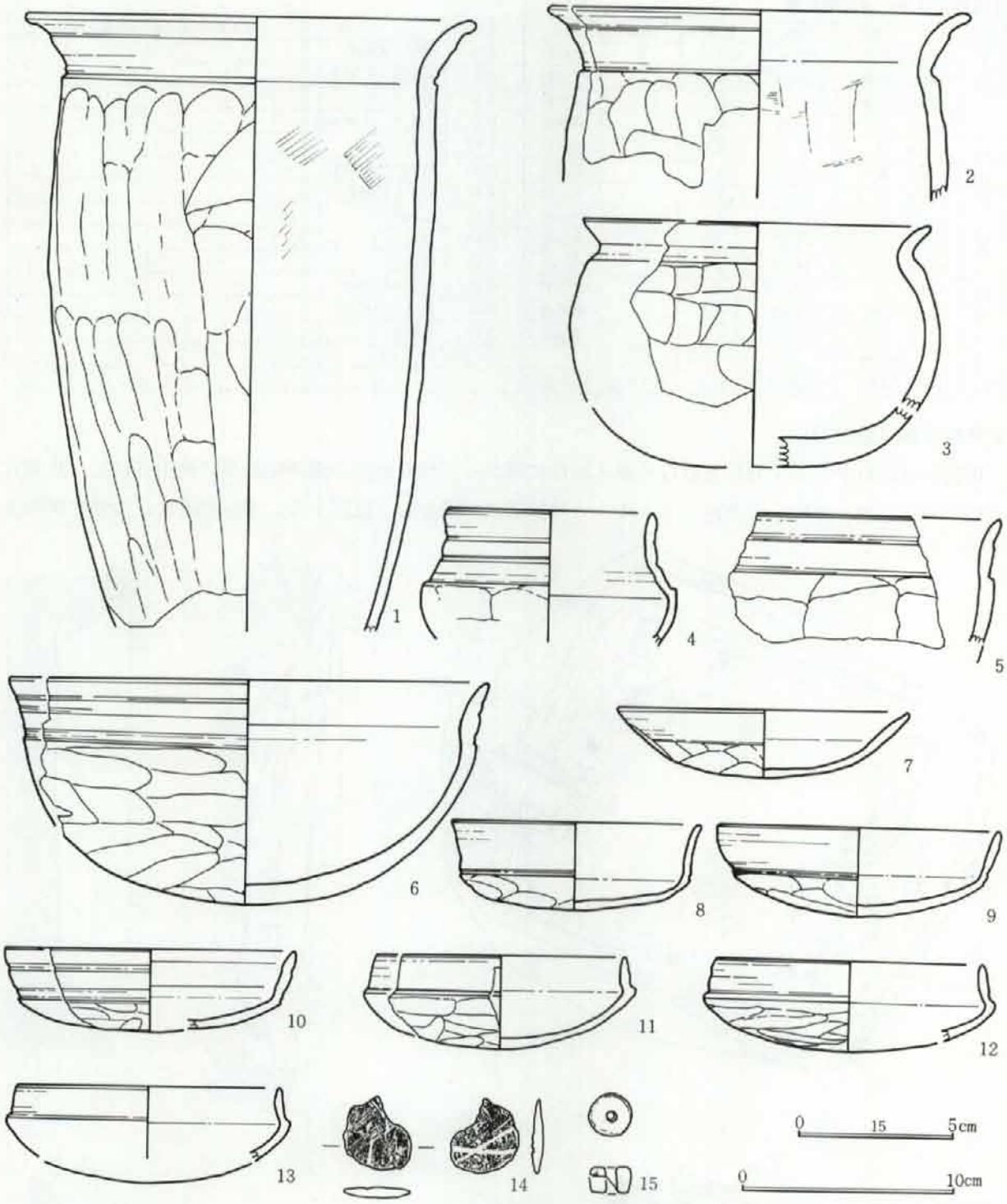
形状は南北に長い隅丸長方形を呈し、西辺が短い。規模は長軸長4.1ｍ、短軸長3.33ｍを測る。主軸は、Ｎ—69°—Ｅにとる。掘り込みは、最深部の南東隅で51㎝、最浅部の北西隅で29㎝が残存する。床面は、ほぼ平坦なローム面である。周溝は、途切れ途切れの状態で検出され、北東隅と北壁下は２㎝の深さで、南隅部分で８㎝の深さを測る。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に配され、規模は75×60㎝の南北にやや長い隅丸方形で、内部に８の字状に重複する掘り込みがある。南方部は40×30㎝の円形、北方部は35×30㎝の隅丸方形で北方部が南方部より９㎝ほど深い。遺物等の出土状況から南から北へ作り替えがなされたと考えられる。このことは、カマドの作り替えに伴う行為によるカマドと貯蔵穴のセット関係で造作が行われたことが看取される。カマドは東壁に２カ所に検出されたが、前記した様に作り替えによる結果である。１号カマドは中央やや南よりに構築され、壁面を刳り貫いたトンネル状の煙道



１号住居跡土層註

1、溝状遺構　2、耕作土　3、黒褐色土　少量のＦＰを含む　4、黒褐色土　3層より明るい　5、暗褐色土　黒褐色土と少量のローム粒を含む　6、黒褐色土Ｂ　7、暗褐色土　ローム粒・ロームＢを含む　8、黄褐色土　全体にソフトで暗褐色土を含む　9、黄褐色土　ローム粒と暗褐色土を含む　10、灰褐色粘土　焼土粒を含む

第21図　１号住居跡



第22図　1号住居跡出土遺物

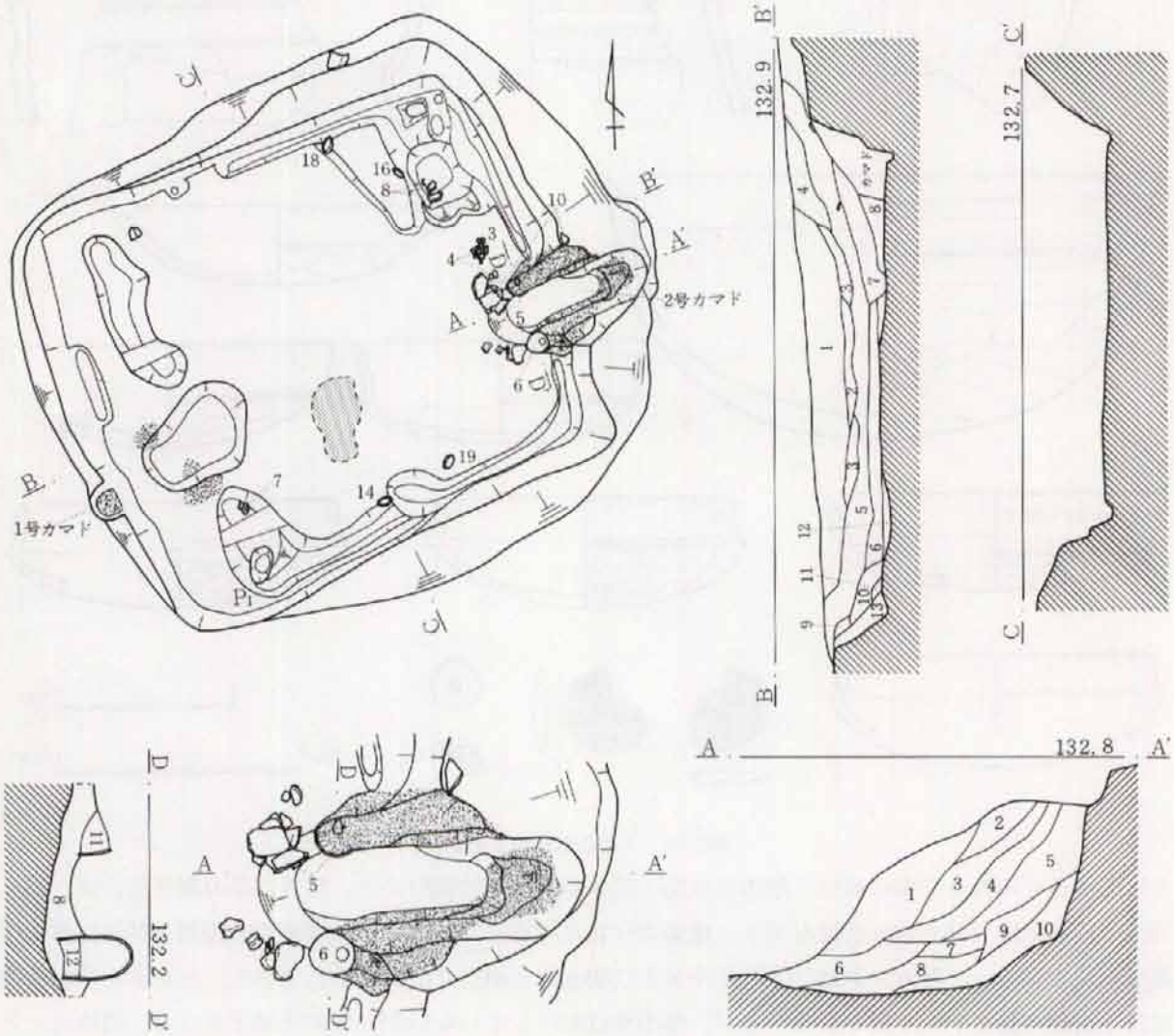
を1.05mほどの長さで東に設け、煙出部は25×22cmの楕円形で開口する。焚き口部の掘り込みは、25×30cmの円形気味で深さ10cm前後を測り、煙道より北に片寄って位置する。煙道部の側面と焚き口部に披熱部が見られる。2号カマドは、1号カマドより50cmほど南寄りに構築されている。トンネル状の煙道部は1m程の長さが刳り貫かれているが、煙出部は開口していない未完成の状態であった。遺物は、カマドの前面と貯蔵穴部分に集中して出土した。

1号住居跡出土遺物観察表

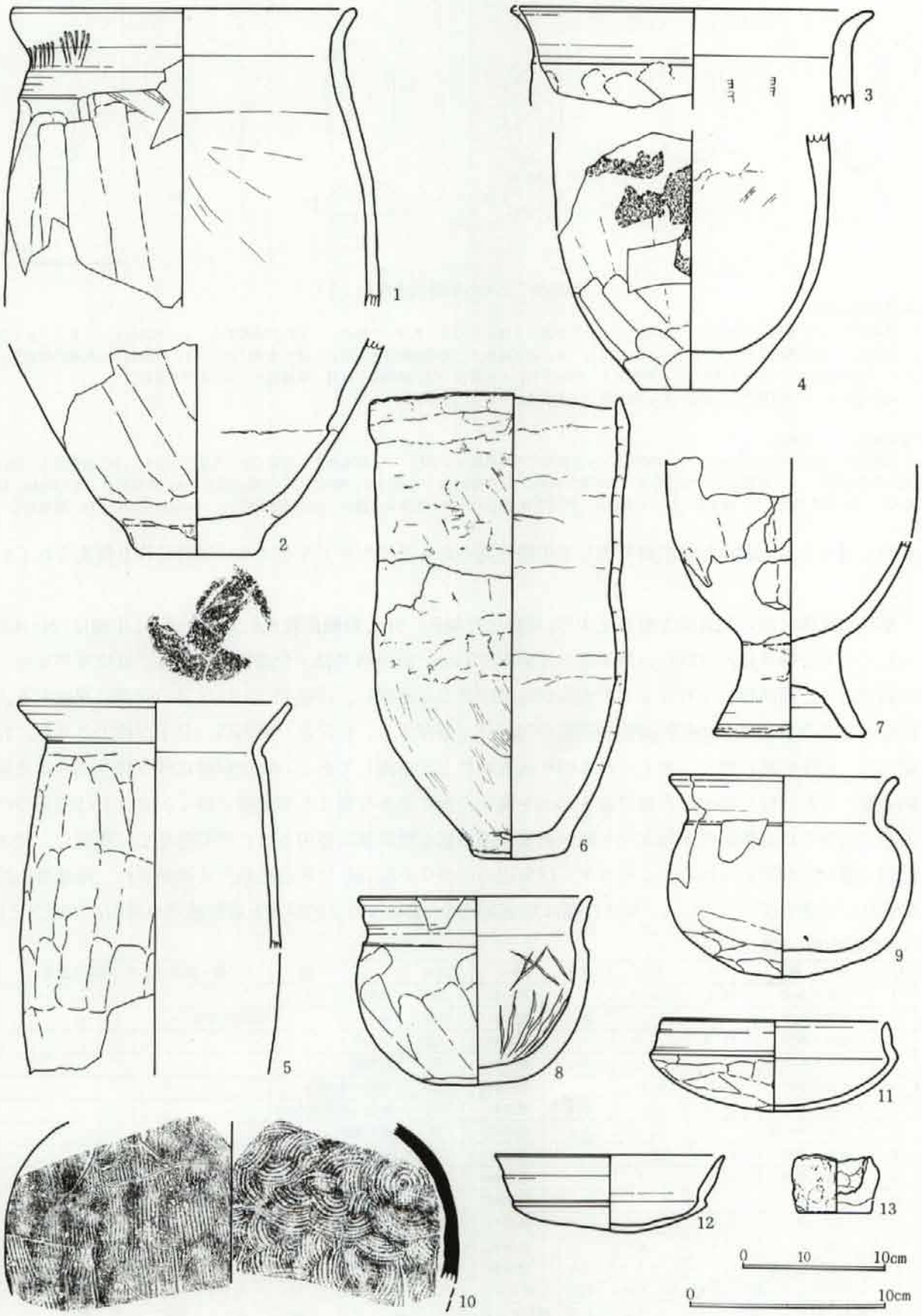
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕	(21.0)	〈29.3〉		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	
2	土師器長胴甕	(19.8)	〈 9.0〉		粗砂粒	良好	淡褐色～赤褐色	
3	土師器小型甕	(16.3)	(11.7)	(7.0)	粗砂粒	良好	淡褐色	
4	土師器　坏	(9.7)	〈 6.3〉		粗砂粒	良好	赤褐色～赤黄褐色	
5	土師器　鉢		〈 6.3〉		粗砂粒	良好	褐色	
6	土師器　鉢	(22.7)	10.8		粗砂粒	良好	淡褐色～黒褐色	
7	土師器　坏	(13.8)	3.3		粗砂粒	良好	くすんだ褐色	
8	土師器　坏	(11.7)	4.2		微砂粒	良好	赤褐色	
9	土師器　坏	13.7	4.3		粗砂粒	良好	淡褐色	
10	土師器　坏	(14.0)	4.1		微砂粒	良好	暗褐色	
11	土師器　坏	(12.0)	4.6		粗砂粒	良好	褐色～暗褐色	
12	土師器　坏	(12.6)	(4.4)		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	
13	土師器　坏	(12.4)	〈 3.5〉		微砂粒	良好	黒褐色	
14	粘土塊							
15	石製品 白玉	口径1.4	高0.9	重さ2.1g	石質滑石			

2号住居跡（第23図）

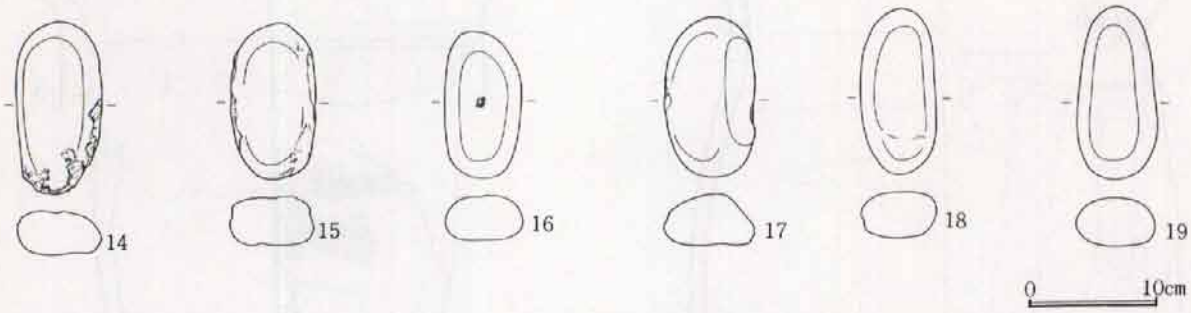
Ⅲ調査区のＤＦ—38・39ＧとＤＧ—38・39Ｇに跨がり、標高m間の南西傾斜面に検出された。北東方向に１号住居跡、南東～南方向に３・４・６号住居跡が隣接して位置する。本住居跡は、西壁に構築さ



第23図　２号住居跡



第24図　2号住居跡出土遺物（1）



第25図　２号住居跡出土遺物（２）

２号住居跡土層註

1、黒褐色土　ＦＰを均一に含む　2、黒褐色土　ＦＰを含み１層より明るい　3、黒褐色土　ＦＰが点在する　4、黒褐色土　ＦＰ・ＦＡを含む　5、黒褐色土　暗灰褐色土ＢとＦＰ・ＦＡが点在する　6、暗灰褐色土　灰白色粘質土・ロームＢを多量に含む　7、暗褐色土　灰褐色粘質土を含む　8、暗褐色土　ロームＢを含む　9、暗褐色土　灰白色粘質土を含む　10、暗褐色土　11、暗褐色土　ロームＢを含む　12、暗灰褐色土　灰白色粘質土を含む　13、暗褐色土　全体にソフト

２号住居跡カマド土層註

1、暗褐色土　灰白色粘土を含む　2、暗褐色土　やや砂質で灰白色粘土を含む　3、暗褐色土　砂質で灰白色粘土を含む　4、暗褐色土　灰白色粘土を多量に含む　5、暗褐色土　焼土粒・カーボン粒を含む　6、暗褐色土　砂質　7、暗褐色土　2層に似る　8、暗褐色土　焼土B・粒、ローム粒・カーボン粒を含む　9、焼土B　10、暗褐色土　焼け土B・粒、ロームBを多量に含む　11、灰白色粘土　ローム粒を含む　12、暗褐色土　粒状

れた１号カマドを設けた住居跡を壊して東壁に見られる２号カマドを有する住居跡に作り替えられている。

形状は東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は長軸長4.9m、短軸長最大4.35mを測る。主軸は、N—65°—Eにとる。掘り込みは残存の最深部の北東隅で95cm、南西隅で42cmを測る。床面は、ほぼ平坦なローム面である。周溝は、１号カマドの両脇が長軸中央部に連続し、南壁では旧住居跡の周溝に連結する。西壁の中央やや北寄りに新住居跡の周溝が70cmほど残存する。柱穴は、南西隅のＰ１が検出された。貯蔵穴は、旧住居跡に伴うと考えられる掘り込みがＰ１と重複してある。新住居跡に伴う掘り込みは北東隅に設けられ、52×40cmの方形で深さ35cmを測り、西に僅かな高まりが北壁に続く。カマドは西辺の中央やや南寄りに拡張前の１号カマド跡がある。両袖部と燃焼部に使用された灰褐色粘土が残留し、焚き口部の掘り方が認められる。２号カマドは東辺の中央やや南寄りに灰白色粘土に構築され、両袖部先端の芯材に長甕を使用している。焚き口幅は32cmを測る。遺物はカマド前面と新貯蔵穴の周辺に集中する。

２号住居跡出土遺物

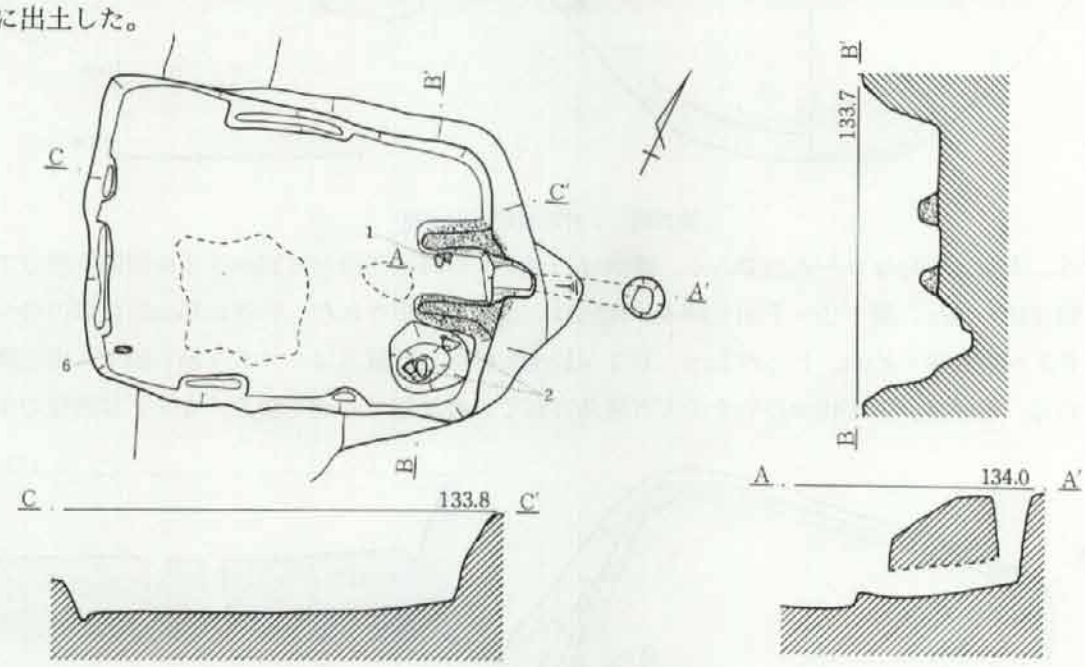
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕	17.4	〈15.6〉		粗砂粒	良好	淡褐色	
2	土師器長胴甕		〈11.0〉	6.2	粗砂粒	良好	褐色	底部木葉痕
3	土師器長胴甕	(18.3)	〈 5.2〉		粗砂粒	良好	赤褐色	
4	土師器長胴甕		〈13.5〉	5.0	粗砂粒	良	暗褐色	
5	土師器長胴甕	18.7	〈26.0〉		粗砂粒	良好	褐色～赤褐色	
6	土師器長胴甕	17.3	32.5	6.4	粗砂粒	良好	褐色～淡黄褐色	
7	土師器脚台付甕		〈14.4〉	7.6	粗砂粒	良	淡赤褐色	
8	土師器小型甕	12.2	10.0		粗砂粒	良好	褐色	
9	土師器小型甕	(11.8)	10.8		粗砂粒	良好	赤褐色	
10	須恵器　壺				粗砂粒	良好	黒褐色	外面平行叩目、内面青海波の当て目
11	土師器　坏	11.6	4.9		粗砂粒	良好	淡褐色～黒褐色	
12	土師器　坏	11.8	4.0		微砂粒	良好	赤褐色	
13	土師器手捏土器	3.7	3.1	3.8	微砂粒	良好	黒褐色	

14	編石	長13.4	幅6.7	厚3.5	重496	石質	花崗安山岩	15	編石	長12.2	幅6.8	厚3.9	重389	石質	輝石安山岩
16	編石	長11.5	幅6.1	厚3.5	重427	石質	輝石安山岩	17	編石	長12.5	幅7.2	厚4.3	重582	石質	礫岩
18	編石	長12.9	幅6.0	厚3.7	重454	石質	輝石安山岩	19	編石	長13.5	幅6.2	厚4.2	重515	石質	輝石安山岩

3号住居跡（第26図）

Ⅲ調査区のＤＥ・ＤＦ—41Ｇに跨がって標高133.20～133.80m間の南西傾斜面に検出された。住居跡の西方部分を南北に３号溝が走行し、北西方向に２号土坑、南西方向に2.5m隔てて４号住居跡が隣接する。

形状は東西に長い隅丸長方形を呈し、東辺がやや突出する。規模は東西長3.5m、南北長2.53mを測る。主軸は、N—71°—Eにとる。掘り込みは、残存の良い傾斜面上方の北東隅で70cm、西辺では20cm前後が残存する。床面は平坦で、カマド前面と中央やや南西よりにハード面がある。周溝は東壁を除く他壁面下に部分的に検出された。最深い部分で５cmを測る。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅でカマド右袖の脇に配され、規模は63cm前後のやや歪んだ隅丸方形で、最深部で26cmを測る。カマドは東壁の中央部分に灰白色粘土により構築されている。焚き口幅は40cmで60cmの燃焼部を設け、煙道部はトンネル状の刳り貫きで、1.25mの長さである。煙出部は32cm前後の円形で開口する。遺物は、貯蔵穴とカマド内に出土した。



第26図　３号住居跡

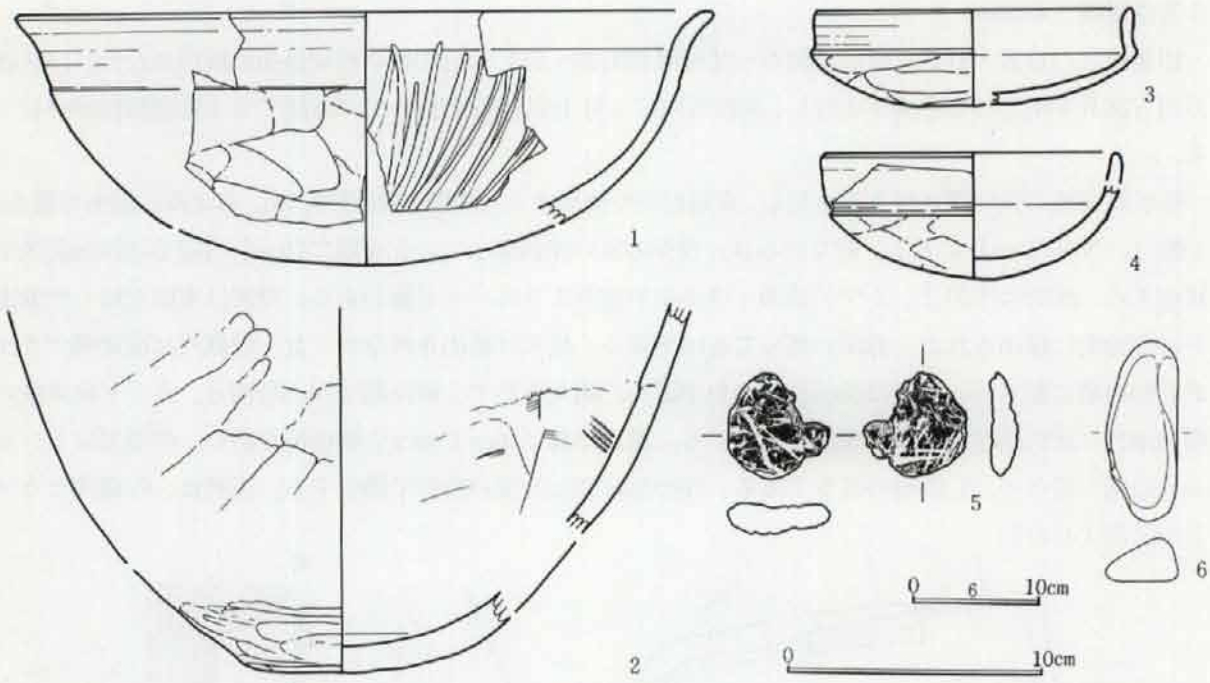
３号住居跡出土遺物

番号	器種		口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器	鉢	(28.0)	〈8.6〉		粗砂粒	良好	褐色	
2	土師器	壺		〈14.4〉		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	
3	土師器	坏	(12.2)	3.7		粗砂粒	良好	褐色	
4	土師器	坏		4.1		粗砂粒	良好	淡褐色	
5	粘土塊								
6	編石	長14.1	幅5.7	厚3.4	重415	石質	花崗閃緑岩		

4号住居跡（第28図）

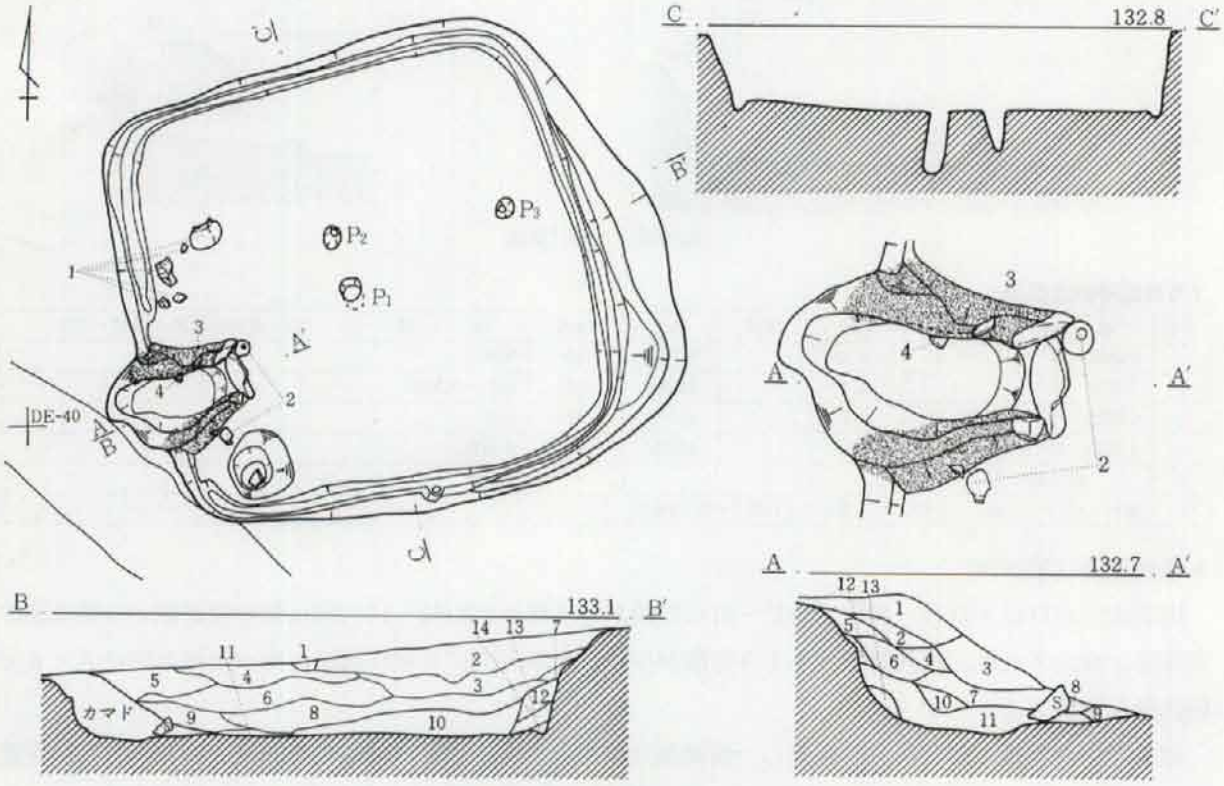
Ⅲ調査区のＤＤ・ＤＥ—40Ｇ、ＤＥ—41Ｇに跨がって標高132.60～133.00m間の傾斜面から低地面の変換部に検出された。南西隅部分を１Ａ号溝が掠め、北東方向に３号住居跡、南～南西方向に５・６号住居跡が隣接する。

形状は東西に長い隅丸長方形を呈し、南東部分が突出する。規模は東西長4.25m、南北長3.75mを測る。主軸は、W—17°—Sにとる。掘り込みは、残存の良い北東隅で80cm、カマドの右袖部分では44cmが



第27図　3号住居跡出土遺物

残存する。床面は平坦なローム面である。周溝は、カマドの両袖部分から20cm前後の間隔を設けて全周する。幅は10～20cm、深さ2～7cmを測る。柱穴は3カ所に検出された。形状は15cm前後の円形～楕円形で、P1が最も深く49cm、P2が32cm、P3が17cmを測る。貯蔵穴はカマド左袖の脇で、南西隅に配されている。規模は、53×49cmのやや歪んだ隅丸方形で、最深部で43cmを測る。カマドは西壁の中央や



第28図　4号住居跡

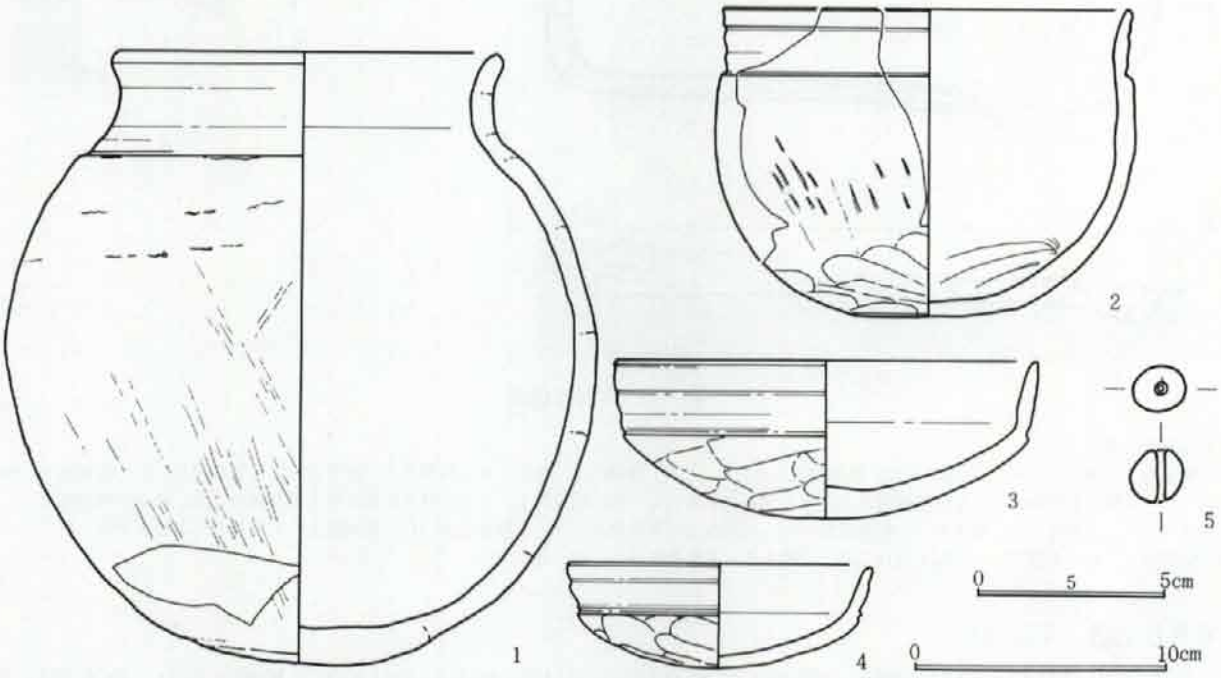
4号住居跡土層註

1、暗褐色土と黒褐色土の混合土　2、暗褐色土　ＦＰと褐色土Ｂを含む　3、暗褐色土　2層に似るがＦＰが少量　4、黒褐色土　ＦＰとＦＡを含む　5、黒褐色土　ＦＰとＦＡ、灰褐色粘質土、焼土粒を含む　6、黒褐色土　ＦＰとＦＡを含む　7、にぶい黄褐色土　8、黒褐色土　ＦＰとＦＡ、ローム粒を含む　9、暗褐色土　ロームＢ、カーボン粒を含む　10、暗褐色土　ローム粒を含む　11、にぶい黄褐色土　ロームＢを含む　12、7層に似る　13、にぶい黄褐色土　ロームＢを含む　14、13層に似るがロームＢを多量に含む

4号住居跡カマド土層註

1、暗褐色土　灰白色粘土、ＦＰ、カーボン粒、焼土粒を含む　2、註記漏れ　3、1層に似るが焼土粒が少ない　4、灰白色粘土Ｂ　焼土粒を少量含む　5、暗褐色土　灰白色粘土を含む　6、暗褐色土　灰白色粘土、焼土粒を含む　7、暗褐色土　灰白色粘土、カーボン粒、焼土粒を含む　8、暗褐色土　灰白色粘土、焼土粒を含む　9・10、灰白色粘土　11、7層に似るが焼け土粒を多く含む　12、暗褐色土　ローム粒を含む　13、暗褐色土　焼土Ｂを含む

や南寄りに灰白色粘土により構築され、袖部の先端に礫を芯材として設け、その礫間に架けた焚き口部に使用した天井石が崩落している。焚き口幅は25cmで焚き口から煙出部まで1.05mを測る。遺物は、カマド内とその両脇に集中して出土。



第29図　4号住居跡出土遺物

4号住居跡出土遺物

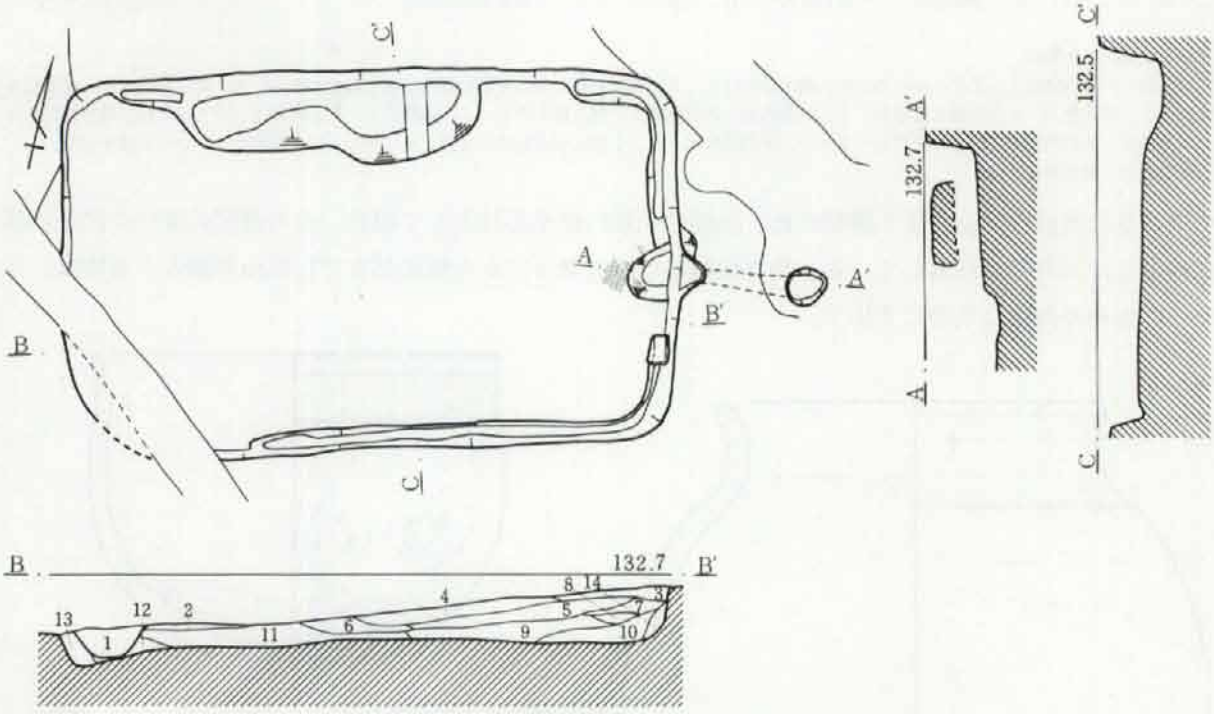
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器　壺	14.7	24.1		粗砂粒	良	褐色～赤褐色	
2	土師器小型甕		10.2		粗砂粒	良好	赤褐色～黒褐色	
3	土師器　坏	(16.2)	6.4		粗砂粒	良好	淡褐色	
4	土師器　坏	11.8	4.1		粗砂粒	良好	淡褐色	
5	土製品 丸玉	14×1.25	1.4	重さ2.1g				

5号住居跡（第30図）

Ⅲ調査区のＤＣ―39Ｇ、ＤＣ・ＤＤ―40Ｇに跨がって標高132.20～132.60m間の南西傾斜面と低地との変換部分に検出された。北東隅を１Ａ号溝が掠め、北方向に3.5m隔てて４号住居跡、西方に６号住居跡が接近して位置する。

形状は東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は東西長4.4m、南北長3.02mを測る。主軸は、N―82°―Eにとる。掘り込みは、東壁の中央部で49cm、西辺の中央部で21cmが残存する。床面は中央部分から西方と北方向に緩やかな傾斜面とする。周溝は西辺を除いて検出され、幅15cm前後、深さ２～５cmを測る。北壁下の中央部分には10cm前後の深さで不定形な掘り込みが続く。柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは東壁の中央やや南寄りに構築されている。焚き口～燃焼部の掘り込みは、長さ33cm、最大幅45cm、深さ２cmの皿状を呈している。煙道部は東壁をトンネル状に1.15mほど刳り貫き、33×30cmの円形で煙出部が開口する。



第30図　５号住居跡

５号住居跡土層註
1、黄褐色土　ロームB・ローム粒、ＦＰ、黒褐色土を含む　2・3、暗褐色土　砂質　4、暗褐色土　やや砂質でＦＰを含む　5、暗褐色土　ロームB・ローム粒、ＦＰを含む　6、暗褐色土　ロームBとＦＰを含む　7、暗褐色土　ロームBと少量の焼土粒を含む　8、にぶい黄褐色土　9、暗褐色土　ＦＰとロームB・ローム粒を含む　10、暗褐色土　黒褐色土とローム粒を含む　11、黒褐色土　ＦＰとロームBを含む　12、暗褐色土　ロームB・ローム粒を含む　13、黒褐色土　ＦＰを含む

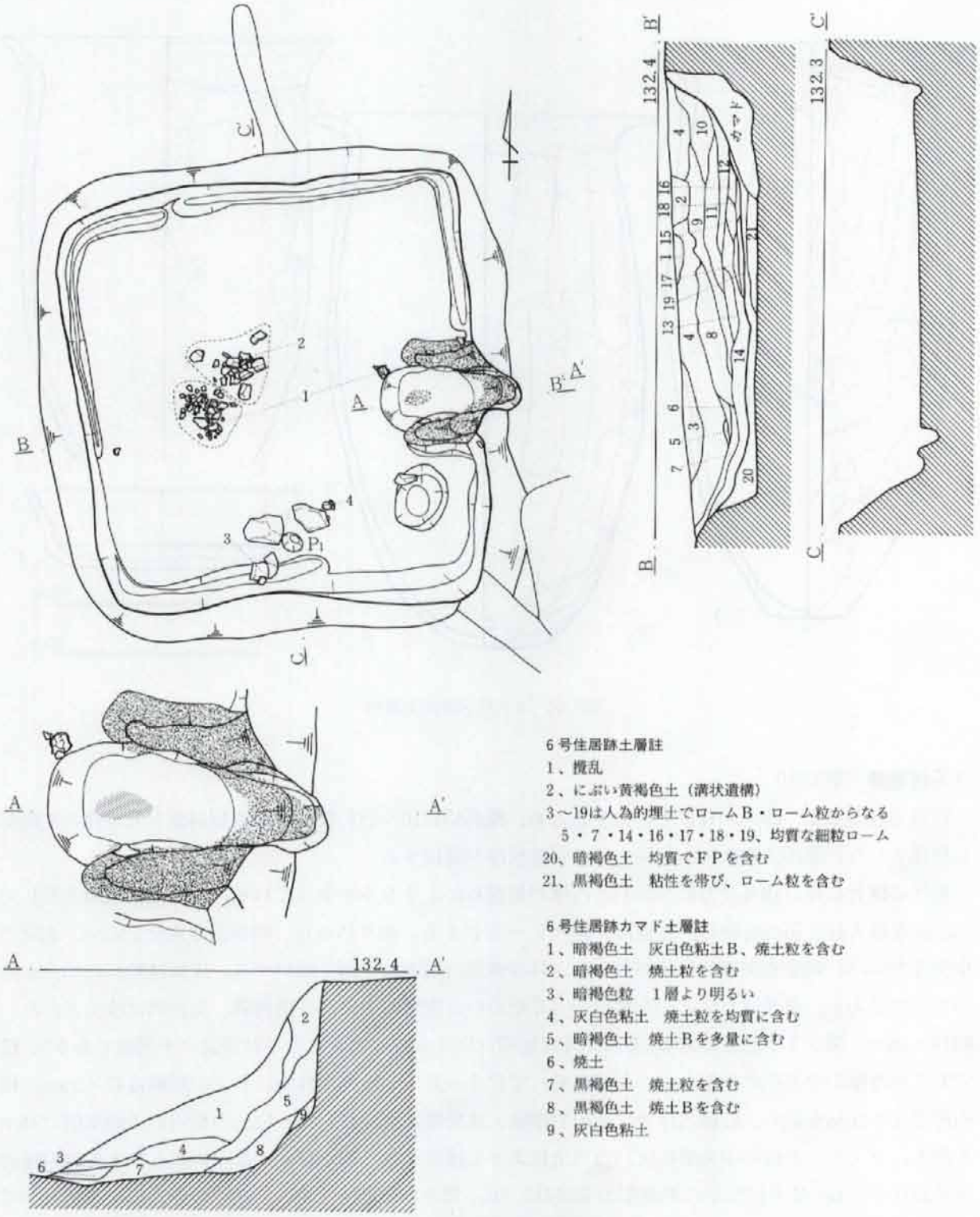
６号住居跡（第31図）

Ⅲ調査区のＤＣ・ＤＤ―39Ｇに跨がって標高132.00～132.40m間の低地面に検出された。南東部分で５号住居跡と接し、北東方向に４号住居跡が位置し、南東隅～北辺の中央部分を溝が走行する。

形状は僅かに南北が僅かに長い方形を呈する。規模は東西長4.7m、南北長4.78mを測る。主軸は、N―87°―Eにとる。掘り込みは、東壁で85～95cm、西壁で65cm前後が残存し、壁面の上部が緩やかに開口する。床面は安定した平坦面である。周溝は南東隅と西辺の南方部分が存在しない。幅は７～24cm、深さ２～８cmを測る。柱穴は、南壁の中央に周溝を挟んでＰ１が検出された。Ｐ１の規模は、20cm前後の楕円形で深さ17cmを測る。この柱穴に隣接して２つの礫が出土している。主柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、カマドの右袖脇に配され、68×49cmの楕円形で深さ43cmを測る。カマドは東壁の中央部に灰白色粘土によって構築されている。焚き口から煙道部まで1.35mを測り、煙道部は垂直気味に立ち上がる。焚き口幅60cm前後、袖部は30cm幅で70cmの長さを測る。

覆土は人為的な客土であるローム・ロームブロック土が観察され、中央部で床面から10cm程を覆う暗褐色土上に70cmほどが埋土されている。

遺物は中央の床面やや西よりに長胴甕（１と２）が集中し、散在的にカマド焚き口、南壁下の周溝等で長胴甕（３）とＰ１に隣接する礫の脇で坏（４）が出土した。



6号住居跡土層註

1、攪乱
2、にぶい黄褐色土（溝状遺構）
3～19は人為的埋土でロームB・ローム粒からなる
　5・7・14・16・17・18・19、均質な細粒ローム
20、暗褐色土　均質でFPを含む
21、黒褐色土　粘性を帯び、ローム粒を含む

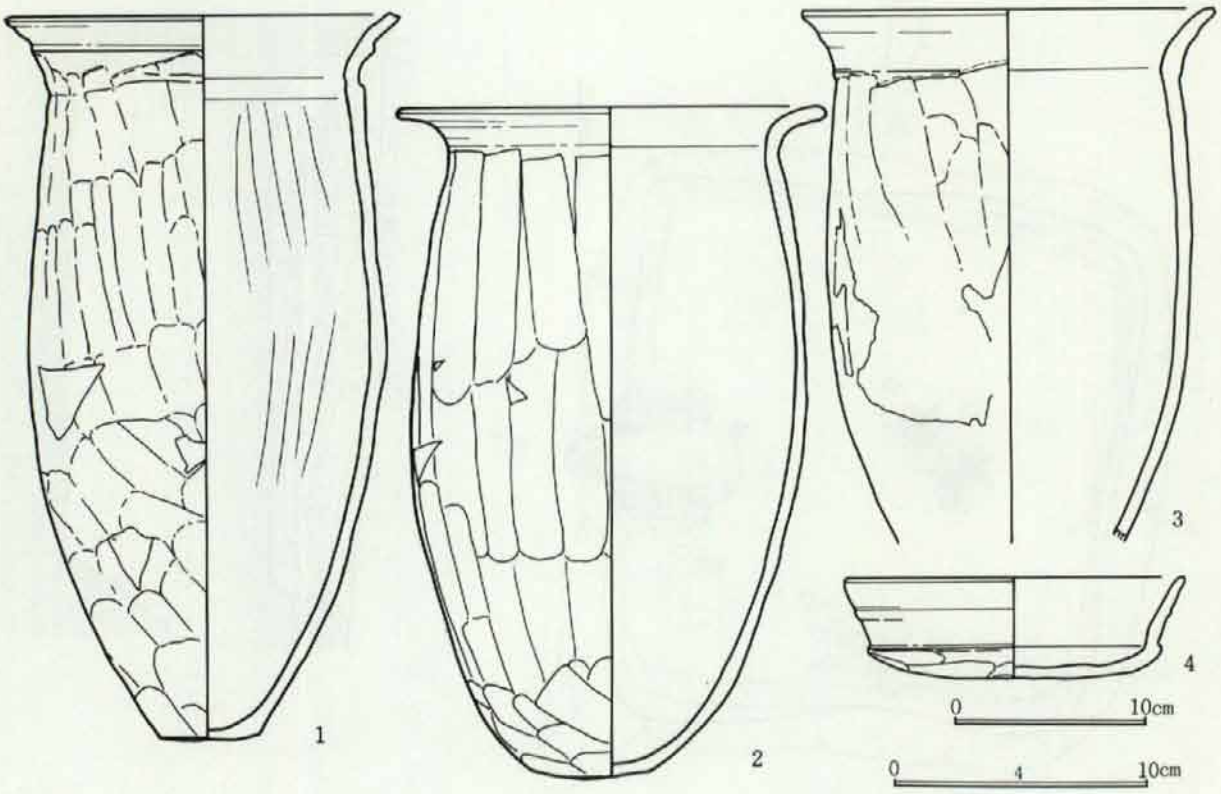
6号住居跡カマド土層註

1、暗褐色土　灰白色粘土B、焼土粒を含む
2、暗褐色土　焼土粒を含む
3、暗褐色粒　1層より明るい
4、灰白色粘土　焼土粒を均質に含む
5、暗褐色土　焼土Bを多量に含む
6、焼土
7、黒褐色土　焼土粒を含む
8、黒褐色土　焼土Bを含む
9、灰白色粘土

第31図　6号住居跡

6号住居跡出土遺物

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕	20.0	38.3	5.4	粗砂粒	良好	赤～黒褐色	
2	土師器長胴甕	21.8	35.3	6.3	粗砂粒	良好	淡黄～赤褐色	
3	土師器長胴甕	21.6	28.0		粗砂粒	良	赤褐色	
4	土師器　坏	13.2	4.0		微砂粒	良好	くすんだ黒褐色	



第32図　6号住居跡出土遺物

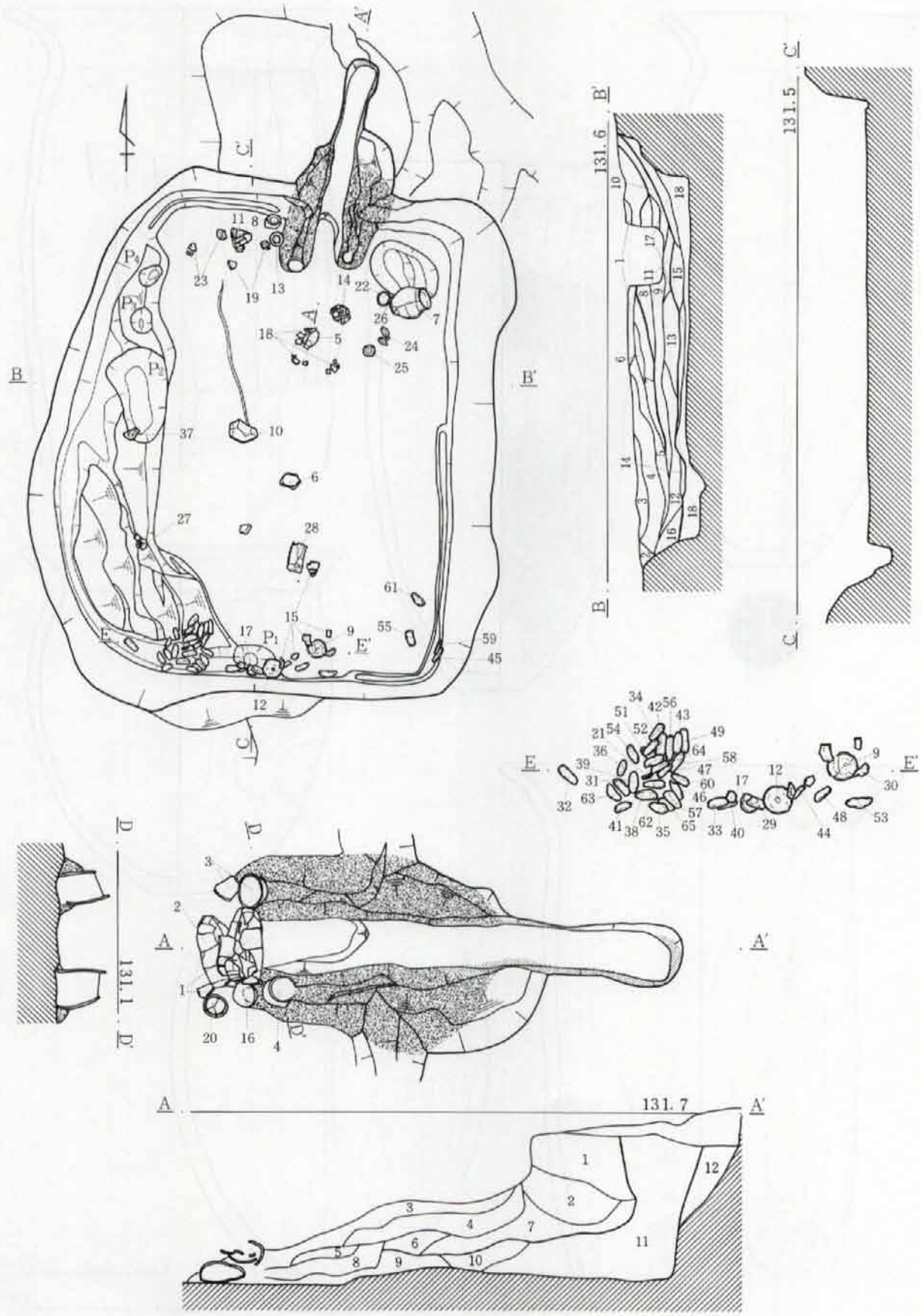
7号住居跡（第33図）

Ⅲ調査区のＣＴ—39・40Ｇにその大半を占め、標高131.10～131.70m間の西傾斜面と低地面の変換部に検出された。北西方向に４ｍ程隔てて８号住居跡が隣接する。

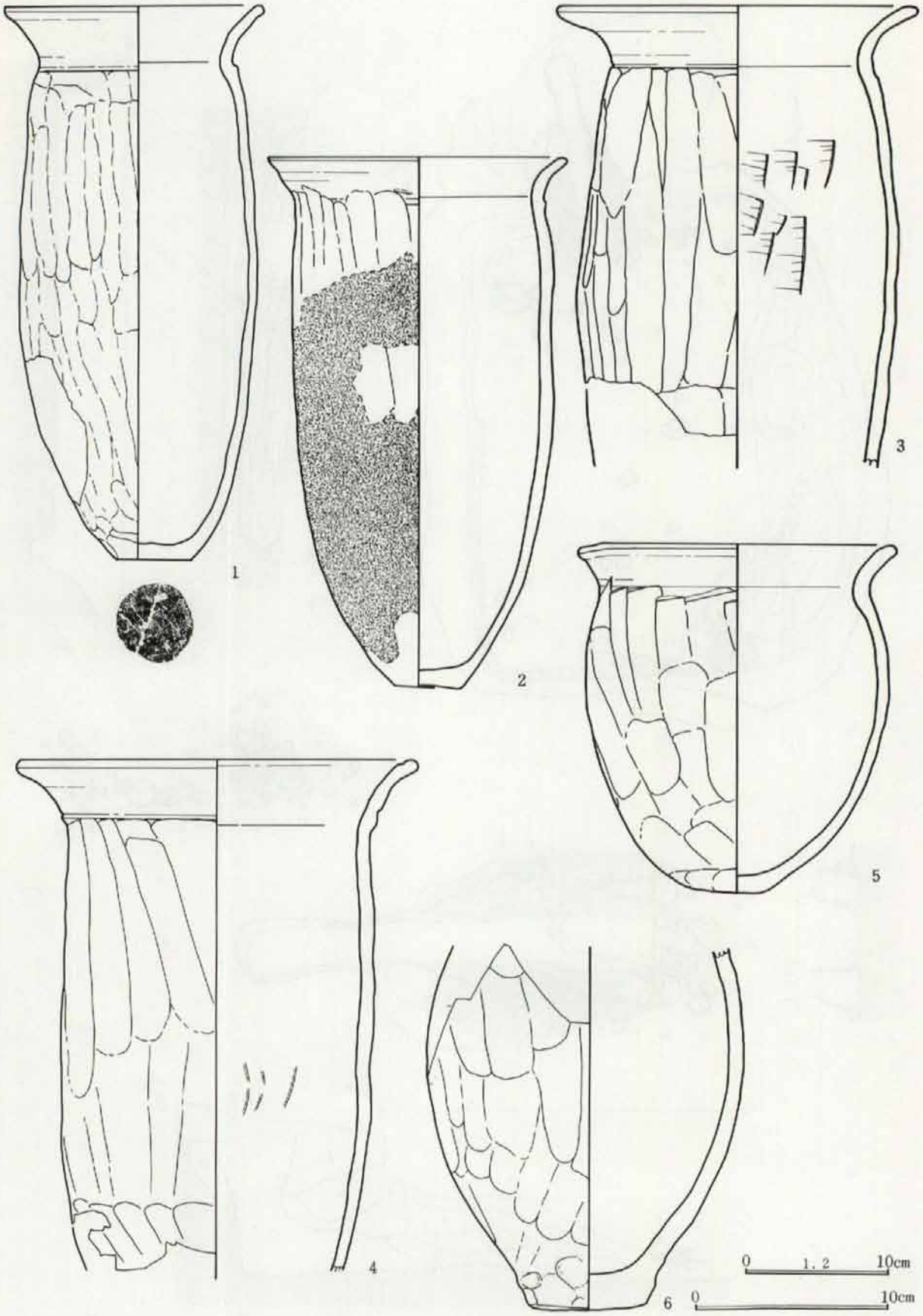
形状は南北に長い隅丸長方形を呈し、西壁が地割れにより歪みが生じている。規模は東西最大長4.93ｍ、南北最大長5.75ｍを測る。主軸は、Ｎ—９°—Ｅにとる。掘り込みは、傾斜面の東壁で92cm、北壁の中央部が64cm、南壁中央部で40cmが残存し、ほぼ垂直の壁面は上面で開口する。床面は地割れ部分を除いて平坦である。周溝はカマドの左袖部から北壁沿いと東壁の中央部～南西隅、南西隅に検出された。幅10～18cm、深さ３cm前後を測る（南西部分は地割れによる歪みがあるので計測値は不明瞭である）。柱穴Ｐ１は南壁の中央部に検出され、西壁に沿ってＰ２～Ｐ４が検出された。Ｐ１の規模は47×30cmの楕円形で深さ26cmを測る。貯蔵穴はカマドの右袖脇、北東隅に配され、75×52cmの楕円形で最深部で34cmを測る。カマドは北辺の中央部に灰白色粘土によって構築され、刳り貫きではないがトンネル状の煙道部を設けている。焚き口部から煙道部の全長は2.3ｍ、焚き口幅35cmを測り、袖部の両先端に芯材として長胴甕（３と４）を直立させ、２つの長胴甕（１と２）を連結して渡し、焚き口部の天井を構成する。

覆土は、６号住居跡と同様な人為的客土のロームＢ・ローム粒を主体として埋められている。自然堆積と考えられる覆土は、床面中央で10cm程で６号住居跡と同様の土層出ある。

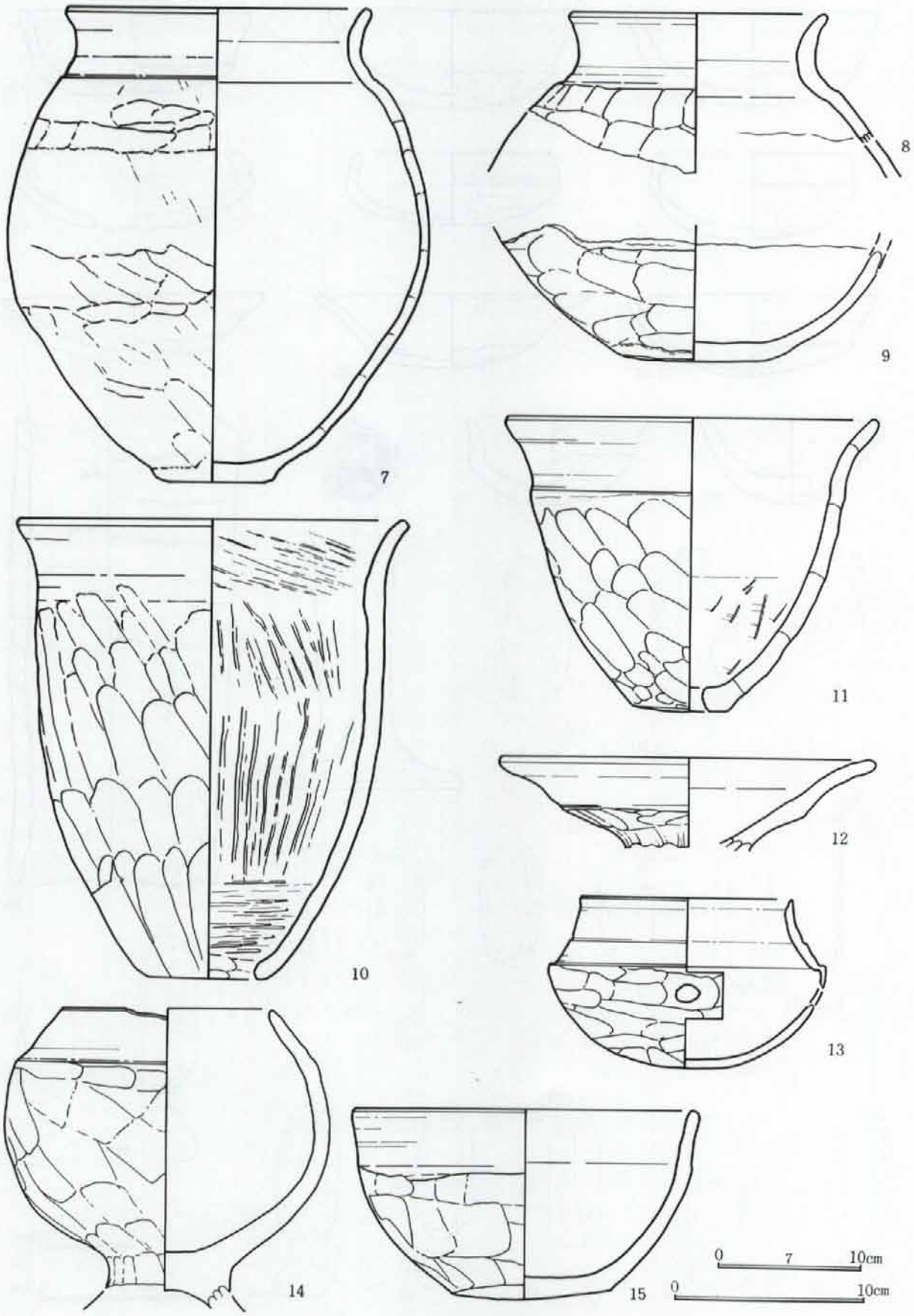
遺物はカマド前面、カマド左袖部脇に瓦泉（13）・甑（11）・坏類、貯蔵穴に甕（７）と坏集中し、南方の床面で円筒形土器（28）、南西の地割れ部分に支脚状土器（27）、南壁下には編石が37個が集中し、高坏坏部（12）と甕底部（９）が出土した。



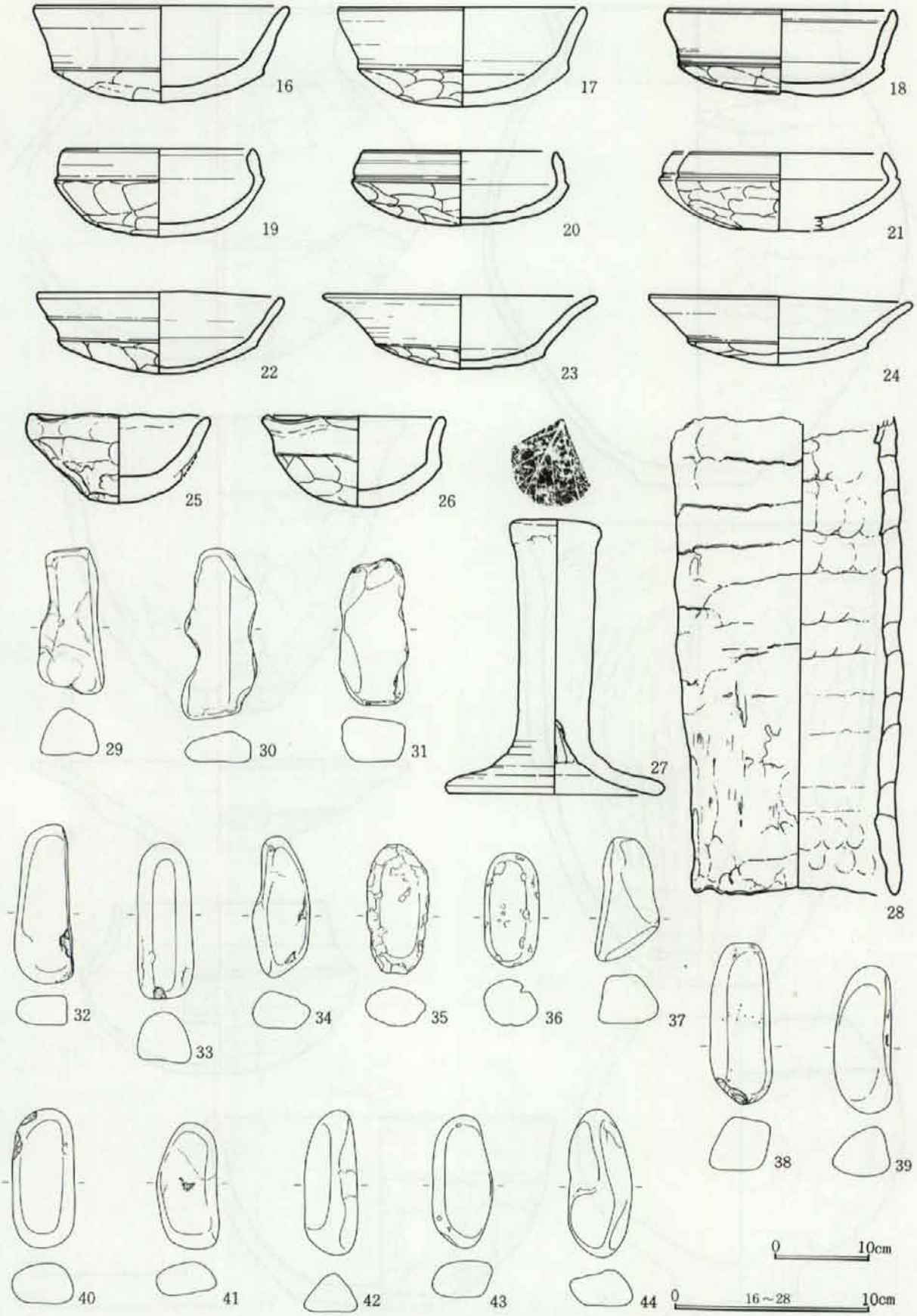
第33図　7号住居跡



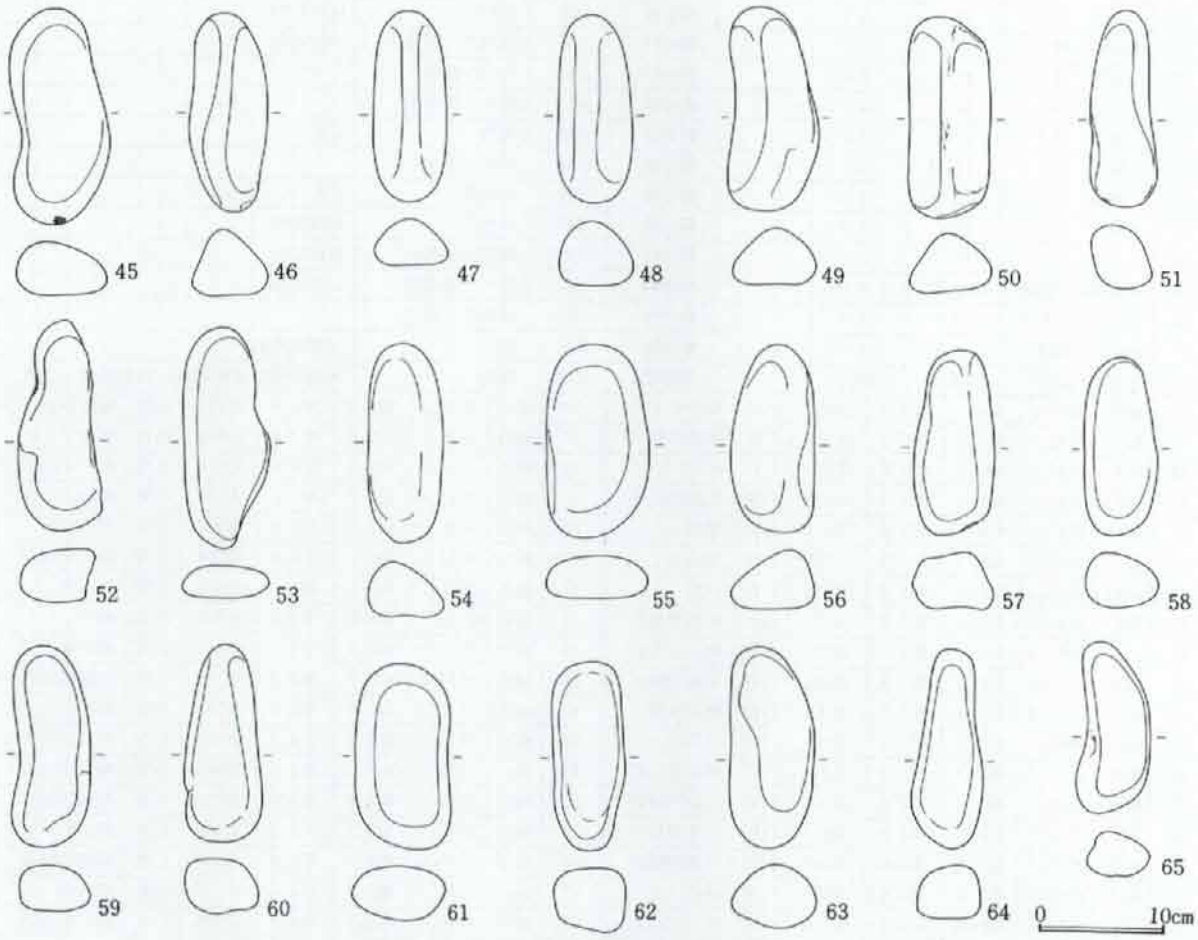
第34図　7号住居跡出土遺物（1）



第35図　7号住居跡出土遺物（2）



第36図　7号住居跡出土遺物（3）



第37図　7号住居跡出土遺物（4）

7号住居跡土層註

1、暗褐色砂質土　2、黒褐色土　FPを含む

3～15は人為的埋土でローム土を主体とする　3は砂粒、4は黒褐色土・カーボン粒を含む

16、黒褐色土　ロームBと砂粒を含む　17、暗褐色土　粘質が有り、ロームBを含む　18、黒褐色土　粘質が有り、FPを含む

7号住居跡カマド土層註

1、暗褐色土　ローム粒を多量に含む　2、暗褐色土　1層に似るがやや暗い　3、黒褐色土　暗褐色土を含む　4、暗褐色土　灰白色粘土Bを含む　5、黒褐色土　3層より暗い　6、暗褐色土　焼土Bを含む　7、暗褐色土　ローム粒を含む　8、暗褐色土　多量の焼土B・粒を含む　9、黒褐色土　焼土Bを含む　10、暗褐色土　焼土Bを含む　11、黒褐色土　焼土粒を含む　12、黒褐色土　ローム粒を含む

7号住居跡出土遺物

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕	18.1	39.1	5.3	粗砂粒	良好	褐色～赤橙褐色	底部木葉痕
2	土師器長胴甕	21.2	37.8	4.7	粗砂粒	良	褐色	
3	土師器長胴甕	18.5	〈24.6〉		粗砂粒多	良好	褐色～赤褐色	
4	土師器長胴甕	21.0	〈27.3〉		粗砂粒	良好	褐色～赤褐色	
5	土師器　甕	16.3	18.6		粗砂粒	良	黄褐色～褐色	
6	土師器　甕		〈19.1〉	5.9	粗砂粒多	良好	赤褐色～褐色	
7	土師器　壺	21.3	30.3		粗砂粒	良好	褐色	
8	土師器　壺	13.1	〈 8.4〉		粗砂粒	良好	淡褐色	
9	土師器　壺		〈 7.2〉		粗砂粒多	良好	淡赤褐色～黒褐色	
10	土師器　甑	20.1	24.7	6.1	粗砂粒	良好	赤褐色～褐色	単孔・孔径7.0 胴外面ヘラ・内面丁寧な磨き
11	土師器　甑	19.6	15.9	4.9	粗砂粒	良好	淡褐色～黒褐色	単孔・孔径2.8
12	土師器 高坏	19.3	〈 4.9〉		粗砂粒少	良好	褐色～黒褐色	脚部欠損
13	土師器 瓦泉	11.4	9.2		微砂粒	良	好褐色～黒褐色	完形焼成後の穿孔で瓦泉に転用
14	土師器脚台付甕	11.1	〈15.3〉		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	脚部欠損
15	土師器　鉢	17.7	10.1	8.3	粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	ほぼ完形

16	土師器　坏	13.2	4.1		粗砂粒	良好	淡褐色	ほぼ完形
17	土師器　坏	12.2	5.2		粗砂粒	良好	淡褐色～暗褐色	ほぼ完形
18	土師器　坏	11.6	4.4		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	
19	土師器　坏	10.1	4.7		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	
20	土師器　坏	10.2	4.0		粗砂粒	良好	褐色	完形
21	土師器　坏	(11.0)	4.1		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	
22	土師器　坏	13.0	4.4		粗砂粒	良好	黒褐色	完形
23	土師器　坏	14.1	3.9		粗砂粒	良好	黒褐色	ほぼ完形
24	土師器　坏	13.5	3.6		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	ほぼ完形
25	土師器坏(手捏)	9.2	4.6		粗砂粒	良	褐色～暗褐色	ほぼ完形
26	土師器坏(手捏)	9.2	4.7		粗砂粒	良	淡褐色～褐色	
27	土師器支脚形	4.6	14.6	(11.2)	粗砂粒	良好	褐色	上部木葉痕
28	土師器円筒形	10.6	〈25.4〉		粗砂粒	良好	褐色	天地不明外面輪積痕、内面指押さえ痕

29	編石	長15.3	幅6.9	厚5.5	重821	石質	輝石安山岩	30	編石	長18.2	幅8.0	厚3.9	重712	石質	細粒砂岩
31	編石	長15.6	幅7.4	厚5.3	重906	石質	細粒砂岩	32	編石	長16.8	幅6.4	厚3.6	重640	石質	輝石安山岩
33	編石	長15.5	幅6.0	厚5.6	重975	石質	砂岩	34	編石	長14.7	幅6.0	厚4.8	重574	石質	輝石安山岩
35	編石	長13.4	幅6.5	厚5.3	重533	石質	花崗閃緑岩	36	編石	長11.9	幅5.7	厚5.0	重482	石質	輝石安山岩
37	編石	長13.0	幅6.8	厚5.2	重567	石質	礫岩	38	編石	長16.9	幅6.5	厚5.6	重987	石質	細粒砂岩
39	編石	長15.8	幅6.3	厚6.0	重780	石質	安山岩	40	編石	長14.9	幅6.7	厚4.9	重791	石質	輝石安山岩
41	編石	長13.4	幅6.6	厚3.6	重484	石質	砂岩	42	編石	長15.5	幅5.6	厚4.3	重562	石質	ひん岩
43	編石	長14.0	幅6.4	厚3.9	重581	石質	花崗閃緑岩	44	編石	長15.7	幅6.8	厚4.3	重606	石質	礫岩
45	編石	長17.4	幅8.1	厚4.2	重880	石質	輝石安山岩	46	編石	長16.0	幅6.3	厚5.3	重762	石質	輝石安山岩
47	編石	長15.3	幅6.0	厚3.8	重564	石質	花崗閃緑岩	48	編石	長14.8	幅6.0	厚5.3	重751	石質	花崗閃緑岩
49	編石	長16.4	幅7.3	厚4.7	重766	石質	礫質砂岩	50	編石	長16.2	幅6.6	厚5.0	重785	石質	輝石安山岩
51	編石	長15.8	幅5.4	厚5.1	重650	石質	ひん岩	52	編石	長16.5	幅6.5	厚4.4	重674	石質	輝石安山岩
53	編石	長17.7	幅7.1	厚2.9	重552	石質	輝石安山岩	54	編石	長15.8	幅6.0	厚4.3	重545	石質	輝石安山岩
55	編石	長15.5	幅8.2	厚3.6	重748	石質	花崗閃緑岩	56	編石	長15.0	幅6.6	厚5.0	重722	石質	花崗閃緑岩
57	編石	長14.9	幅6.5	厚4.6	重677	石質	石英斑岩	58	編石	長14.3	幅5.9	厚4.4	重560	石質	輝石安山岩
59	編石	長16.2	幅6.2	厚3.6	重608	石質	花崗閃緑岩	60	編石	長15.9	幅6.3	厚5.2	重700	石質	花崗閃緑岩
61	編石	長15.0	幅7.6	厚4.6	重815	石質	砂岩	62	編石	長15.3	幅5.8	厚5.6	重735	石質	安山岩
63	編石	長16.0	幅6.8	厚5.2	重746	石質	輝石安山岩	64	編石	長16.1	幅5.7	厚4.5	重585	石質	輝石安山岩
65	編石	長13.6	幅5.9	厚3.8	重435	石質	輝緑岩								

8号住居跡（第38図）

Ⅲ調査区のＤＡ—38Ｇにその大半を占め、標高131.00～131.50m間の低地面に検出された。南西方向に４ｍほど隔てて７号住居跡が位置し、北東隅～南西隅に１Ｂ号溝の枝溝が上面を過っている。

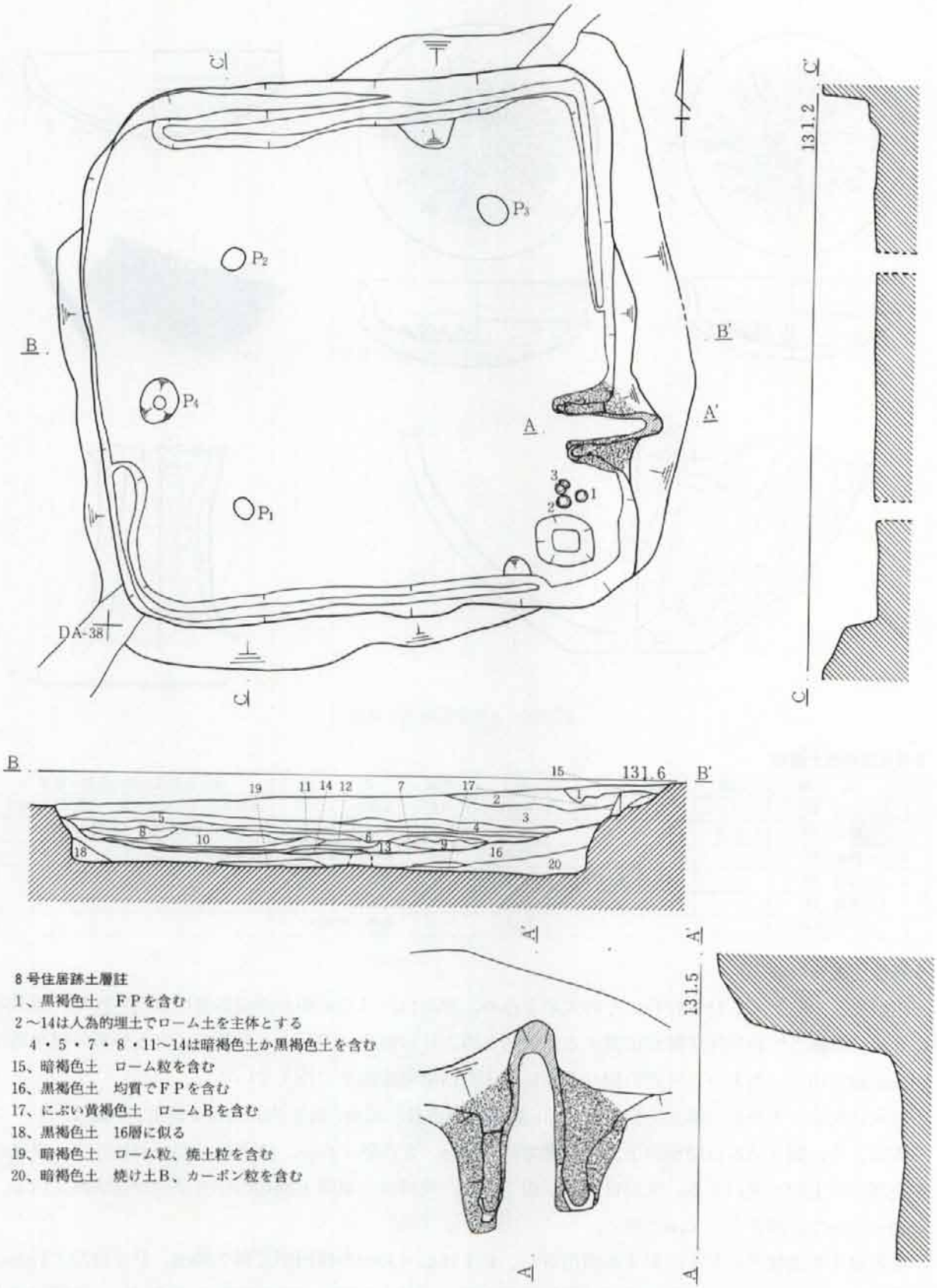
形状は一辺が6.2～6.3mの隅丸方形を呈する。主軸は、N—84°—Eにとる。掘り込みは、残存の良い北東隅で94cm、南東隅は87cm、西壁で60cm前後を測り、北西隅を除いて壁面の上部が開口する。床面は平坦である。床面は硬化したローム面で平坦である。周溝はカマドの両脇と西辺の中央部～北西隅部分を欠いている。幅は15～30cmで、深さ２～10cmを測る。

柱穴は４本主柱穴と考えられ、Ｐ１～Ｐ３の所在を確認したが、Ｐ４の所在は湧水の為に把握できなかった。確認したＰ１～Ｐ３の柱間は2.6m前後を測る。貯蔵穴は南東隅に配され、58×53cmの隅丸方形で、深さ29cmを測る。

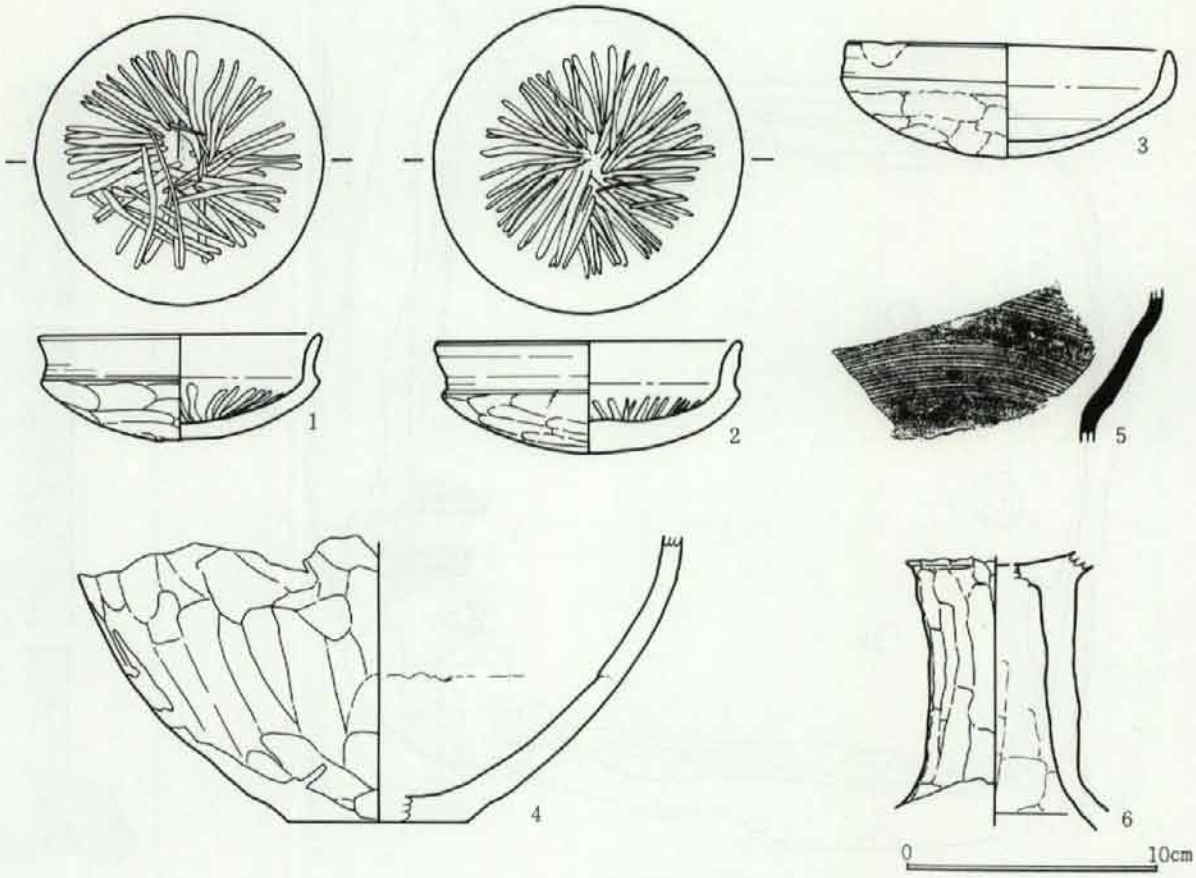
カマドは東辺の中央やや南寄りに灰白色粘土によって構築され、袖部先端に礫を芯材とする。焚き口～煙道部の全長は1.05mで煙道部は垂直気味に立ち上がり強い披熱を受けて焼土化している。焚き口幅は27cmを測る。

覆土は６・７号住居跡と同様な人為的な客土であるローム粒、ロームＢを主体とする堆積が観察され、中央の床面で12cm前後の黒・暗褐色土の自然堆積上に60cm程が埋土されている。

遺物はカマド右袖部と貯蔵穴の間に３個体の坏（１～３）が出土した。


P1
P2
P3
P4
DA-38
A
A'
B
B'
C
C'
131.2
131.6
131.5
8号住居跡土層註
1、黒褐色土　ＦＰを含む
2～14は人為的埋土でローム土を主体とする
4・5・7・8・11～14は暗褐色土か黒褐色土を含む
15、暗褐色土　ローム粒を含む
16、黒褐色土　均質でＦＰを含む
17、にぶい黄褐色土　ロームＢを含む
18、黒褐色土　16層に似る
19、暗褐色土　ローム粒、焼土粒を含む
20、暗褐色土　焼け土Ｂ、カーボン粒を含む

第38図　8号住居跡



第39図　8号住居跡出土遺物

8号住居跡出土遺物

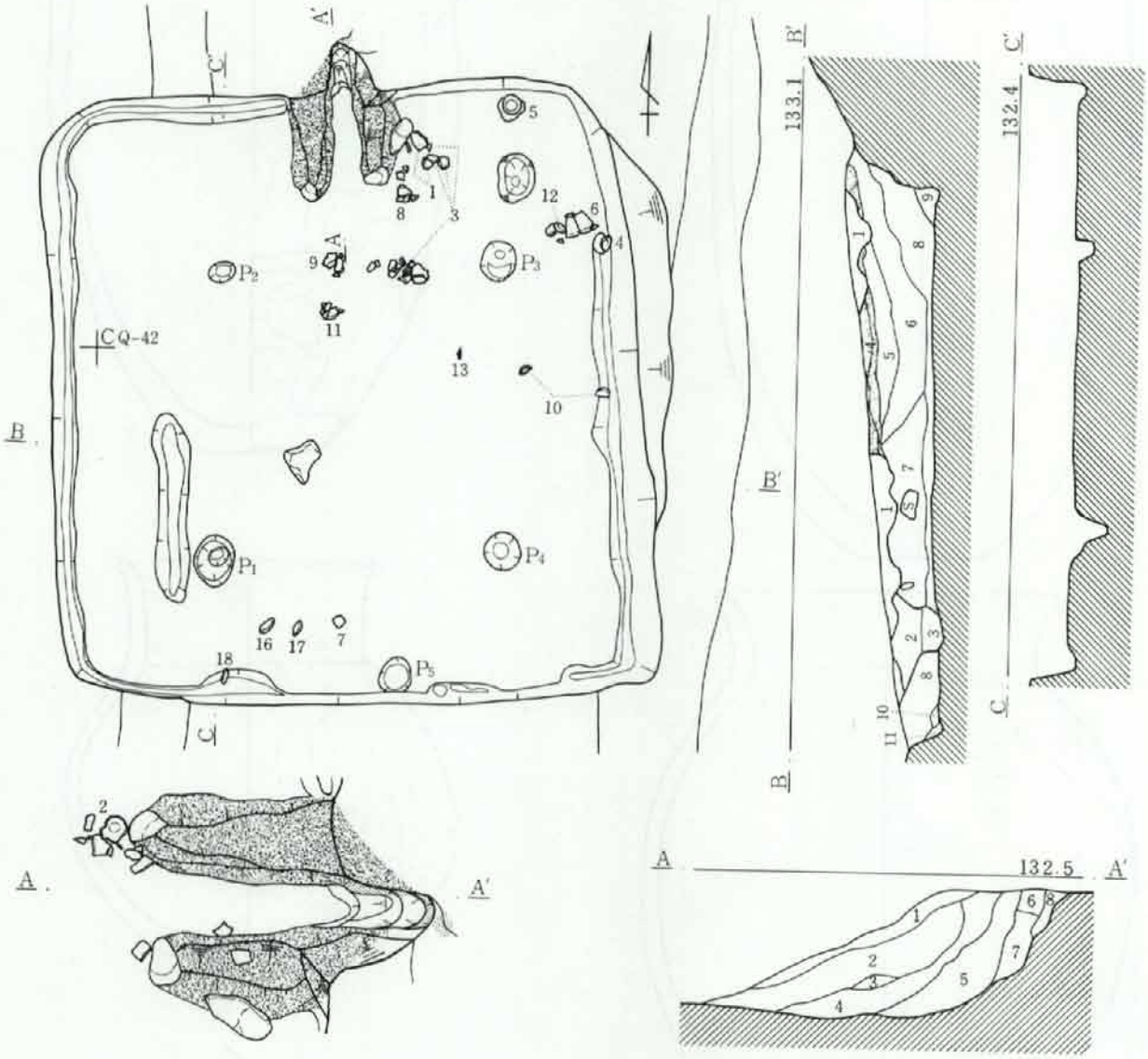
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器　坏	11.2	4.2		粗砂粒	良好	淡褐色	ほぼ完形内面黒色処理、内底放射状暗文
2	土師器　坏	12.2	4.5		粗砂粒	良好	淡褐色～黒褐色	完形内面黒色処理、内底放射状暗文
3	土師器　坏	12.9	4.3		粗砂粒	良好	淡褐色～黒褐色	ほぼ完形
4	土師器　壺		〈11.6〉	(7.1)	粗砂粒多	良	褐色	
5	須恵器　壺				粗砂粒	良好	黒褐色	
6	土師器　高坏				粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	

9号住居跡（第40図）

Ⅲ調査区のＣＰ・ＣＱ—42Ｇにその大半を占め、標高132～133m間の西傾斜面に検出された。西方向に５ｍほど隔てて10号住居跡が位置する。東辺と西方には南北に走行する地割り４と５号溝の掘り込みが住居跡を切り、西方の５号溝の掘り込みはＰ１の西脇で床面まで及んでいる。

形状は南北にやや長い隅丸方形を呈する。規模は東西長5.05m、南北長5.25mを測る。主軸は、N—3°—Wにとる。掘り込みは傾斜面上方の東壁で75～80cm、北西隅で40cm、南西隅で23cmが残存し、東壁の中央部分の上面が開口する。床面はほぼ平坦である。周溝は北東隅と南辺の中央部分が途切れている。幅10～25cmで、深さ５～８cmを測る。

柱穴は４本主柱穴のＰ１～Ｐ４が検出され、Ｐ１は42×35cmの楕円形で深さ30cm、Ｐ２は23×17cmの楕円形で深さ16cm、Ｐ３は30cm前後の円形で深さ22cm、Ｐ４も30cm前後の円形で深さ51cm、柱間はＰ１～Ｐ２が2.4m、Ｐ２～Ｐ３が2.35m、Ｐ３～Ｐ４が2.5m、Ｐ４～Ｐ１が2.4mを測る。南壁の中央部に検出されたＰ５は、30cm前後の円形で深さ17cmを測る。貯蔵穴はＰ３と北東隅の中間部分に配され、40×



第40図　9号住居跡

9号住居跡土層註

1、暗褐色土　B軽石とローム粒・ロームBを含む　2、黒褐色砂質土　3、にぶい黄褐色土　ローム粒・ロームBを多量に含む
4、B軽石　5、黒褐色土　FPを含む　6、暗褐色土　FPを含む　7、黒褐色土　FPとFAを含む　8、にぶい黄褐色土　ローム粒を多量に含む　9、暗褐色土　ローム粒を多く含む　10、にぶい黄褐色土　11、にぶい黄褐色土　ロームBを多く含む

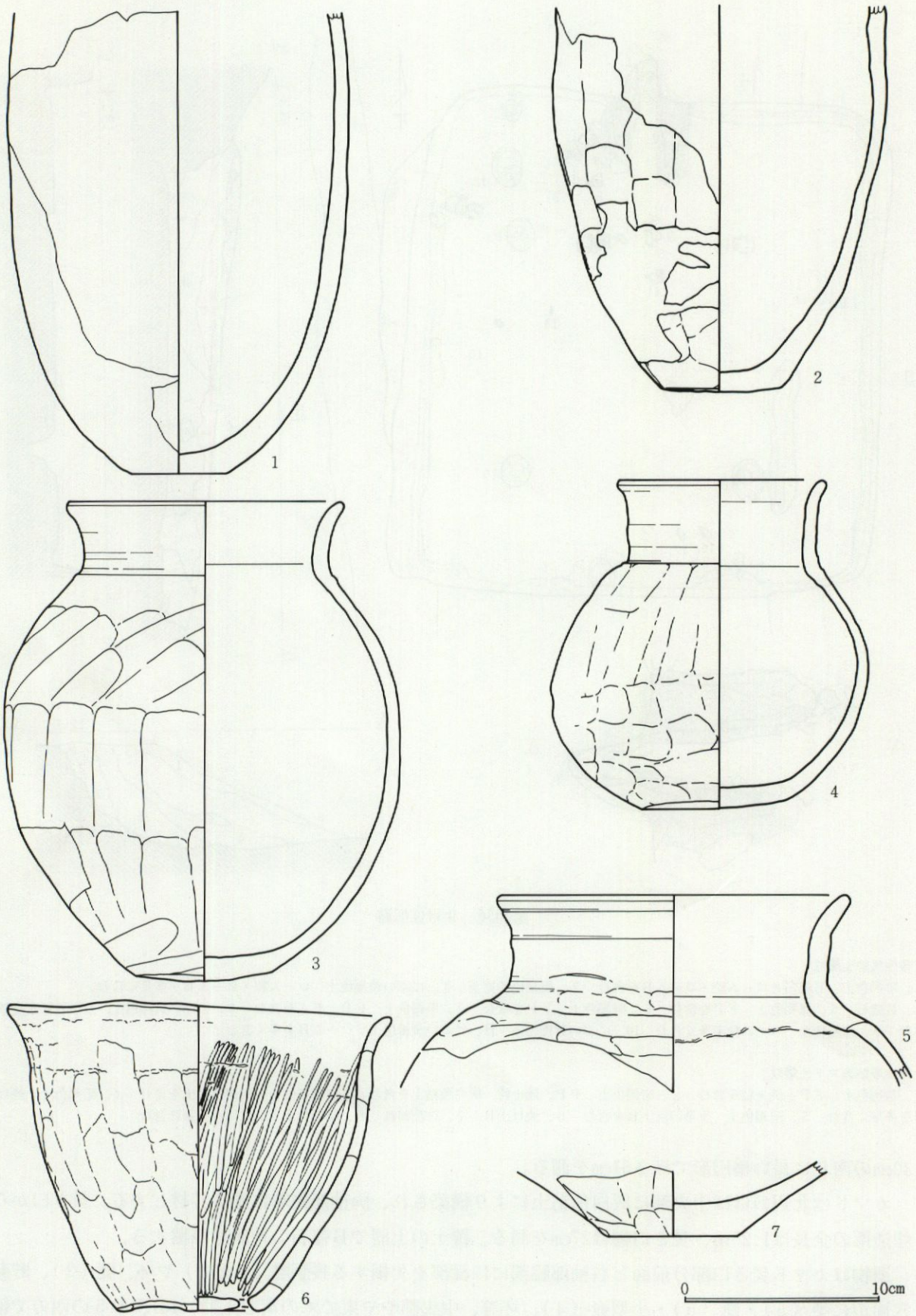
9号住居跡カマド土層註

1、暗褐色土　FPと焼土粒を含む　2、暗褐色土　FP、焼土粒、灰白色粘土を含む　3、暗褐色土　灰白色粘土を含む　4、暗褐色土　焼け土Bを多量に含む　5、暗褐色土　少量の焼土Bを含む　6、焼け土B　7、註記漏れ　8、暗褐色土　焼土粒を多量に含む

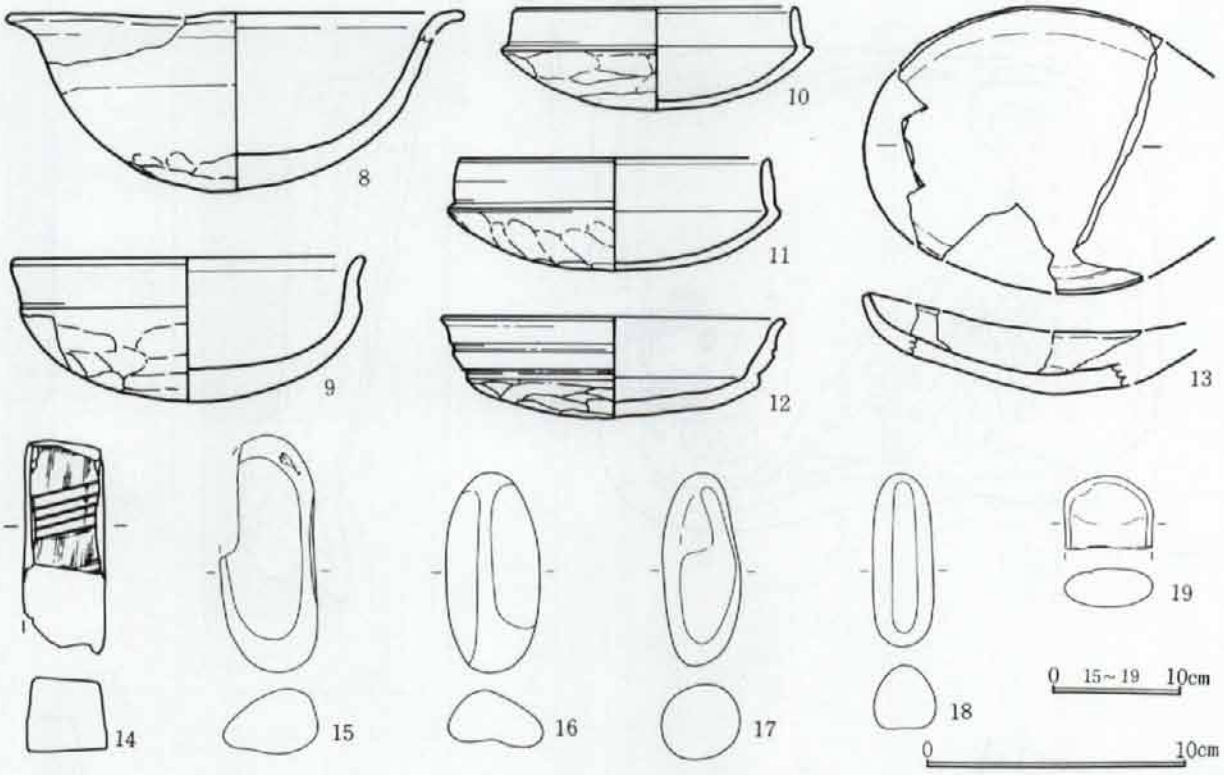
30cmの南北に長い楕円形で深さ51cmを測る。

カマドは北辺のほぼ中央部に灰白色粘土により構築され、両袖部先端に礫を芯材とする。焚き口から煙道部の全長は1.25m、焚き口幅は27cmを測る。覆土の上層でB軽石の純層が堆積する。

遺物はカマド焚き口部分前面と右袖部脇部に口縁部を欠損する長胴甕（1と2）や坏、甕（3）、貯蔵穴周辺に甕（5）・甑（6）・小型壺（4）、坏等、中央部やや東で木の葉形土器（13）、P5の西方で編石等が散在して出土。



第41図　9号住居跡出土遺物（1）



第42図　9号住居跡出土遺物（2）

9号住居跡出土遺物

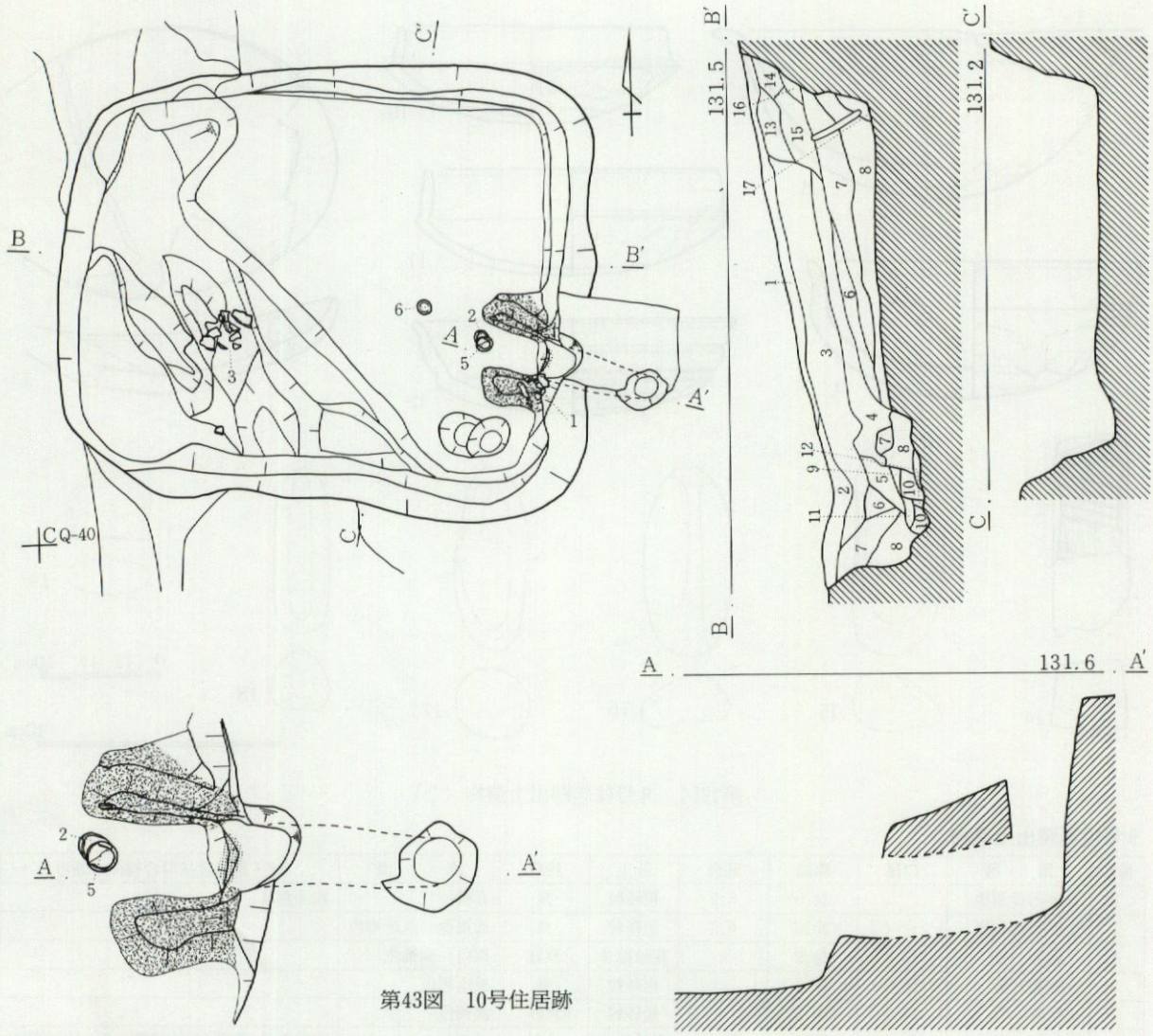
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕		〈24.0〉	5.0	粗砂粒	良	赤褐色	器面荒れ
2	土師器長胴甕		〈20.0〉	6.3	粗砂粒	良	淡褐色～淡黒褐色	
3	土師器　壺	13.8	24.9		粗砂粒多	良好	褐色～赤褐色	
4	土師器　壺	10.8	17.5		粗砂粒	良	淡灰褐色	
5	土師器　壺	17.7	〈10.2〉		粗砂粒	良好	淡褐色	
6	土師器　甑	20.0	16.3	7.7	粗砂粒多	良好	淡褐色	完形単孔・孔径6.0外胴部ヘラ、内面磨き
7	土師器　壺		〈 3.8〉	7.0	微砂粒	良好	赤褐色	
8	土師器　坏	(17.5)	7.0		粗砂粒	良好	褐色～暗褐色	
9	土師器　坏	13.1	5.9		粗砂粒	良	淡褐色～淡赤褐色	
10	土師器　坏	11.1	4.2		粗砂粒少	良好	赤褐色～黒褐色	
11	土師器　坏	12.9	4.5		粗砂粒少	良好	暗赤褐色	
12	土師器　坏	13.3	4.0		粗砂粒少	良好	褐色～黒褐色	
13	土師器				粗砂粒少	良好	淡黄白色～黒褐色	木の葉の器形

14	砥石	長8.5	幅3.2	厚2.9	重116	石質	砂岩	15	編石	長18.8	幅7.6	厚5.1	重1043	石質	輝石安山岩
16	編石	長15.8	幅7.4	厚4.5	重794	石質	輝石安山岩	17	編石	長15.3	幅6.2	厚5.9	重727	石質	輝石安山岩
18	編石	長13.6	幅4.7	厚5.0	重518	石質	花崗閃緑岩	19	編石	長5.7	幅7.0	厚3.1	重200	石質	輝石安山岩

10号住居跡（第43図）

Ⅲ調査区のＣＱ—40Ｇ、標高130.80～131.40m間で西傾斜面と低地面との変換部に検出された。東の傾斜面に９号住居跡、南西方向に11・12号住居跡が位置する。

形状は東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は東西長4.52m、南北長3.7mを測る。主軸は、E—17°—Sにとる。掘り込みは傾斜面上方の東壁で１～1.07m、傾斜面下方の西壁で65cm前後が残存し、西壁を除いて上面が開口する。床面は西方に緩やかに傾斜し、南辺中央部～北西隅にかけて地割れがあり、７号住居跡で見られた地割れに連続して陥没している。周溝、柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に配され、８の字状に２つの掘り込みが繋がり、作り替えが考えられる。東の掘り込みは40×30cmの楕円



第43図　10号住居跡

10号住居跡土層註

1、B軽石の純層　2、黒褐色土　FPを含む　3、黒褐色土　FPを含み2層より締まる　4、黒褐色土　FPを含み3層より明るい　5、黒褐色土　FPを含む　6、黒褐色土　FPを少量含む　7、暗褐色土　FPを多量に含む　8、にぶい黄褐色土　ローム粒を多量に含む　9、黒褐色土　FPを少量含む　10、暗褐色土　ロームB・ローム粒を含む　11、暗褐色土　ローム粒を含む　12、ロームB　13、暗褐色土　FPを多量に含む　14、暗褐色土　FP・ローム粒を含む　15、黒褐色土　FPを少量含む　16、暗褐色土　17、にぶい黄褐色土　ロームB・ローム粒を含む

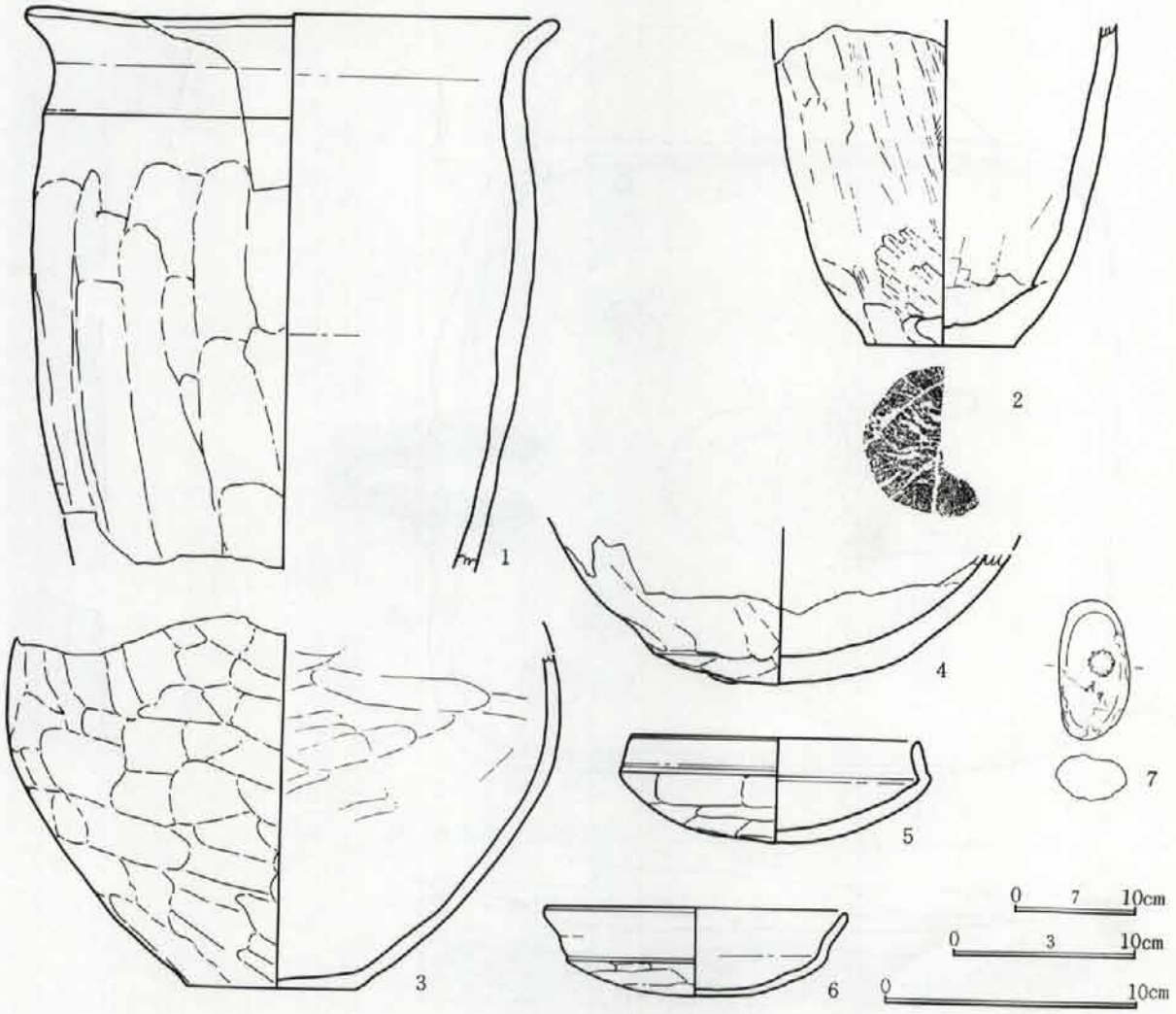
形で深さ45cm、西は35×40cm前後の円形で深さ9cmを測る。

カマドは東辺の中央やや南寄りに灰白色粘土によって構築されている。焚き口から煙道部の全長は、1.6m前後、焚き口幅35cm程である。袖部は右袖が55cm、左袖が65cmで、煙道は壁面をトンネル状に1.04m程刳り貫き、煙出部は35cm程の円形に開口する。

遺物は焚き口部と前面に長胴甕（2）と坏（5と6）、床面中央やや西寄りの地割れ内に甕（3）が出土。

10号住居跡出土遺物

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕	20.7	〈22.7〉		粗砂粒	良好	褐色	
2	土師器長胴甕		〈13.2〉	6.0	粗砂粒少	良好	赤褐色	底部木葉痕
3	土師器　壺		〈20.7〉	9.4	粗砂粒	良好	淡褐色～赤褐色	
4	土師器　壺		〈 6.4〉		粗砂粒多	良好	淡褐色	
5	土師器　坏	11.8	4.4		粗砂粒少	良好	褐色	
6	土師器　坏	12.0	3.6		微砂粒	良好	赤橙色	完形
7	編石　長11.3	幅5.8	厚4.1	重282	石質	輝石安山岩		



第44図　10号住居跡出土遺物

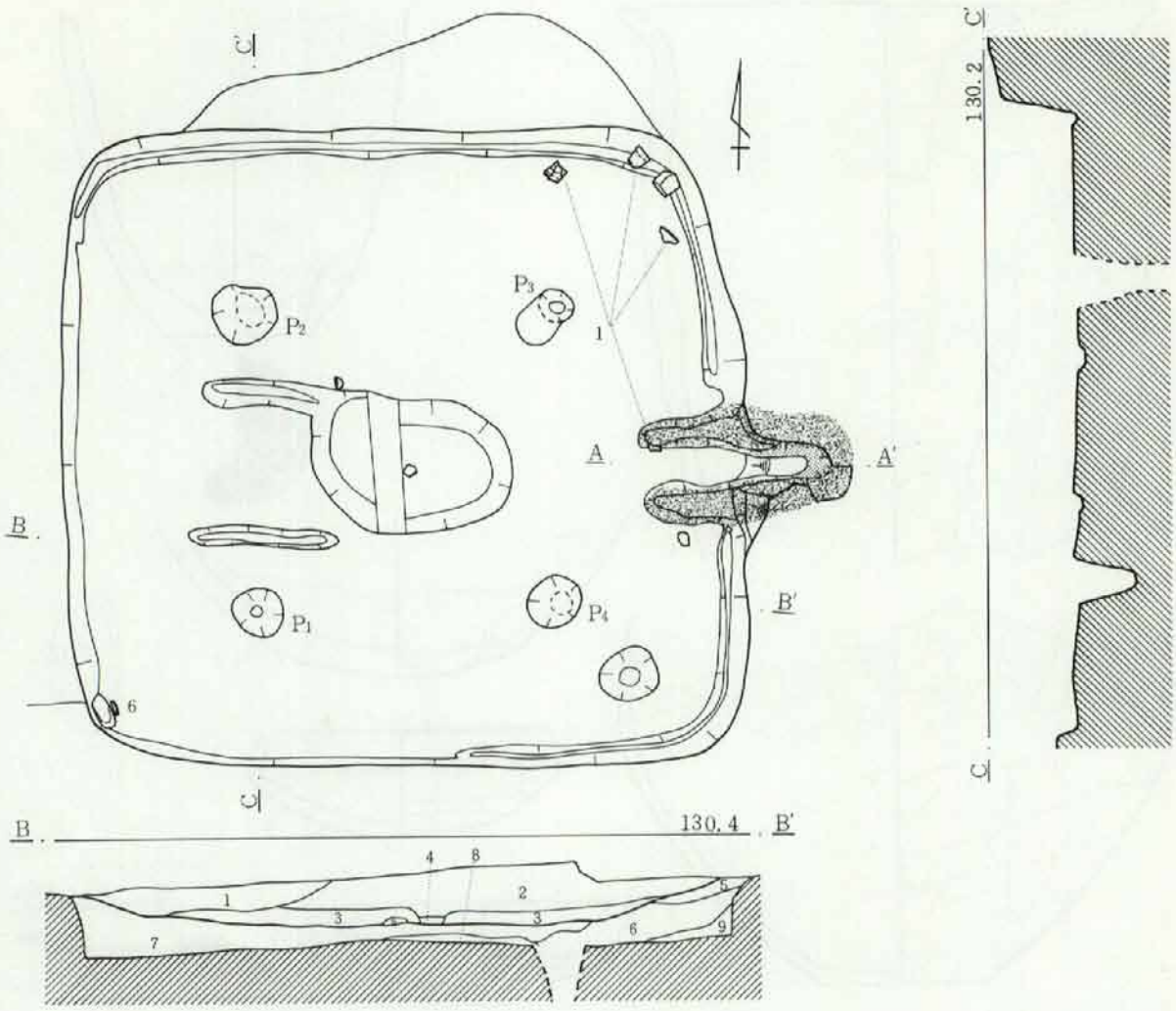
11号住居跡（第45図）

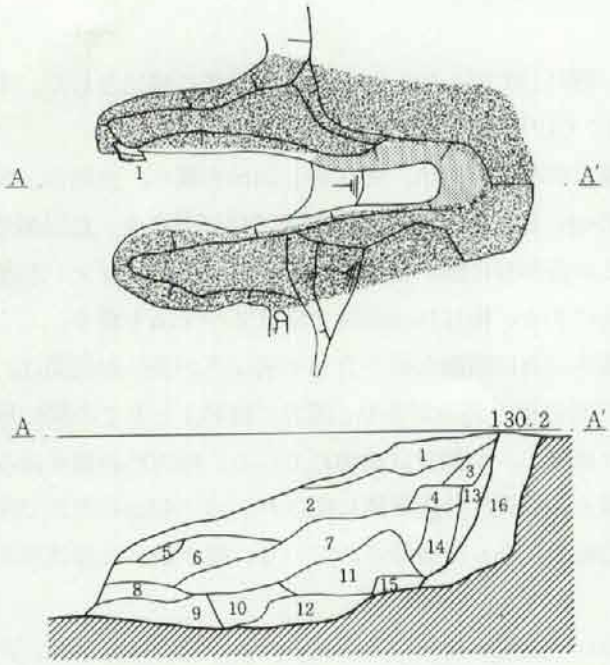
Ⅲ調査区のＣＯ・ＣＰ—38Ｇにその大半を占め、標高130.00～130.20m前後の低地に検出された。南東方向に接近して12号住居跡、北東方向に6.5m隔てて10号住居跡が位置する。

形状は南北が僅かに長い隅丸方形を呈する。規模は東西長5.54m、南北長5.66mを測る。主軸は、N—85°—Eにとる。掘り込みは残存の良い北東隅で79cm、最も残存の悪い南西隅で13cmを測り、北辺部分の上面が緩やかに開口している。床面は僅かであるが西部分に緩やかな凹凸がある。周溝はカマド右袖～南辺中央やや東とカマド左袖部脇から北西隅に連続する。幅は10cm前後で深さ２～７cmを測る。

柱穴はＰ１～Ｐ４の４本主柱穴が検出された。湧水の為に明確な掘り方は不明な点が多いが柱間は2.4mを測る。中央部分には東西に長いやや歪んだ楕円形の掘り込みがあり、西方にはＰ１とＰ２の間に凧の足の様に２本の溝状の掘り込み併走し、北側では接続し、南側では途切れている。楕円形の掘り込みは東西長1.63m、南北最大長1.09mで深さ21cmを測る。貯蔵穴は南東隅に配され、47×42cmの円形で深さ29cmを測る。カマドは東辺のほぼ中央部に灰白色粘土によって構築されている。焚き口から煙道部までの全長は1.5m程で、焚き口幅は30cmを測る。

覆土は、６～８号住居跡と同様に人為的な客土のローム粒・ロームＢが見られる。遺物は北東隅、カマド周辺、中央土坑等に散在して出土。





11号住居跡土層註

1～4は人為的埋土

1、均質なローム土

2、ローム粒とロームBの均質な混合土

3、細かいローム土　4、ロームB・ローム粒の混合土

5、黒褐色土　FPを含む

6、黒褐色土　FP、灰白色粘土B、焼土粒を含む

7、黒褐色土　少量のFPを含む

8、黒褐色土　灰白色粘土Bを含む　9、黒褐色土　FPを含む

11号住居跡カマド土層註

1、褐灰色土　2、暗褐色土　FPと少量の焼土粒を含む

3、褐灰色土　焼土粒を少量含む　4、暗褐色土　焼土粒を含む

5、灰褐色粘土B　6、暗褐色土　灰白色粘土を多量に含む

7、褐灰色土　灰白色粘土Bを多量に含む

8、暗褐色土　灰白色粘土と少量の焼土粒を含む

9、暗褐色土　焼土粒、カーボン粒を含む

10、灰白色粘土Bと焼土Bの混合土

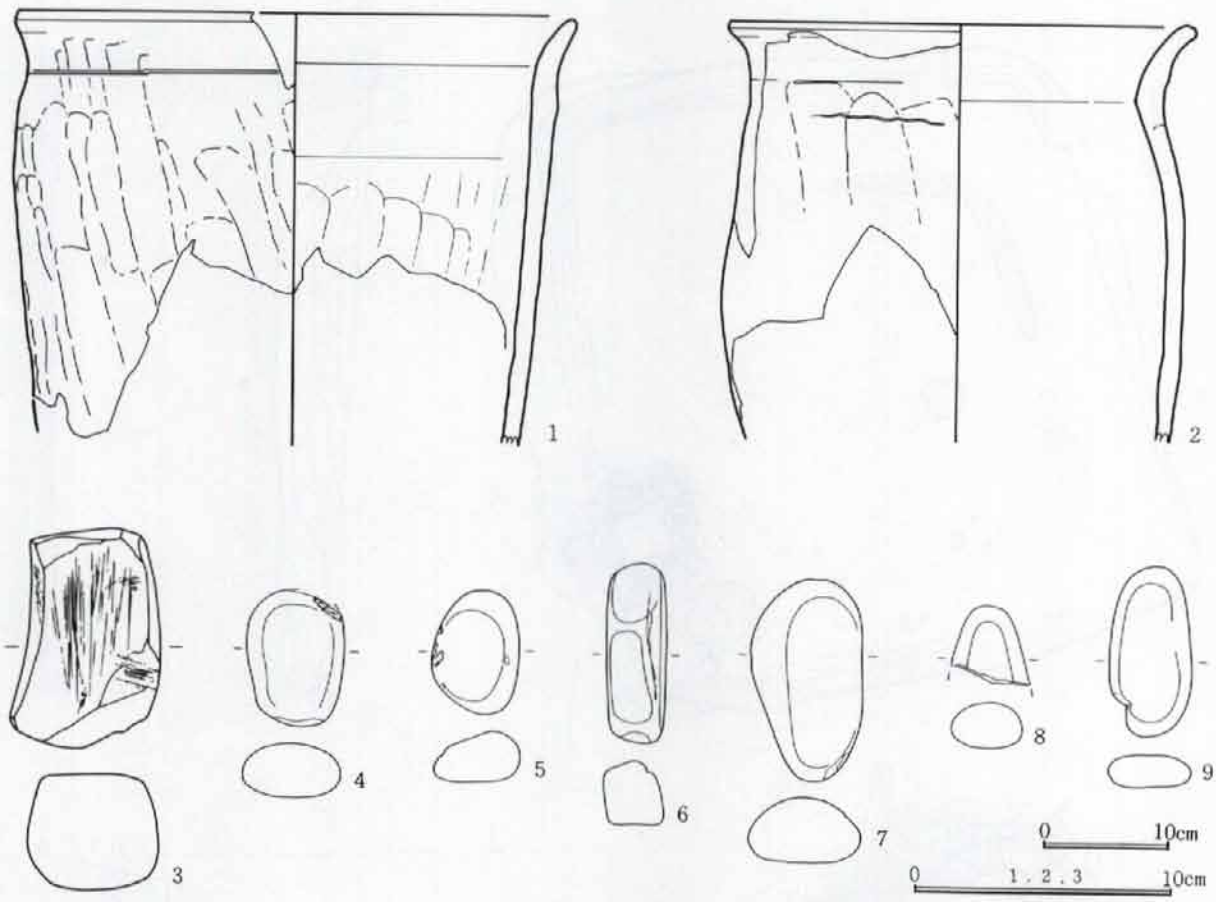
11、褐灰色土　焼け土Bを含む

12、暗褐色土　焼け土Bを少量含む　13、10層と同じ

14、褐灰色土　焼土Bを含む

15、褐灰色土　灰白色粘土Bを多量に含む　16、灰白色粘土

第45図　11号住居跡



第46図　11号住居跡出土遺物

11号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕	21.5	〈17.0〉		粗砂粒	良好	淡褐色	
2	土師器長胴甕	(18.2)	〈16.9〉		粗砂粒	良好	淡褐色～赤褐色	

番号	器種	長	幅	厚	重	石質	砂岩	番号	器種	長	幅	厚	重	石質	砂岩
3	砥石	8.6	5.9	4.8	311	石質	砂岩	4	編石	10.7	7.7	4.6	598	石質	変質安山岩
5	編石	9.8	6.9	4.0	347	石質	輝石安山岩	6	編石	14.1	4.8	5.1	596	石質	輝石安山岩
7	編石	16.0	8.8	5.2	741	石質	輝石安山岩	8	編石	6.1	6.3	3.9	181	石質	輝石安山岩
9	編石	13.4	6.6	3.0	432	石質	輝石安山岩								

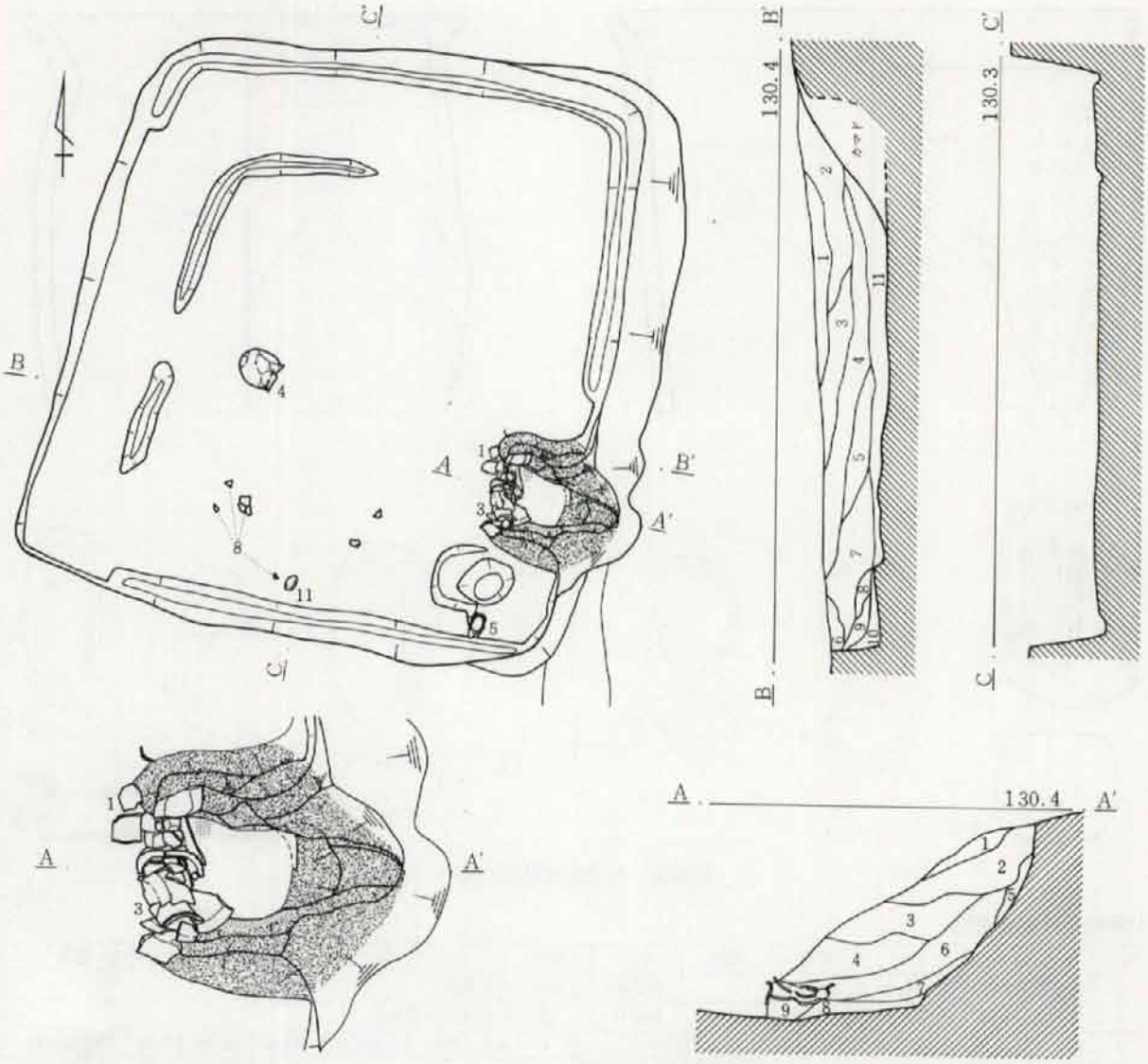
12号住居跡（第47図）

Ⅲ調査区のＣＮ・ＣＯ—39Ｇにその大半を占め、標高129.90～130.40m間に検出され、東辺部分が西傾斜面と低地面の変換部分に位置する。北西方向に接近して11号住居跡がある。

形状はやや南北に長い隅丸方形を呈する。規模は東西長５ｍ、南北長5.35mを測る。主軸は、Ｅ—13°—Ｓにとる。掘り込みは傾斜～低地面への変換部の東壁で85～90cm、北西隅で57cm、南西隅で45cmが残存し、東壁の上面が開口する。床面は平坦なローム面である。周溝は東壁のカマド左袖脇～北壁～北西隅と南壁沿いに検出され、幅12～20cmで深さ３～６cmを測る。また、北西～西方の床面にも周溝状の掘り込みがあり、当住居跡は拡張が考えられる。柱穴は検出されなかった。

貯蔵穴はカマド右袖部の脇に配され、44×37cmの楕円形で深さ36cmを測る。この掘り込みを囲む様に西側には蓋受け状の浅い段が見られる。

カマドは東辺の南寄りに灰白色粘土によって構築され、両袖部先端に礫を芯材とする。焚き口から煙道部までの全長は1.1m、焚き口幅46cmを測り、焚き口部の天井は２個体の長甕（１と３）を連結して袖



第47図　12号住居跡

12号住居跡土層註

1、黒褐色土　ＦＰを含む　2、暗褐色土　ＦＰを含む　3、黒褐色土　ＦＰと焼土粒を含む　4、黒褐色土　ＦＰを含む
5、暗褐色土　ＦＰと焼土粒を含む　6、暗褐色土　ローム粒を含む　7、暗褐色土　ロームＢ、ローム粒を少量含む
8、暗褐色土　ロームＢ、ローム粒を含む　9、黒褐色土　ＦＰを含む　10、暗褐色土　11、暗褐色土　灰白色粘土、焼土粒、ロームＢを含む

12号住居跡カマド土層註

1、暗褐色土　ＦＰを含む　2、褐色土　焼土粒を多量に含む　3、暗褐色土　灰白色粘土、焼土粒を含む　4、暗褐色土　灰白色粘土と少量の焼土粒を含む　5、暗褐色土　灰白色粘土と焼土粒を含む　6、褐色土　焼土Ｂ・焼け土粒を多量に含む　7、黒褐色土　焼土粒を少量含む
8、暗褐色土　焼土粒を少量含む

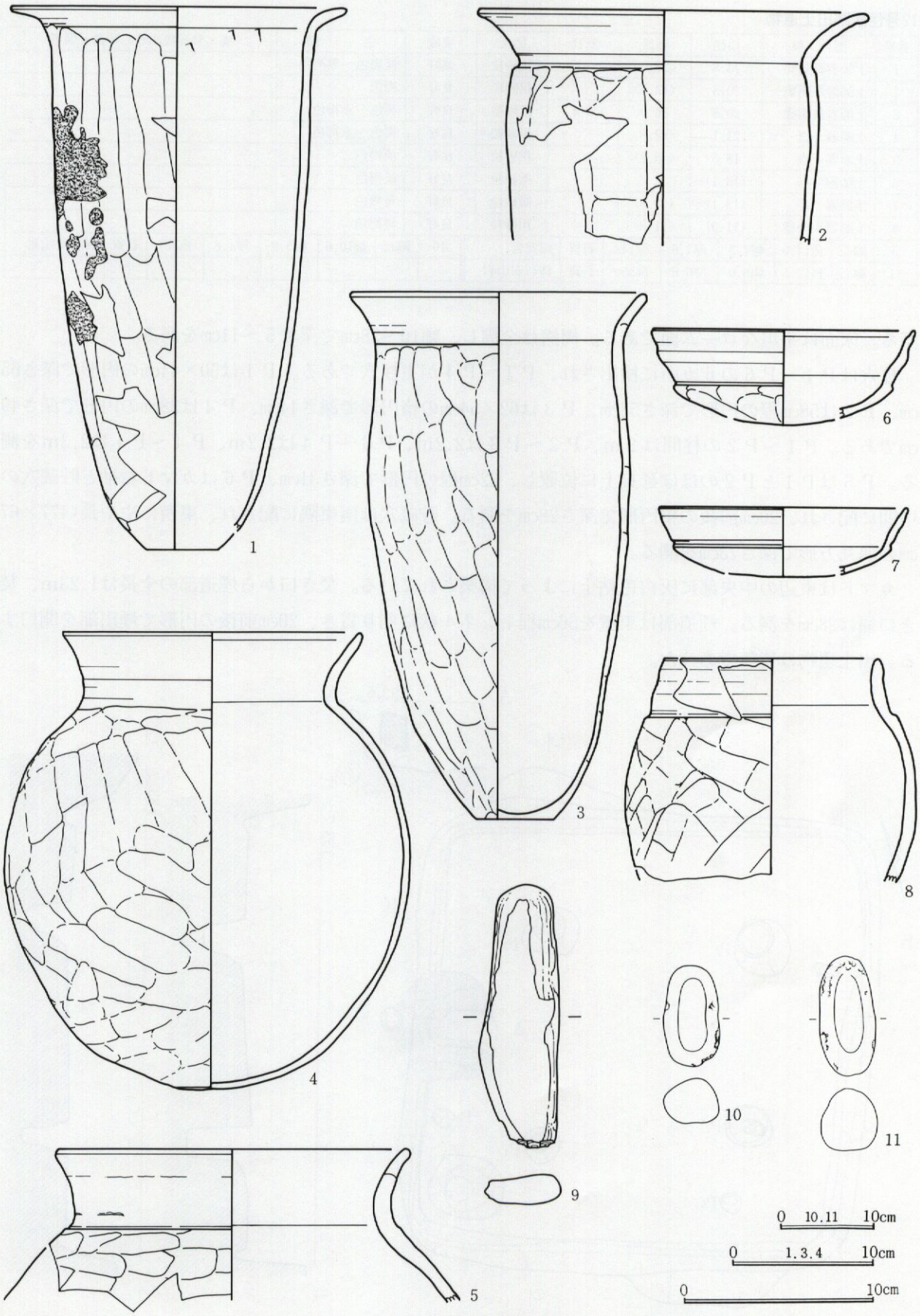
部先端に配された礫に架けられたと考えられる。

遺物は床面中央やや西寄りで甕（４）、貯蔵穴周辺と南寄りの床面に甕・坏・編石が散在して出土。

13号住居跡（第49図）

Ⅱ調査区の北方でＣＨ・ＣＩ—52Ｇにその大半を占め、標高133.60m前後の台地平坦部に検出され、当調査区における唯一の遺構である。

形状は一辺が4.95m前後を測る隅丸方形を呈し、主軸はＮ—69°—Ｅにとる。掘り込みは、55～65cmを



第48図　12号住居跡出土遺物

12号住居跡出土遺物

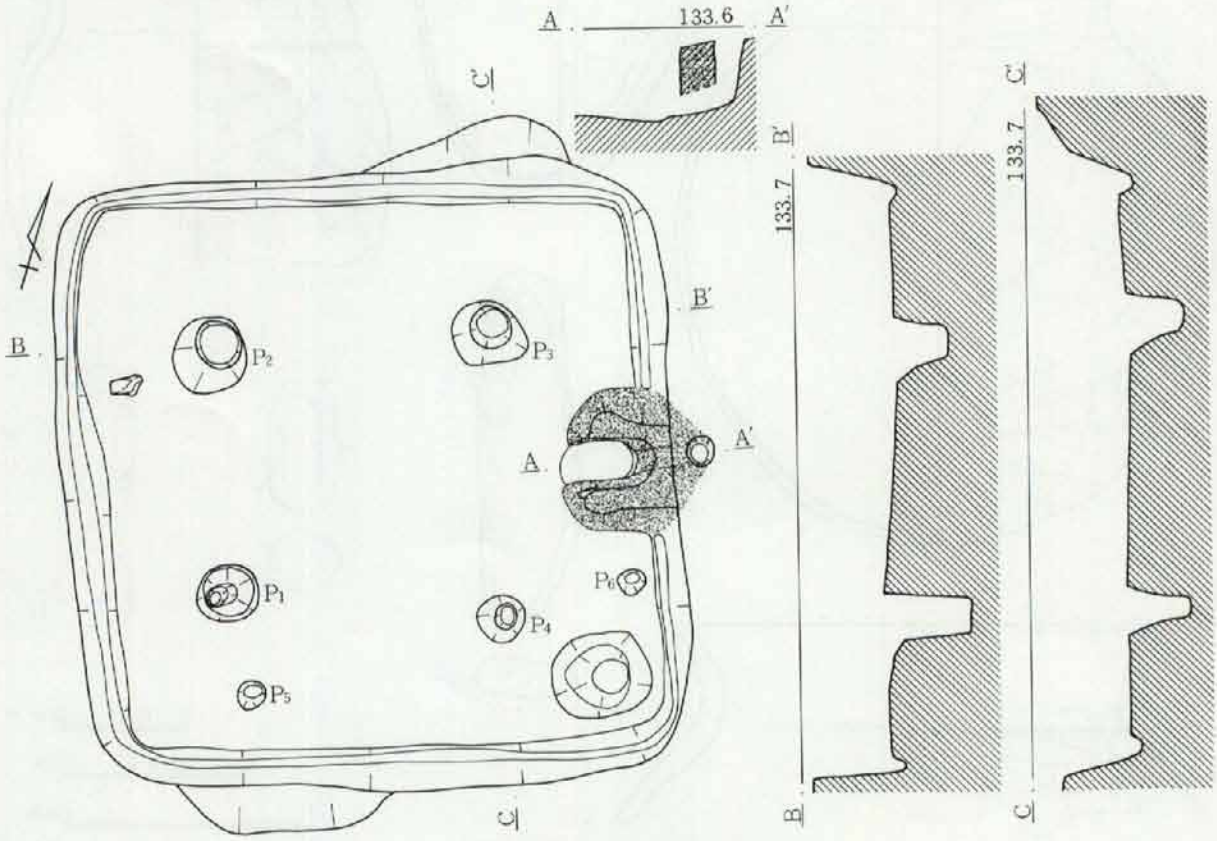
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕	23.8	〈37.6〉		粗砂粒	良好	淡褐色～黒褐色	
2	土師器長胴甕	20.5	〈12.6〉		粗砂粒	良好	褐色	
3	土師器長胴甕	20.8	38.0	5.4	粗砂粒	良好	褐色～赤褐色	
4	土師器　壺	21.1	32.8		粗砂粒	良好	褐色～赤褐色	
5	土師器　壺	18.5	〈 8.2〉		粗砂粒	良好	淡褐色	
6	土師器　坏	(13.1)			微砂粒	良好	淡褐色	
7	土師器　坏	(13.1)	(3.8)		微砂粒	良好	黄橙色	
8	土師器小型甕	(11.0)	〈11.8〉		粗砂粒	良好	淡褐色	

9	編石	長14.0	幅4.3	厚1.6	重142	石質	緑泥岩	10	編石	長10.6	幅5.9	厚4.8	重361	石質	輝石安山岩
11	編石	長12.5	幅6.0	厚6.6	重550	石質	輝石安山岩								

測る。床面は平坦なローム面である。周溝は全周し、幅10～28cmで深さ５～11cmを測る。

柱穴はＰ１～Ｐ６の６カ所に検出され、Ｐ１～Ｐ４が主柱穴である。Ｐ１は50×44cmの円形で深さ65cm、Ｐ２は58cm程の円形で深さ58cm、Ｐ３は62×54cmの楕円形で深さ44cm、Ｐ４は38cmの円形で深さ49cmである。Ｐ１～Ｐ２の柱間は２m、Ｐ２～Ｐ３は2.2m、Ｐ３～Ｐ４は2.2m、Ｐ４～Ｐ１は2.3mを測る。Ｐ５はＰ１とＰ２のほぼ延長上に位置し、22cm程の円形で深さ31cm、Ｐ６はカマド右袖と貯蔵穴の中間に配され、20cm前後の楕円形で深さ28cmを測る。貯蔵穴は南東隅に配され、東西にやや長い77×67cmの隅丸方形で深さ73cmを測る。

カマドは東辺の中央部に灰白色粘土によって構築されている。焚き口から煙道部の全長は1.23m、焚き口幅は28cmを測る。煙道部は東壁を56cm程トンネル状に刳り貫き、20cm前後の円形で煙出部を開口する。出土遺物は皆無であった。



第49図　13号住居跡

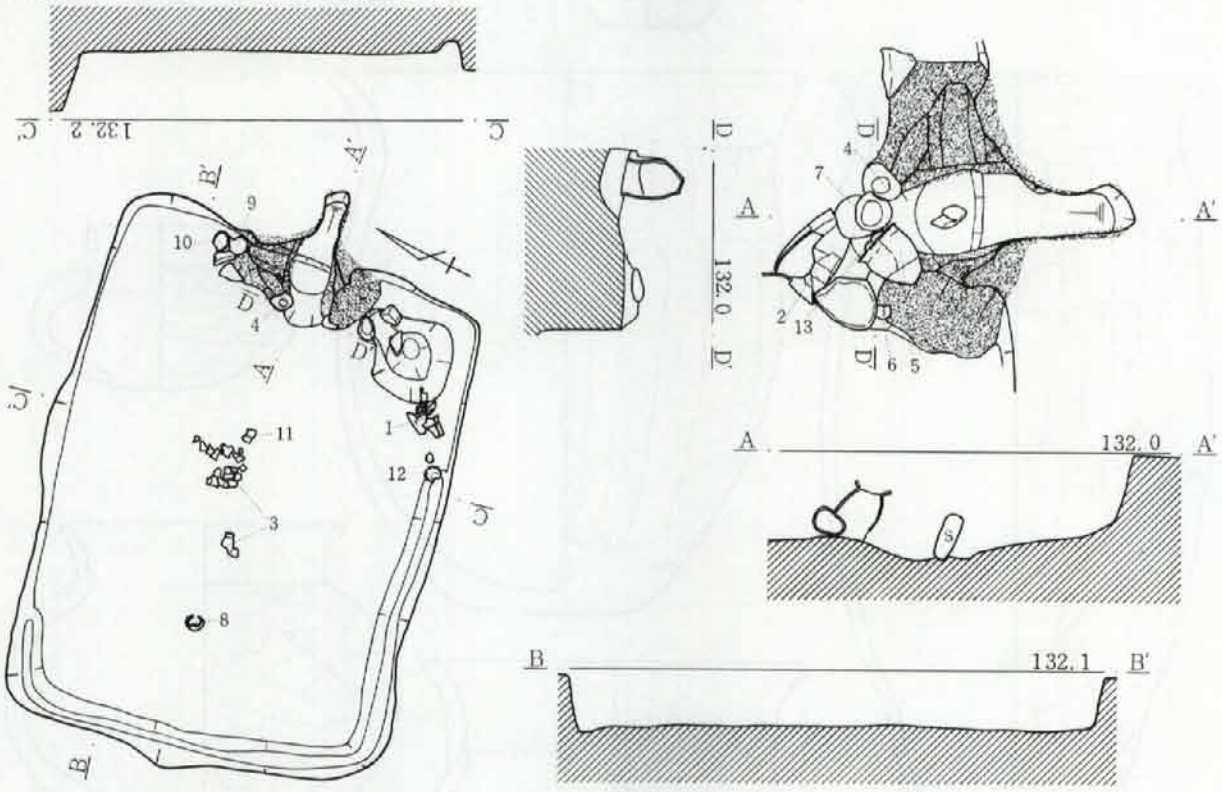
14号住居跡（第50図）

Ⅰ調査区のＢＯ—59・60Ｇに跨がって標高132.10～132.20mの台地平坦部に検出され、南方に15号住居跡が隣接する。

形状は東西に長い隅丸長方形で南辺が短い。規模は東西長4.40m、南北長3.18mを測る。主軸は、N—77°—Eにとる。掘り込みは残存の良い北東隅で48cm、残存の悪い南壁中央で17cmである。床面はほぼ平坦なローム面である。周溝は北西隅～南壁中央やや東寄りに連続し、幅20cm前後で深さ２～９cmを測る。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に配され、60cm前後の隅丸方形で深さ59cmを測る。北東隅はカマド右袖部と貯蔵穴間に小柱穴をもつ掘り込みが連結する。

カマドは灰白色粘土によって構築され、左袖部先端の芯材として長胴甕（４）、右袖部先端には礫を芯材に設け、この間に長胴甕（２）等を架けて焚き口部天井としていると考えられ、内部に煮沸具として使用された甕（５と７）がある。焚き口から煙道部の全長は1.16m、焚き口幅28cmを測り、燃焼部に支脚石が見られる。

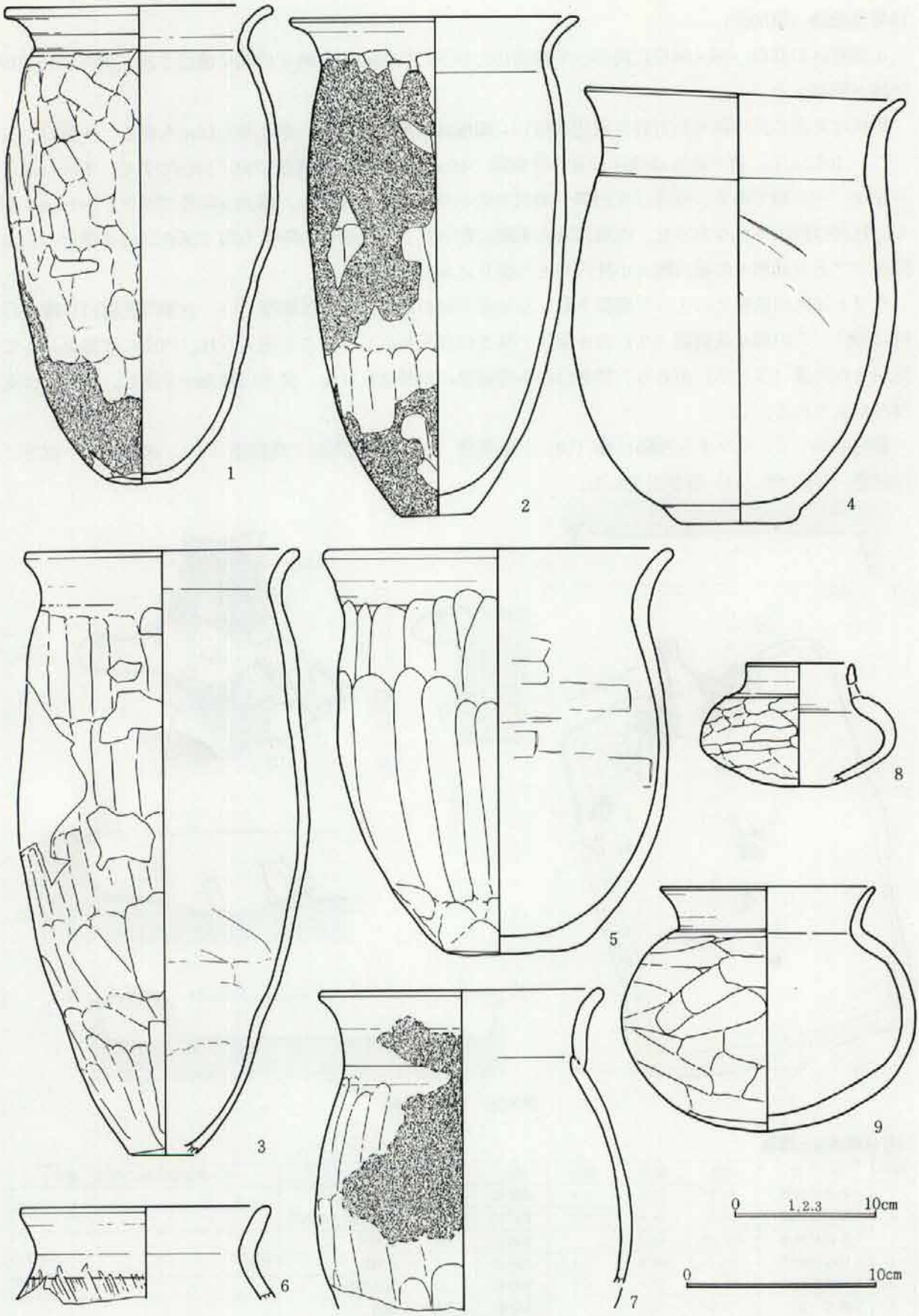
遺物はカマド、カマド左袖脇に甑（10）と小型甕（９）、貯蔵穴脇で長胴甕（１）、床面中央～西方に長胴甕（３）、坏（11）等が出土した。



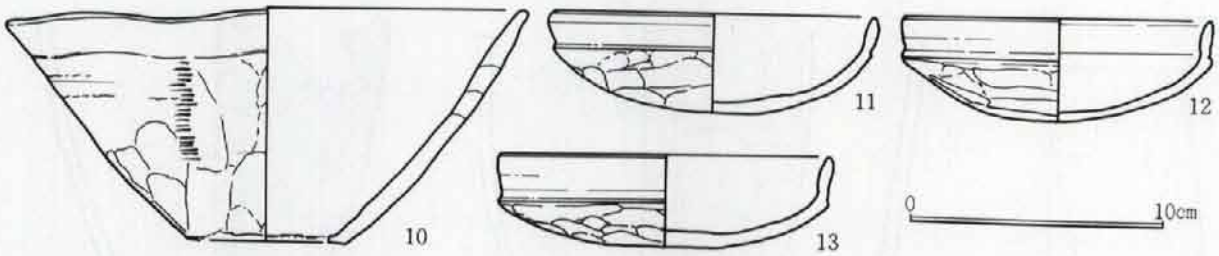
第50図　14号住居跡

14号住居跡出土遺物

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕	18.5	33.8	4.8	粗砂粒	良好	赤褐色	
2	土師器長胴甕	20.5	35.9	4.9	粗砂粒	良	淡黄褐色～赤褐色	
3	土師器長胴甕	(19.0)	42.5		粗砂粒	良	黒褐色	
4	土師器長胴甕	16.4	22.6	6.4	粗砂粒	良	赤褐色	完形
5	土師器長胴甕	17.6	21.4	7.1	粗砂粒	良	淡黄褐色	
6	土師器　壺	(12.9)	〈4.9〉		粗砂粒	良好	褐色	
7	土師器長胴甕	14.7	〈16.9〉		粗砂粒	良好	褐色	



第51図　14号住居跡出土遺物（1）



第52図　14号住居跡出土遺物（2）

8	土師器小型壺	5.6	〈6.3〉		粗砂粒	良好	褐色	
9	土師器小型甕	11.4	12.9		粗砂粒多	良好	淡褐色～黒褐色	
10	土師器　甑	20.0	9.3	6.1	粗砂粒	良好	淡黄褐色～暗褐色	単孔孔径4.7
11	土師器　坏	(12.1)	4.0		粗砂粒	良好	褐色	
12	土師器　坏	(12.3)	4.2		粗砂粒	良好	淡黒褐色	
13	土師器　坏	12.8	3.7		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	ほぼ完形

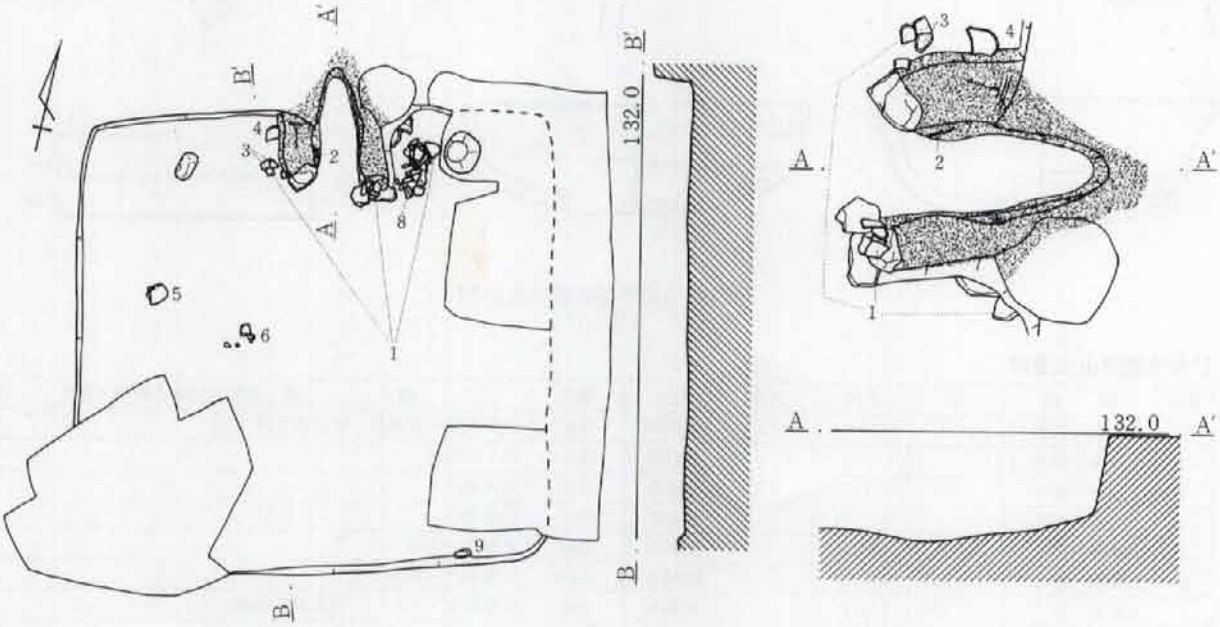
15号住居跡（第53図）

Ⅰ調査区のＢＮ—60Ｇにその大半を占め、標高132m前後の台地平坦部に検出され、北方に14号住居跡が隣接する。カマドの一部、東辺、南西隅部分に攪乱穴が及んでいる。

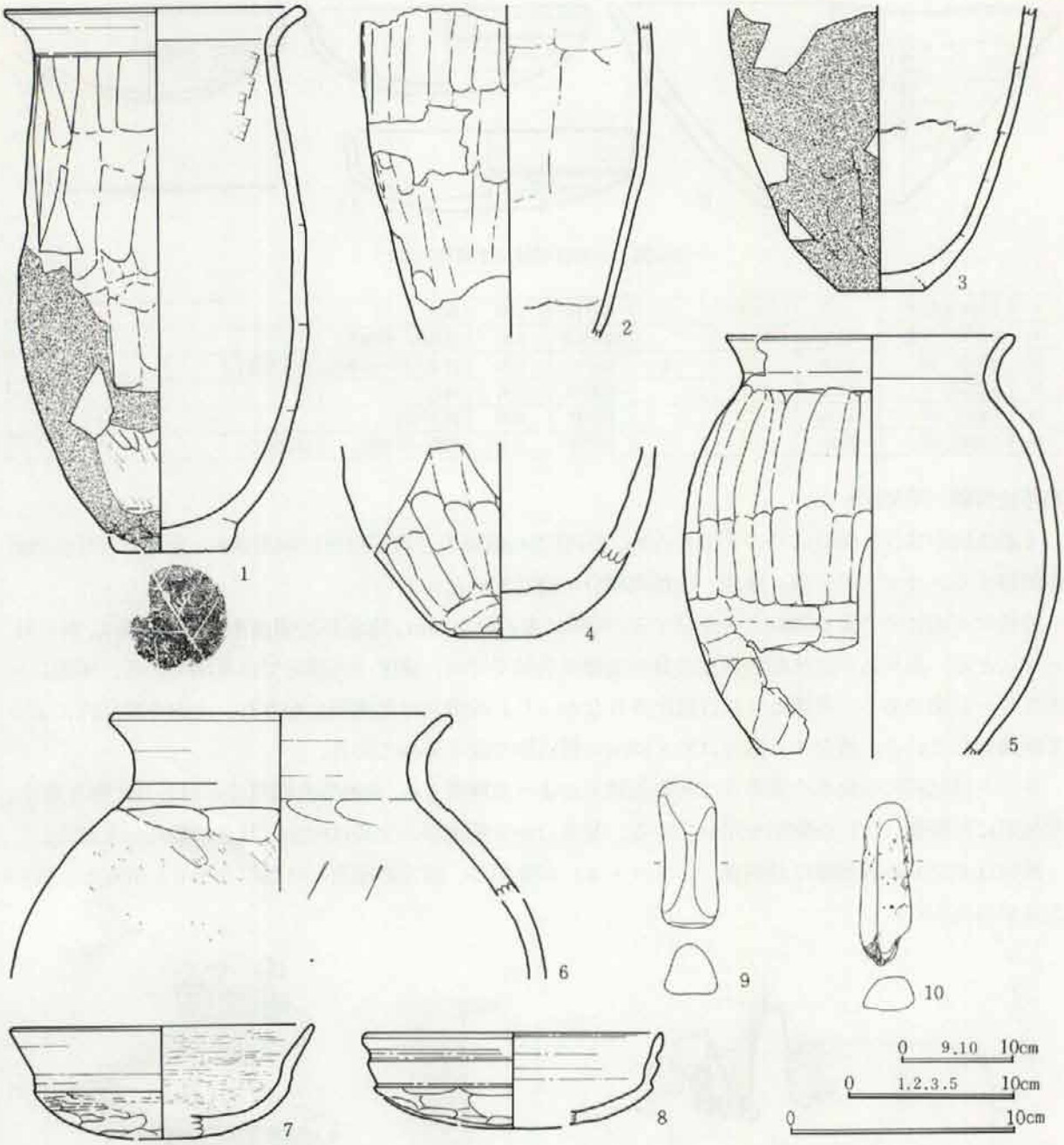
形状は東西にやや長い隅丸方形を呈する。規模は東西長3.80m、南北長3.66mを測る。主軸は、N—11°—Wにとる。掘り込みは比較的残存の良い北壁中央部で29cm、南壁中央部分では９cmである。床面は平坦なローム面である。周溝と柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は北東隅に配され、上面を攪乱穴によって破壊されている。残存する部分は32×28cmの楕円形で深さ58cmである。

カマドは北辺の中央やや東寄りに灰白色粘土によって構築され、両袖部先端部に芯材として礫を設け、左袖部に長胴甕（２）の胴部を用いている。焚き口から煙道部の全長は92cm、焚き口幅35cmを測る。

遺物はカマドの両袖脇に長胴甕（１・３・４）が集中し、西方の床面には甕（５と６）散在し、編石２点が出土した。



第53図　15号住居跡



第54図　15号住居跡出土遺物

15号住居跡出土遺物

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕	18.1	33.8	(7.0)	粗砂粒	良好	淡黄褐色～赤褐色	底部木葉痕
2	土師器長胴甕				粗砂粒	良好	赤～暗褐色	
3	土師器長胴甕		〈17.2〉	5.1	粗砂粒	良好	淡黒褐色	
4	土師器長胴甕		〈 8.7〉		粗砂粒	良好	淡黄褐色	
5	土師器　甕	(17.0)	〈25.3〉		粗砂粒	良好	黄褐色～褐色	
6	土師器　壺	(15.0)	〈12.0〉		粗砂粒少	良好	淡黄褐色～褐色	
7	土師器　坏	(13.6)	(5.1)		粗砂粒	良好	淡黄褐色	内面黒色研磨
8	土師器　坏	(13.7)	(4.5)		粗砂粒	良好	褐色	

9	編石	長13.4	幅5.3	厚4.7	重483	石質	花崗閃緑岩	10	編石	長14.7	幅4.9	厚3.8	重378	石質	輝石安山岩

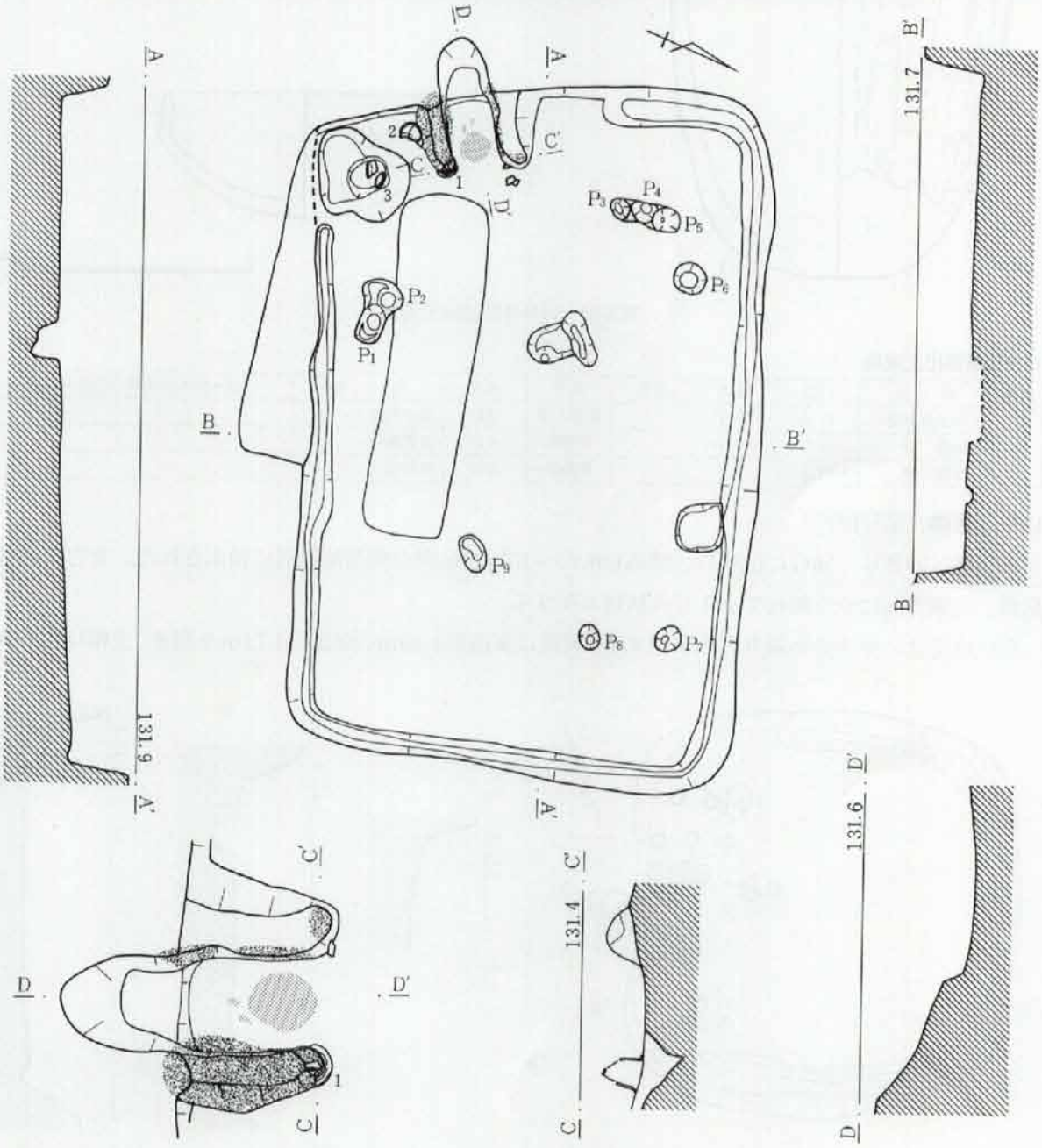
16号住居跡（第55図）

Ⅰ調査区のＢＫ・ＢＬ—55Ｇにその大半を占め、標高131.50～131.90m間の南西傾斜面に検出された。北東方向に22mほど隔てて14・15号住居跡、南方に18m隔てて17号住居跡が位置する。

形状は東西に長い隅丸長方形を呈する。規模は東西長6.3m、南北長4.16mを測る。主軸は、掘り込みは残存の良い南東部で58cm、カマド周辺で40cm前後である。床面はほぼ平坦なローム面である。周溝はカマドと貯蔵穴部分を除いて連結する。幅15～30cm、深さ２～８cmを測る。

柱穴はＰ１～Ｐ10が検出されたが、主柱穴は明確でない。貯蔵穴は南西隅に配され、歪んだ８の字状の掘り込みに36×30cmの楕円形で深さ46cmの掘り込みをもつ。

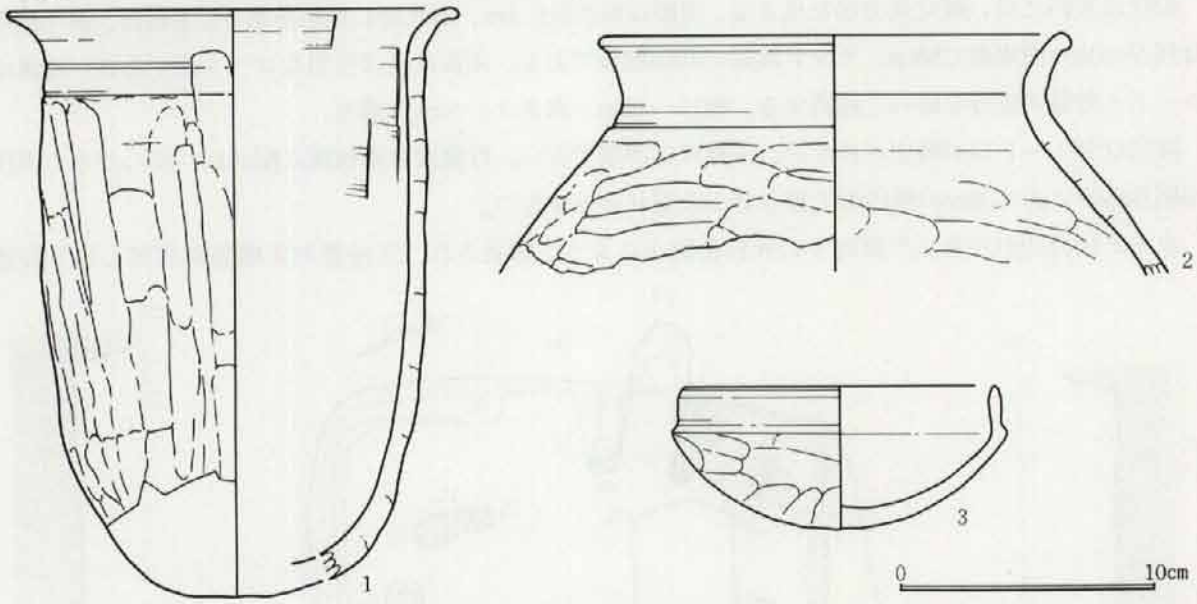
カマドは西辺の中央より南寄りに灰白色粘土によって構築され、左袖部の先端部に芯材として長甕



第55図　16号住居跡

（1）を設けている。焚き口から煙道部の全長は1.2m前後で、焚き口幅40cmを測る。煙道部は舌状に東壁より50cm程張り出す。

遺物はカマド左袖部脇に甕（2）と貯蔵穴に坏（3）が出土。



第56図　16号住居跡出土遺物

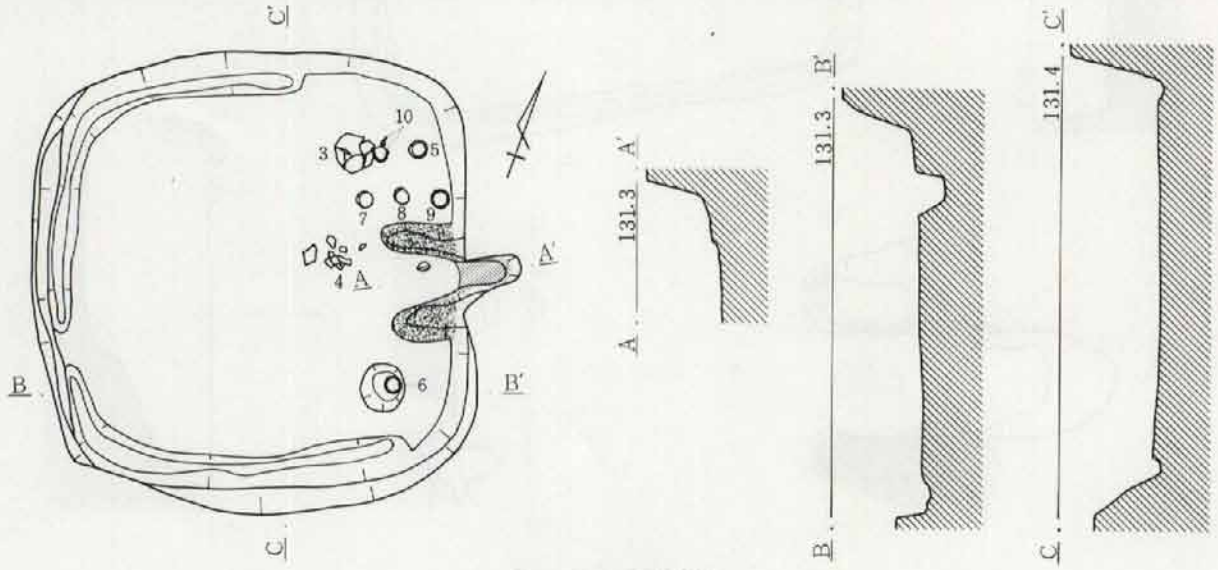
16号住居跡出土遺物

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕	17.3	〈23.1〉		粗砂粒多	良好	淡赤褐色	
2	土師器　壺	(18.0)	〈 9.4〉		粗砂粒	良好	淡黄褐色	
3	土師器　坏	12.2	5.6		粗砂粒	良好	黒褐色	

17号住居跡（第57図）

Ｉ調査区のＢＧ—56Ｇに位置し、標高130.80～131.30m間の南西傾斜面に検出された。北方に16号住居跡、南東方向にやや離れてＪ１号住居跡が配する。

形状は南北にやや長い隅丸方形を呈する。規模は東西長3.46m、南北長3.71mを測る。主軸は、N—66°

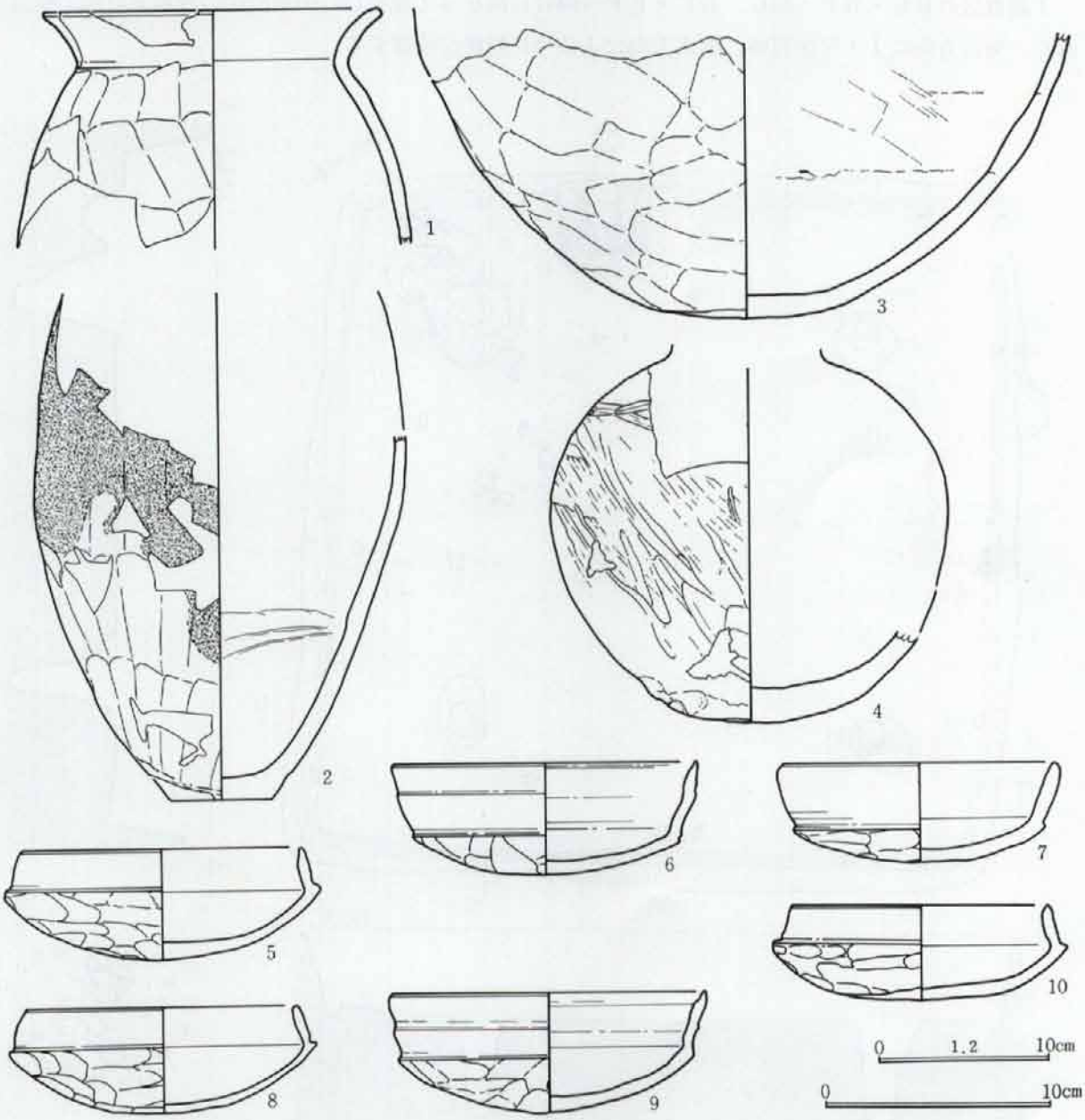


第57図　17号住居跡

—Eにとる。掘り込みは傾斜面上方に位置する東壁で53～74cm、西壁で23～33cmが残存し、南東部分の上面が開口する。床面は平坦なローム面である。周溝は北壁中央やや東～西壁中央やや南、南壁～南西隅に検出された。幅10～20cm、深さ3～7cmを測る。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に配され、38×33cmの楕円形で深さ24cmを測る。

カマドは東辺のほぼ中央部分に灰白色粘土によって構築されている。焚き口から煙道部の全長は1.05m、焚き口幅45cmを測る。煙道部は東壁から住居跡外に幅25cm、長さ45cmで突出する。

遺物は、カマド内より同一固体と考えられる長胴甕（1と2）、貯蔵穴内部に坏（6）とカマド左袖部周辺に坏・甕が集中して出土。



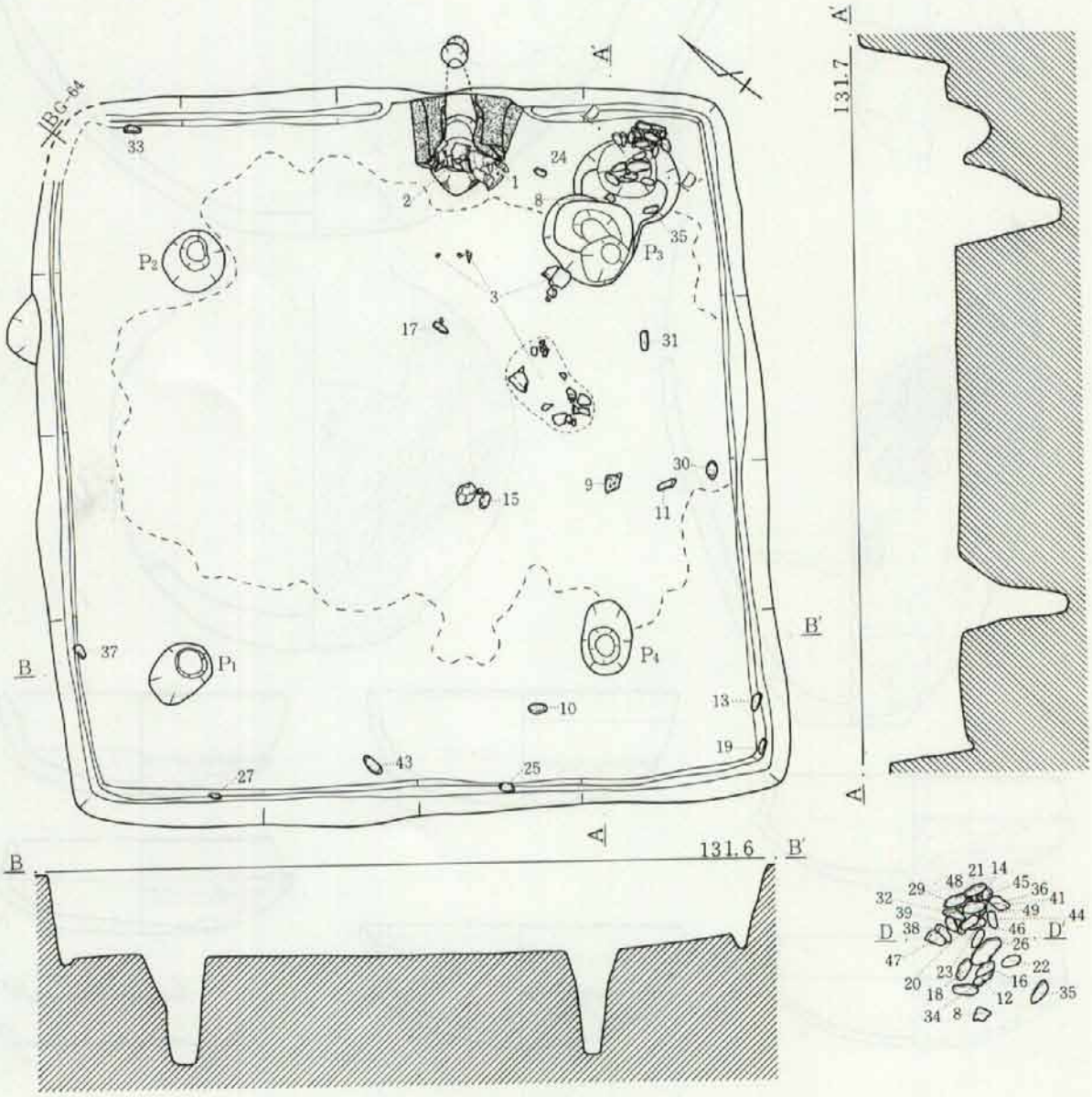
第58図　17号住居跡出土遺物

17号住居跡出土遺物

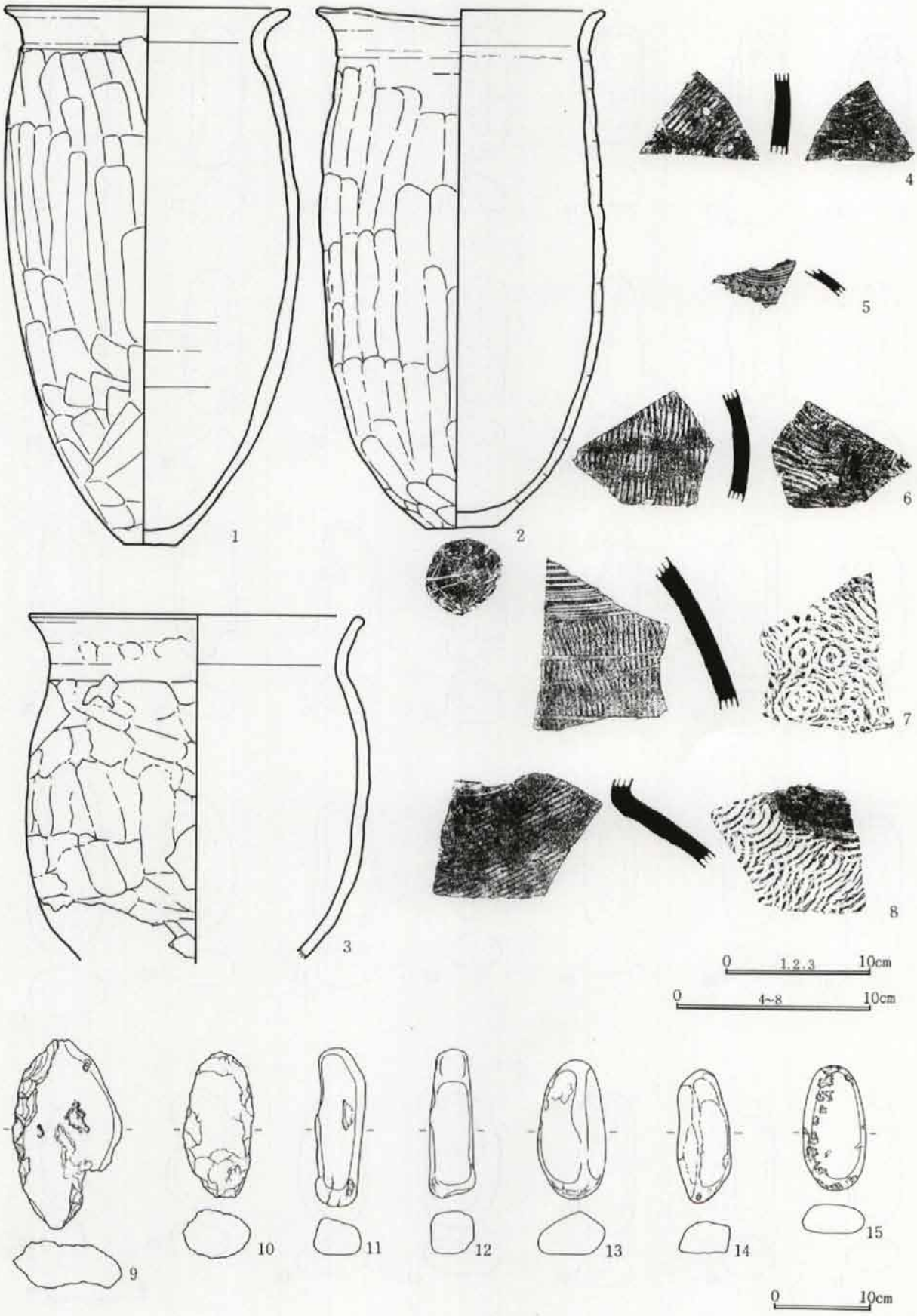
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕	19.5	〈14.0〉		粗砂粒	良	淡黄褐色～赤褐色	
2	土師器長胴甕		〈30.0〉	(6.0)	粗砂粒	良	褐色～黒褐色	
3	土師器　壺		〈13.2〉		粗砂粒	良好	淡黄褐色～黒褐色	
4	土師器　壺		(16.0)		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	
5	土師器　坏	12.3	4.9		粗砂粒	良好	淡赤褐色～黒褐色	
6	土師器　坏	13.6	5.1		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	
7	土師器　坏	12.0	4.4		粗砂粒	良好	淡黄褐色～黒褐色	
8	土師器　坏	11.9	4.8		粗砂粒	良好	褐色～黒褐色	
9	土師器　坏	13.8	5.4		粗砂粒	良好	黒褐色	
10	土師器　坏	11.5	4.3		粗砂粒	良好	淡褐色～黒褐色	

18号住居跡（第59図）

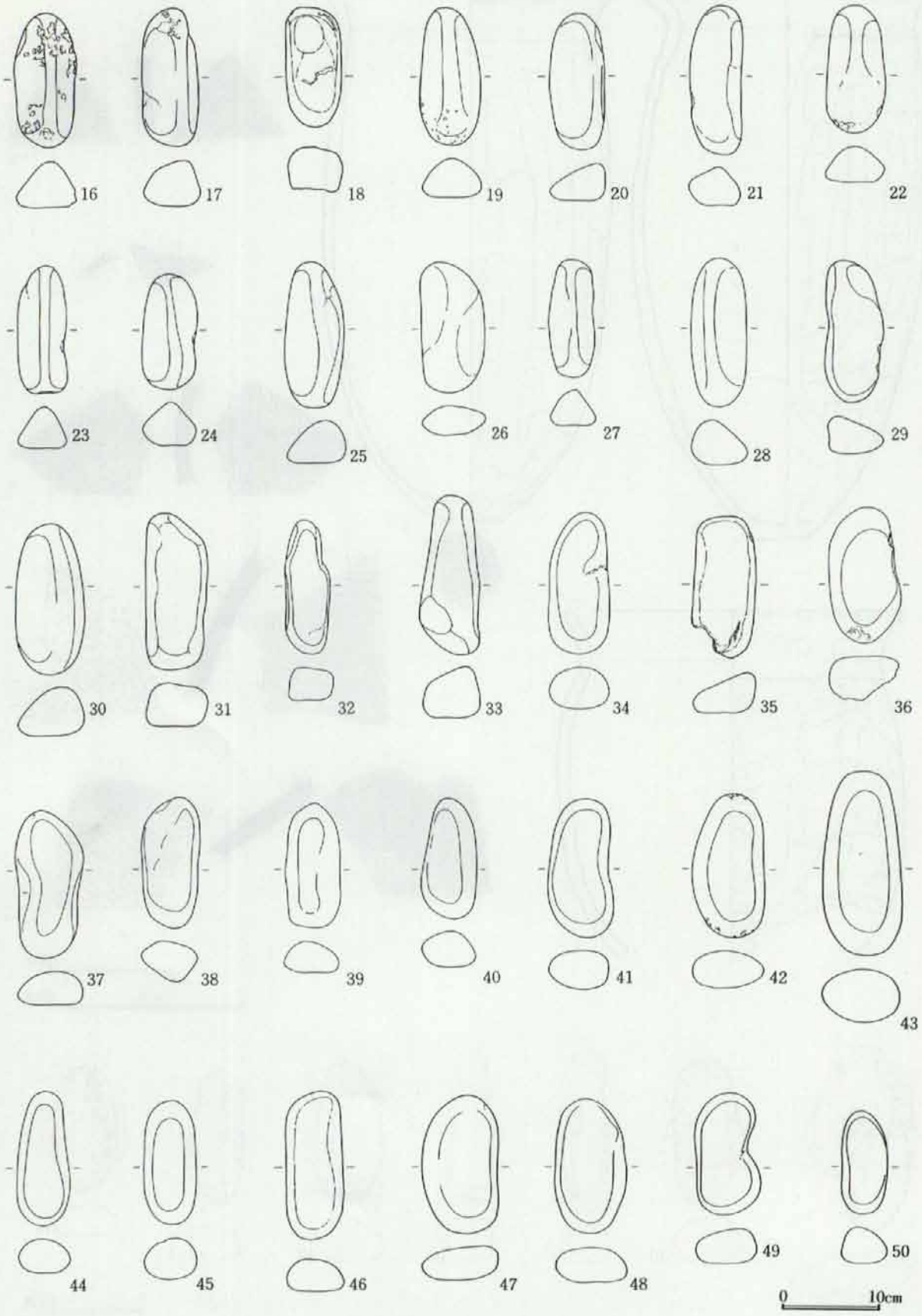
Ⅰ調査区のＢＥ・ＢＦ—63G、ＢＥ・ＢＦ—64Gに跨がって標高131.60m前後の台地平坦部に検出された。南西方向にＪ１号住居跡、南東方向にＪ３号住居跡が位置する。



第59図　18号住居跡



第60図　18号住居跡出土遺物（1）



第61図　18号住居跡出土遺物（2）

形状は隅丸方形を呈し、規模は東西6.32m、南北6.46mを測る。主軸は、N—53°—Eにとる。掘り込みは最大が北隅で87cm、最小が南隅で57cmが残存する。床面は安定した平坦面で、堅緻面が4本主柱穴の区画内部から南壁中央部分に広がる。周溝はカマドの両脇から全周する。幅10～20cm、深さ2～8cmを測る。

柱穴は4本主柱穴P1～P4が検出された。P1は58×46cmの楕円形で深さ96cm、P2は53cmの円形で深さ80cm、P3は貯蔵穴と重複し、83×72cmの歪んだ楕円形で内部に2カ所の掘り込みがあり、建て替えが考えられる。深さは79と96cmである。P4は64×42cmの楕円形で深さ93cmである。貯蔵穴は東隅に配され、88×78cmの楕円形で深さ79cmを測る。

カマドは東辺の中央やや南寄りに灰白色粘土によって構築され、両袖部の先端に芯材として礫を設ける。この礫間に長胴甕（1と2）を2つ連結して渡し、焚き口部の天井とする。焚き口から煙道部の全長は1.35m、焚き口幅40cmを測る。煙道部は東壁をトンネル状に47cm程刳り貫き、煙出部を26×21cmの円形に開口する。

遺物は貯蔵穴の上面に編石が集中し、合計で42個が出土した。P3～P4に甕（3）が散在して出土。

18号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	成・整形技法等の特徴・備考
1	土師器長胴甕	19.6	37.5	3.6	粗砂粒	良好	淡黄褐色～赤褐色	
2	土師器長胴甕	19.8	36.2	6.0	粗砂粒	良好	赤褐色	底部木葉痕
3	土師器 甕	22.6	〈24.0〉		粗砂粒	良好	褐色～赤褐色	
4	須恵器				粗砂粒	良好	青灰褐色	6と同一個体
5	須恵器				微砂粒	良好	暗灰褐色	
6	須恵器				粗砂粒	良好	青灰褐色	
7	須恵器				微砂粒	良好	灰褐色	
8	須恵器				微砂粒	良好	灰褐色	

9	編石	長19.9	幅11.3	厚5.3	重 671	石質	輝石安山岩	10	編石	長15.2	幅7.4	厚5.3	重712	石質	黒雲母花崗岩
11	編石	長16.5	幅 5.1	厚4.4	重 521		礫岩	12	編石	長15.5	幅4.8	厚4.7	重549		礫岩
13	編石	長14.4	幅 7.1	厚4.9	重 697		輝石安山岩	14	編石	長14.1	幅5.7	厚4.8	重506		砂岩
15	編石	長13.0	幅 6.5	厚3.5	重 436		輝石安山岩	16	編石	長13.9	幅6.4	厚5.0	重621		礫岩
17	編石	長14.2	幅 5.9	厚5.0	重 633		礫岩	18	編石	長12.7	幅5.8	厚4.9	重588		輝石安山岩
19	編石	長14.1	幅 6.3	厚3.9	重 565		ひん岩	20	編石	長14.0	幅5.7	厚3.8	重445		石英斑岩
21	編石	長15.3	幅 5.4	厚3.9	重 487		石英斑岩	22	編石	長13.1	幅6.1	厚3.8	重422		輝石安山岩
23	編石	長13.2	幅 5.1	厚4.5	重 445		花崗閃緑岩	24	編石	長11.8	幅5.7	厚4.5	重399		珪長岩
25	編石	長15.0	幅 6.1	厚4.3	重 565		輝石安山岩	26	編石	長13.3	幅6.6	厚3.4	重428		輝石安山岩
27	編石	長12.1	幅 4.8	厚4.0	重 312		礫岩	28	編石	長15.2	幅5.8	厚4.6	重654		輝石安山岩
29	編石	長14.4	幅 6.1	厚4.1	重 487		閃緑岩	30	編石	長15.5	幅7.1	厚5.0	重801		輝石安山岩
31	編石	長16.0	幅 6.5	厚4.6	重 825		礫岩	32	編石	長13.8	幅4.7	厚4.1	重375		輝石安山岩
33	編石	長16.3	幅 6.2	厚5.2	重 747		礫岩	34	編石	長14.5	幅6.3	厚4.3	重668		輝石安山岩
35	編石	長14.5	幅 6.6	厚5.2	重 664		火山礫凝灰岩	36	編石	長13.9	幅7.4	厚5.0	重703		花崗斑岩
37	編石	長15.2	幅 6.9	厚3.8	重 639		輝緑岩	38	編石	長13.3	幅6.0	厚4.1	重455		礫岩
39	編石	長12.7	幅 5.7	厚3.4	重 360		石英斑岩	40	編石	長12.2	幅5.7	厚3.7	重383		砂岩
41	編石	長14.3	幅 6.7	厚4.0	重 596		輝石安山岩	42	編石	長14.7	幅7.5	厚3.8	重656		輝石安山岩
43	編石	長19.0	幅 8.2	厚5.4	重1369		輝石安山岩	44	編石	長14.0	幅5.5	厚3.7	重398		輝石安山岩
45	編石	長13.8	幅 5.5	厚4.3	重 508		輝石安山岩	46	編石	長15.4	幅5.8	厚3.8	重576		ひん岩
47	編石	長14.3	幅 8.0	厚3.6	重 693		花崗閃緑岩	48	編石	長14.0	幅7.4	厚3.8	重596		グリンタフ
49	編石	長12.6	幅 6.8	厚3.6	重 471		輝石安山岩	50	編石	長10.7	幅4.7	厚3.7	重290		輝石安山岩

V　歴史時代以降の遺構・遺物

19号住居跡（第62図）

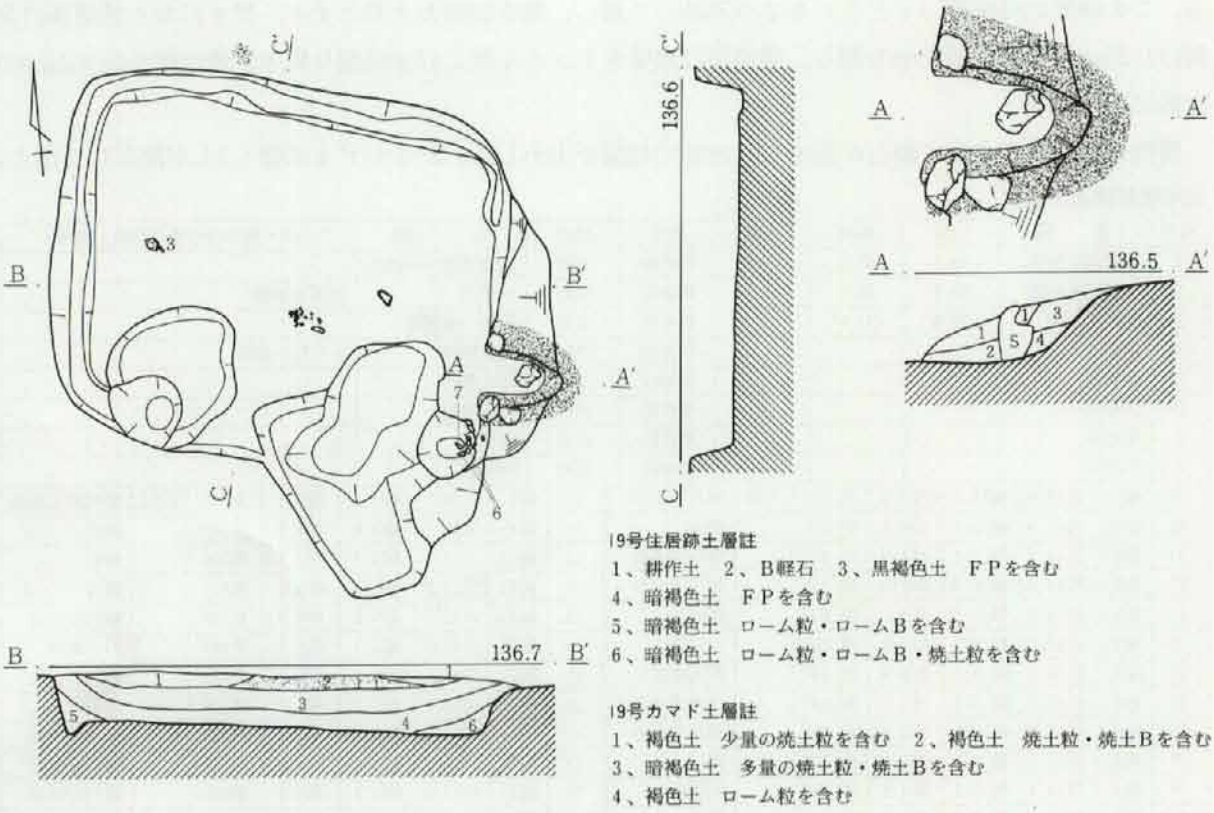
Ⅳ調査区の南方でDM—16Gにその大半を占め、標高136.40～136.70m間の緩やかな南傾斜面に検出された。調査区の北方に地割りの溝が南北に走行する。同台地の西縁辺部には、点在して同期の住居跡

が存在すると推定される

形状は東西に長い隅丸長方形を呈し、南壁部分の２カ所に攪乱穴がある。主軸は、E―13°―Sにとる。規模は東西長3.59m、南北長３ｍを測る。掘り込みは残存の良い北西隅で50cm、南壁中央部分で33cmである。床面はほぼ平坦なローム面である。周溝は北東隅から南西隅に連続し、幅16～25cm、深さ３cm前後を測る。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東隅に配され、50×45cmの円形気味で深さ31cmを測る。

カマドは東壁の南寄りに褐色粘土と礫によって構築され両袖部先端に礫を芯材として設けている。全長65cm、焚き口幅30cm前後を測る。覆土の上面にＢ軽石が堆積する。

遺物は貯蔵穴と床面に土師器と須恵器の坏、高台付碗（４）・高台付皿（５）と覆土より砥石（８）が散在して出土した。



第62図　19号住居跡

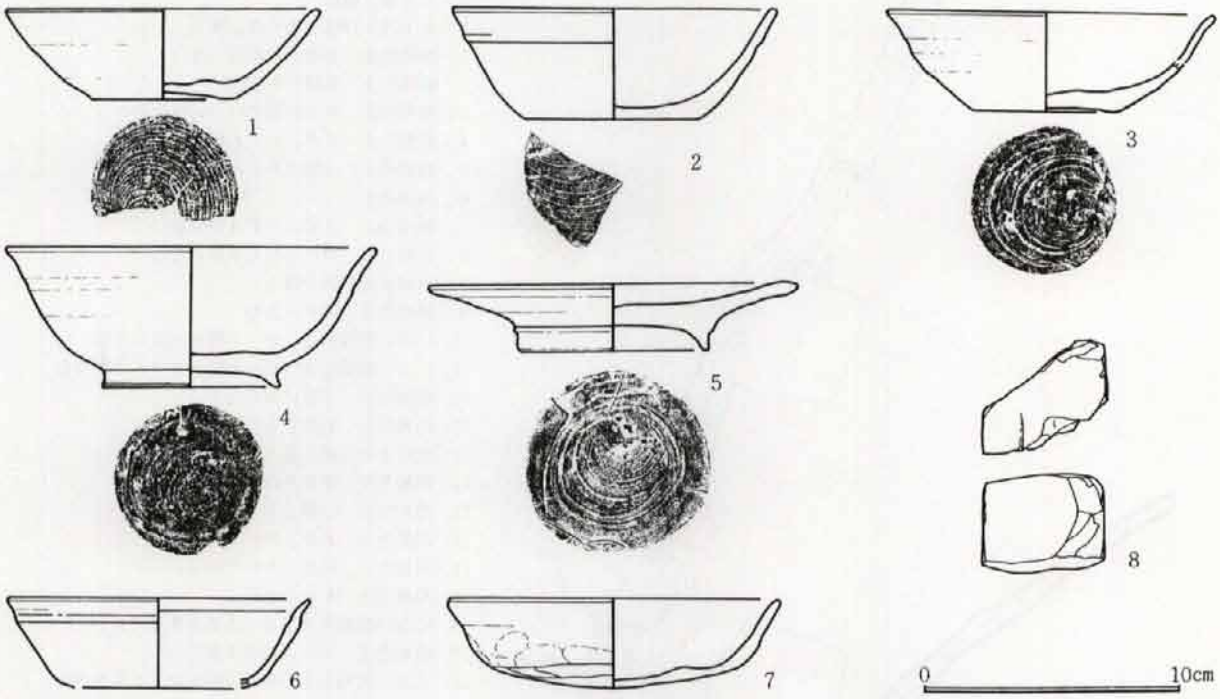
19号住居跡出土遺物

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	成・整形技法等の特徴・備考
1	須恵器　坏	(12.1)	3.6	5.0	粗砂粒	良好	黒褐色～淡黄褐色	
2	須恵器　坏	(12.5)	4.4	6.8	粗砂粒少	良好	暗灰褐色	
3	須恵器　坏	(12.7)	4.0	5.7	粗砂粒	良好	灰褐色	
4	須恵器高台付碗	(14.3)	5.5	6.8	粗砂粒	良好	灰褐色	
5	須恵器高台付皿	(14.3)	2.7	7.3	微砂粒	良好	灰褐色	
6	土師器　坏	(11.6)			微砂粒	良好	褐色	
7	土師器　坏	(12.8)	3.6		粗砂粒	良	褐色	
8	砥石							

溝状遺構（第64図）

１号溝

Ⅲ調査区の中央を東西にＤＡ―45Ｇの標高134.80m付近の傾斜面から低地方向に走行し、１Ａ号溝が１Ｂ号溝を切り、ＤＢ―42Ｇ付近で分岐する。１Ｂ号溝に沿って２Ａ号溝が並走して構築されている。



第63図　19号住居跡出土遺物

１Ａ号溝は主軸をN—55°—W前後にとり、北西の先端部まで全長46m程を検出した。掘り込みの形状は残存の良い傾斜面で南壁がやや緩やかな立ち上がるの片薬研状を呈し、幅2.3m、深さ1.3mを測り、北西方向の低地部分に連れて幅・深さを減じている。覆土から掘り替えが考えられる。

１Ｂ号溝は１Ａ号溝との交差するＤＢ—42Ｇから幅を徐々に減じてほぼ真西に走行し、８号住居跡の北東で二股に分岐している。掘り込みの形状は傾斜面で薬研状を呈し、幅3.5m、深さ1.8mで底面幅20cmほどを測る。１Ａ・１Ｂ号溝とも出土遺物は皆無であった。

２Ａ・Ｂ号溝

２Ａ号溝は１Ｂ号溝の南側に並走し、幅40cm前後でＤＢ—41Ｇで消滅する。２Ｂ号溝は２Ａ号溝と５～5.5m幅で並走し、両者ともに底面が硬化し、道路状を呈している。１Ｂ号溝に共存関係するものの可能性が考えられる。

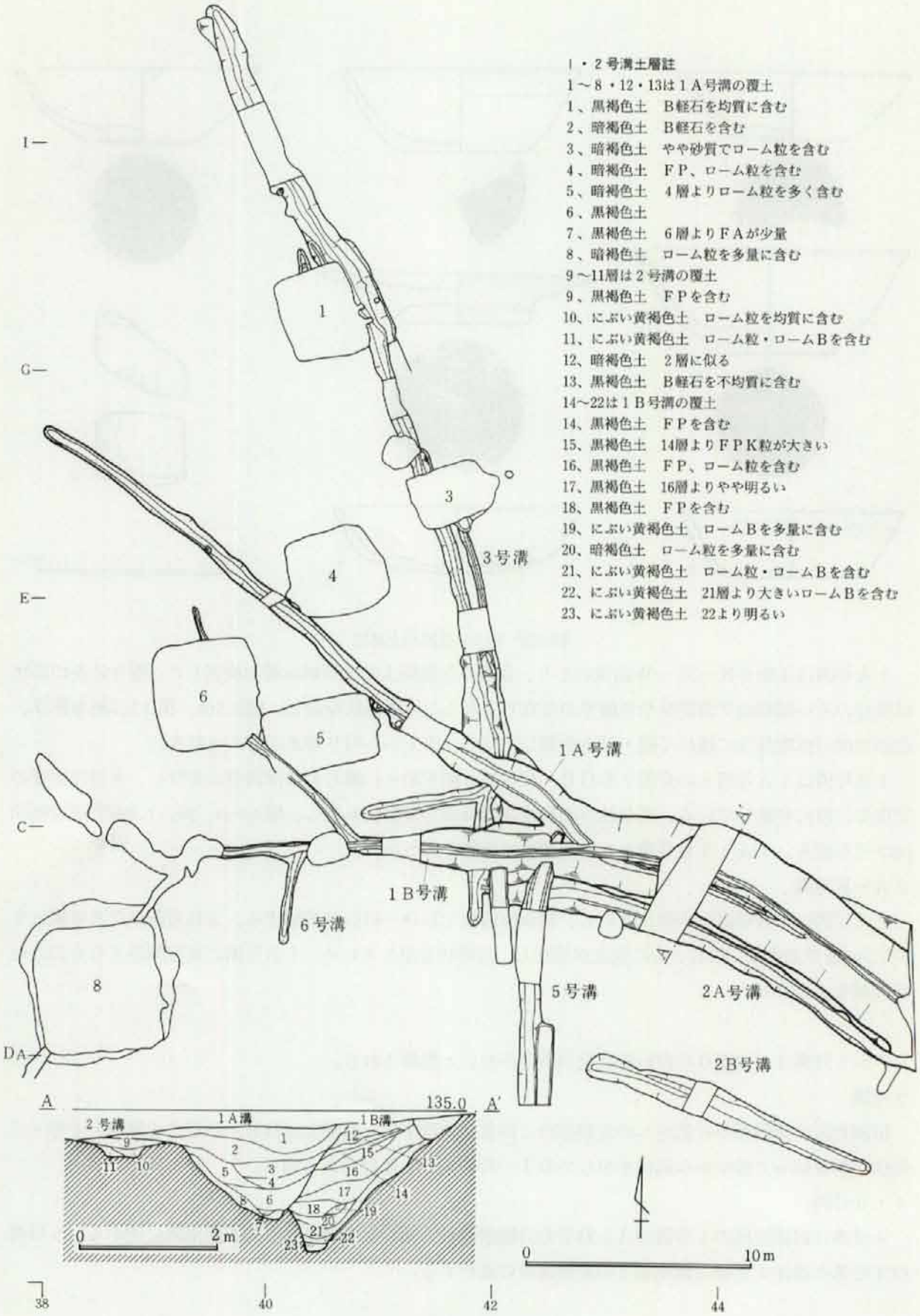
３～５号溝は、地割りに拘わる近世の所産のものと推察される。

３号溝

Ⅲ調査区の傾斜面から低地への変換部分に南北に走行する。南端部はＤＢ—41Ｇで１号溝・１号・３号住居跡を切って緩やかな弧状を呈してＤＪ—39Ｇまで全長43.5mを測る。

４・５号溝

４号溝はⅢ調査区の１号溝のＡとＢ号の分岐部分から傾斜面を横走して調査区南辺に達する。５号溝は４号溝と並走する様に低地部との変換部分に走行する。



第64図　Ⅲ調査区溝状遺構

Ⅳ　成果と問題点

本調査では、縄文時代の前期前葉～中期後葉と古墳時代後期の所産である遺構・遺物が検出された。縄文前期黒浜式期に比定されるのはＪ２号住居跡のみであり、小規模集落の存在が推察され、天神風呂地区では有尾式期の集落が展開している。このことは前期前葉期において南関東エリアを中心とする黒浜式土器圏と群馬県から長野県を中心とする有尾式土器圏が交差する地域と推察される。中期では同台地の先端部付近に選地された稲荷窪Ａ地点遺跡の加曽利Ｅ１式期の集落があり、東方で低地を挟んで小林・大畑遺跡・上ノ山遺跡・西小路遺跡等の加曽利Ｅ２式期の集落が展開している。

古墳時代後期の集落は、土器様相から６世紀後半と想定する。Ⅰ・Ⅱ調査区では調査区が限定されたことと整地作業による破壊部分の為に全容は不明であるが、台地中央部から西傾斜面に分布すると推察される。Ⅲ調査区では低地部分から傾斜面に分布する。住居跡は、その規模、形状、主軸、カマドの位置・構造等で細分が可能であり、変遷を示している。

本報告書では、紙面の制約から特出すべき遺物として「円筒形土器」と「木の葉型の坏」について考察して見たい。円筒形土器は県内では出土例の少なく、管見では新田町木崎中学校校庭遺跡・粕川村前田遺跡・三ッ寺Ⅱ遺跡・成塚住宅団地遺跡・竹沼遺跡にある。木崎中学校校庭遺跡では、鬼高Ⅱ式期の１号住居跡から２点（15・16）出土している。短高のもの（器高31cm、口径14cm）は袖部に立てられ、上部の周縁に抉りを設け、この抉り部に長高のもの（器高47.5cm、口径13.6cm）が横に架けられていたとしている。胎土に砂礫を含み、円筒埴輪のように櫛歯状工具で縦方向の整形をしている。

前田遺跡では、古墳時代の２・５号住居跡から（18～21）出土している。胎土に小礫を多く含み、外面は縦方向の荒いヘラ削りの調整、内面は輪積み痕と指頭圧痕を明瞭に残している。断面は故意に押し潰した様な楕円形を呈している。小島純一氏は調査所見からカマドの焚き口部分を構成したものではないかと私見している。

本遺跡の７号住居跡（17）出土のものは、胎土に砂粒を多量に含み、外面は雑な指撫と輪積み痕を残しカマドに使用された長胴甕に見られる粘土が付着し、片面が二次焼成を受けている。内面には輪積み痕と指頭圧痕を明瞭に残している。出土位置はカマドより離れた南方床面で、支脚状土製品や甑の出土状況からカマド廃棄による行為がもたらした結果と推察される。この状況からカマドの構築部材として使用された可能性が考えられる。

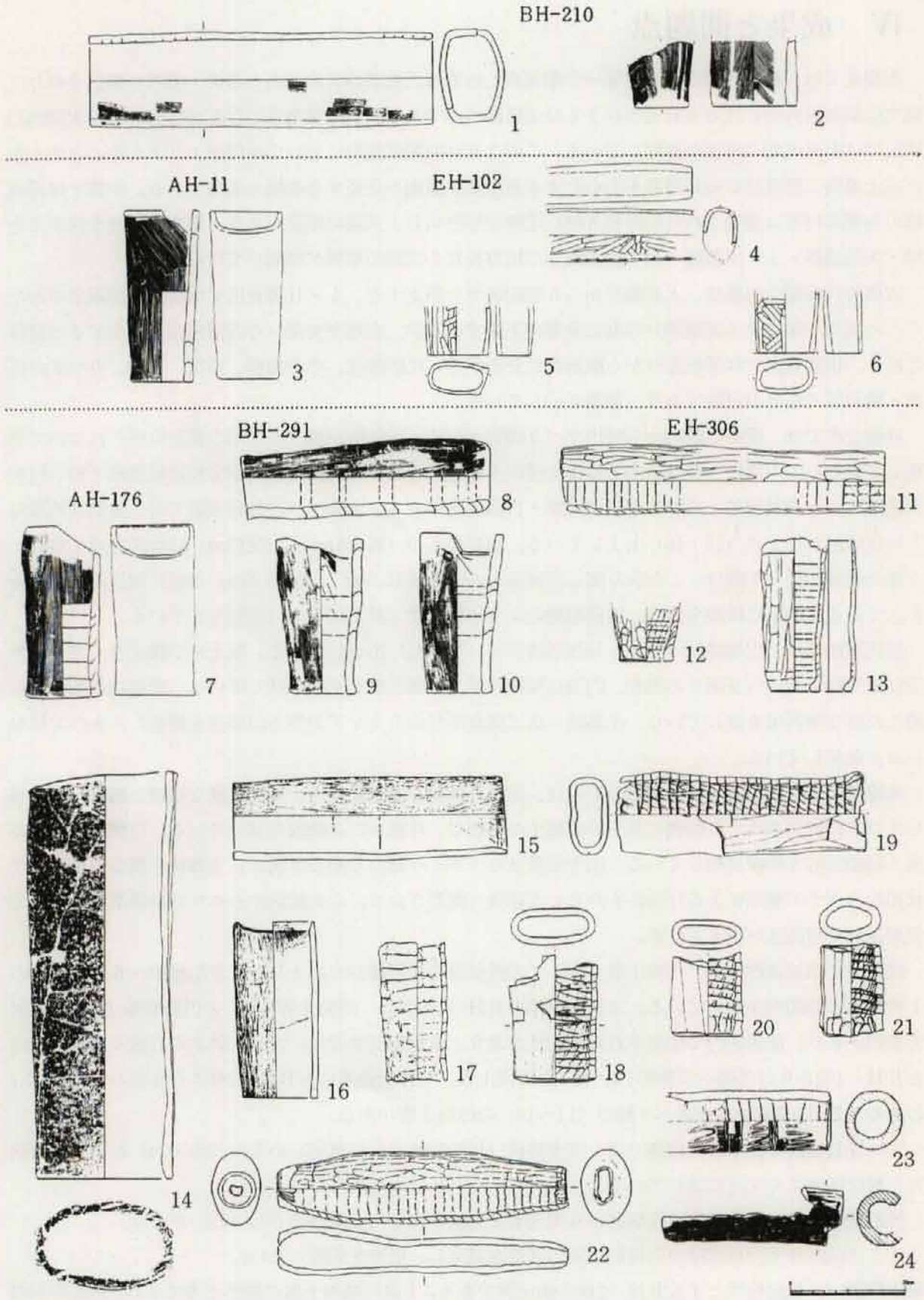
成塚住宅団地遺跡では、円筒土管と称して30件前後の住居跡から出土し、５世紀後半～６世紀後半の１世紀幅の時間差を考えている。５世紀後半のＢＨ―210では、円筒土管（１）と円筒埴輪（２）との供伴事例があり、住居跡内で使用された可能性があり、６世紀前半では、ＡＨ―11から外面ハケ整形（３）とＥＨ―102からは外面ヘラ整形（４～６）の円筒土管、６世紀後半にもＢＨ―291より外面ハケ整形（７）のものとＥＨ―306から外面ヘラ整形（11～13）の円筒土管がある。

三ッ寺Ⅱ遺跡４区１号住居跡では、平安時代（10世紀後半～11世紀）のもの（23・24）があり、波状文と横位区画文を交互に施している。

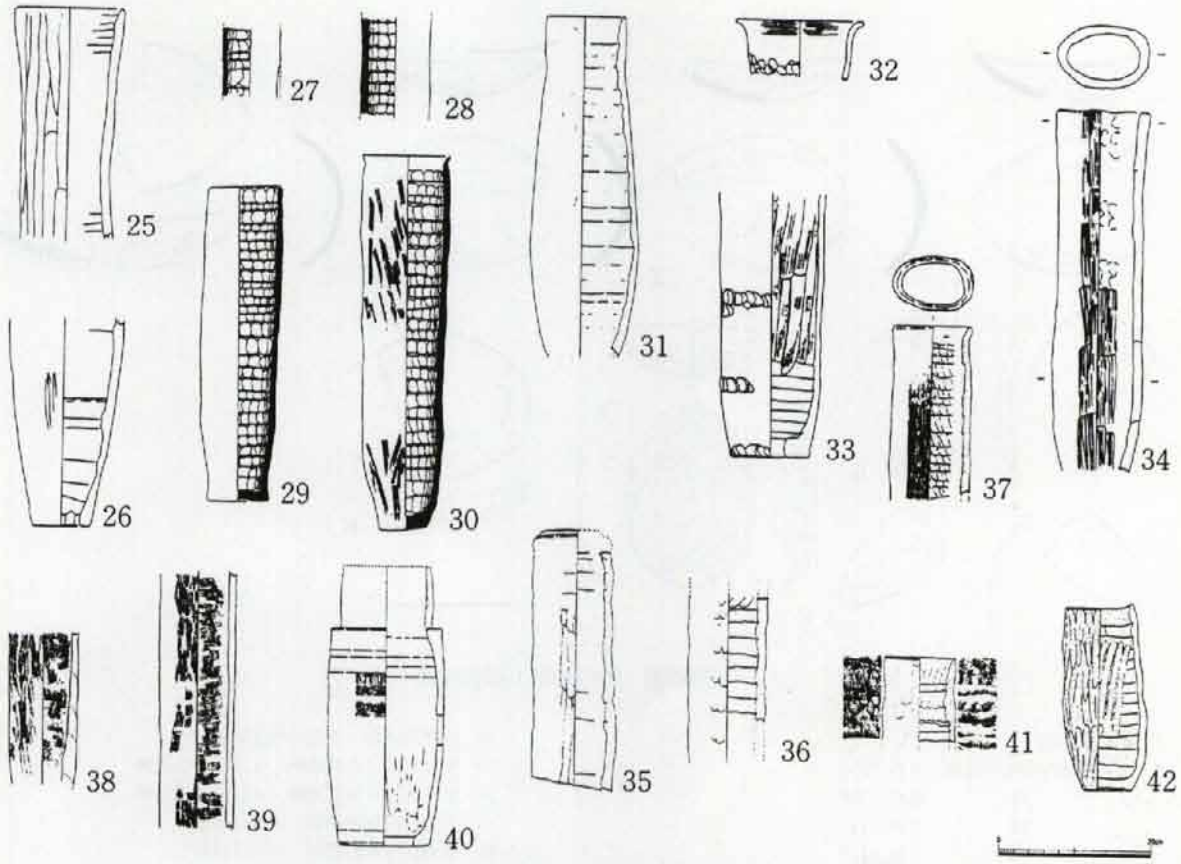
竹沼遺跡では、６世紀代の住居跡から両先端を先細りにした土錘形のもの（22）がある。

ここで成塚住宅団地遺跡の円筒形土器の変遷を試案し、県内を把握したい。

第１段階　５世紀後半とするＢＨ―210の出土例である。１は円筒形土器の祖形と考えられ、断面形が四角形を呈し、外面ハケ整形である。その使用方法は不明である。同様のものに６世紀半ば頃の居館跡と



第65図　円筒形土器集成図（1）



第66図　円筒形土器集成図（2）

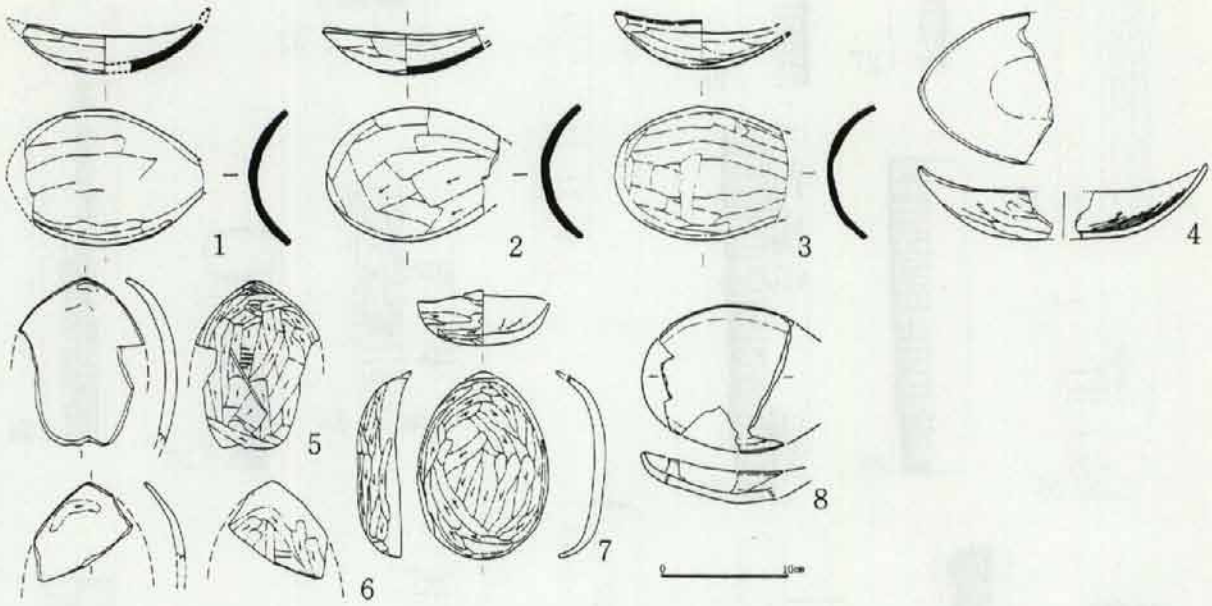
して知られる原之城遺跡の埴輪集積部祭祀で出土している（14）凸帯や透かしのまったくない特殊な円筒埴輪（器高70cm、長径26cm、短径16cm）がある。

第2段階　6世紀前半段階から普遍的に普及するカマドの構築材として使用され、A類のAH—11出土のものは第1段階のハケ整形を踏襲し、円筒埴輪に酷似している。その使用方法は袖部には抉りを施す短高のものに長高のものを天井部として渡架している。埴輪窯が検出されていることから集落内に埴輪工人が居住した可能性があり外面ハケ整形を施すものが製作にかかわったと推察される。木崎中学校校庭遺跡のものに類似する。

B類のEH—102出土のものは、第1段階の断面四角形の形状を踏襲し、外面ヘラ削り整形を施している。

第3段階　6世紀後半では第2段階A類とB類のハケ整形とヘラ整形の系譜があり、カマドの構築材として使用される。ヘラ整形のものは断面円形で内面に輪積み痕と指頭圧痕を明瞭に残す特徴がある。県内の資料は、全てが両端を開口し、県外で見られる底部を有するものやソケット状に連結する様なものは見られない。現時点では、その派生は埴輪工人が県内でのカマド出現期に拘わり、消長は前方後円墳の時期を同じくする7世紀前半と考えらる。

円筒形土器については、西山克巳氏が長野県考古学会誌79号で「7世紀代に信濃で用いられた円筒形土器」と題して研究史概略・長野県と山梨県の出土状況・特徴・時期等について論考している。論考を要約すると、「円筒形土器は早ければ6世紀末葉～7世紀初頭にカマドの構築材として天井部材・袖芯材・煙道に用いられ、その機能は長胴甕に変化することで円筒形土器が消え去った。（9世紀代との関連は不明）その分布は古墳時代から古代に至る主要地域に集中し、カマドの構築材とする人々は強い地縁



第67図　木の葉形土器集成図

第65・66図

1　成塚住宅団地遺跡　ＢＨ－210
2　同　ＢＨ－210
3　同　ＡＨ－11
4　同　ＥＨ－102
5　同　ＥＨ－102
6　同　ＥＨ－102
7　同　ＡＨ－176
8　同　ＢＨ－291
9　同　ＢＨ－291
10　同　ＢＨ－291
11　同　ＥＨ－306
12　同　ＥＨ－306
13　同　ＥＨ－306
14　伊勢崎市原之城遺跡　埴輪集積部祭祀
15　新田町木崎中学校校庭遺跡　１号住居跡
16　同　１号住居跡
17　大胡町稲荷窪Ｂ地点遺跡　７号住居跡
18　粕川村前田（Ｆ１）遺跡　第２号住居跡
19　同　第５号住居跡
20　同　第５号住居跡
21　同　第５号住居跡
22　緑埜遺跡群　Ａ区11号住居跡
23　群馬町三ッ寺Ⅱ遺跡　４区１号住居跡
24　群馬町三ッ寺Ⅱ遺跡　４区１号住居跡
25　長野市田中沖遺跡　３号住居跡
26　長野市田中沖遺跡　44号住居跡
27　長野市田中沖遺跡　第２号住居跡
28　同　第２号住居跡
29　同　第７号住居跡
30　同　第12号住居跡
31　長野市屋地遺跡　Ａ９号住居跡
32　坂城町北浦遺跡　第１号住居跡
33　坂城町北浦遺跡　第１号住居跡
34　坂城町宮上遺跡　Ｈ３号住居跡
35　坂城町宮上遺跡　Ｈ16号住居跡
36　坂城町宮上遺跡　第16号住居跡
37　松本市出川南遺跡　35号住居跡　（25～37は西山論文転載）
38　上越市一之口遺跡東地区　ＳＩ113
39　同　同
40　聖籠町山三賀Ⅱ遺跡
41　上三川町殿山遺跡Ⅰ　ＫＴ－82
42　宇都宮市関道遺跡

第67図

1　群馬町三ッ寺Ⅱ遺跡　１区22号住居跡
2　同　同
3　同　５区47号住居跡
4　甘楽町天神Ⅱ遺跡　１号住居跡
5　吉井町矢田遺跡Ⅵ　53号住居跡
6　同　同
7　同　同
8　大胡町稲荷窪Ｂ地点遺跡　９号住居跡

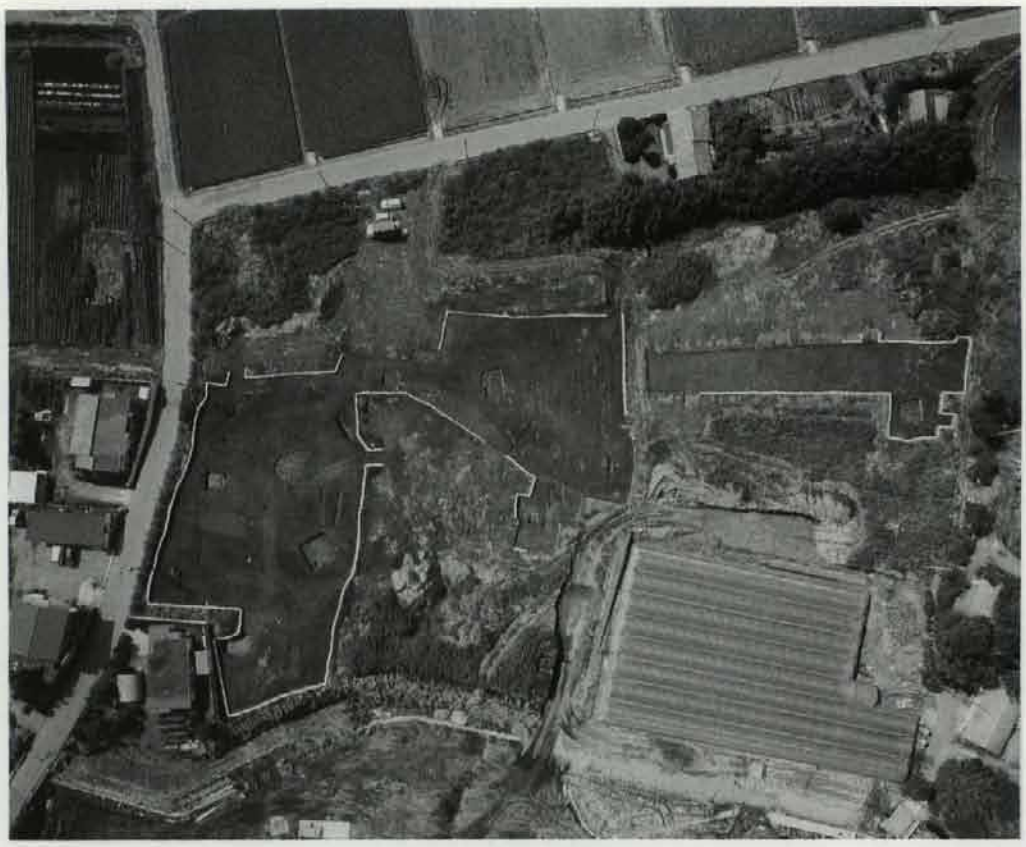
的・血縁的関係であった」としている。その用途は、カマドの構築材として共通性があるが氏が懸念する様に広域的な解明が必要であり、近県での出土例は新潟県・茨城県等にも散見されており、遠方では、青森県八戸市立博物館図録にも類似品が見られ、その派生と消長等は今後の課題であろう。

「木の葉型の坏」は、管見では県内の事例しか見当たらない。各報告書では、円筒形土器を出土している三ッ寺II遺跡では1区22号住居跡と5区47号住居跡から匙形土器、天神II遺跡1号住居跡では異形坏とし、中沢氏は矢田遺跡で初めて「木の葉型の坏」と称して53号住居跡の遺物を紹介している。甘楽古代館では、三ッ俣遺跡（福祉センター）の出土品として木の葉形土器が展示されている。三ッ俣遺跡では、その残存形状から把手の付く匙状の器形を想定し、天神II遺跡では半分程の個体から両端部を細長く丸める長楕円形の坏を想定したと考えられる。その全容は矢田遺跡53号住居跡のものや三ッ寺遺跡で詳らかになった。平面形は中沢氏の称した「木の葉」の形状であり、法量は長さ14cm・幅10cm・高さ4cm前後を測る。これらは古墳時代後期の範疇に掌握され、円筒形土器と同様に県内では出土例の少ないものであり、その特殊性から祭祀に拘わる供献器と考えられる。

最後に、関係機関はともより、酷暑の中で発掘調査に従事していただきました作業員及び、遺構・遺物の整理作業に携わった方々の協力に感謝し、まとめとします。

写真図版

遺跡全景

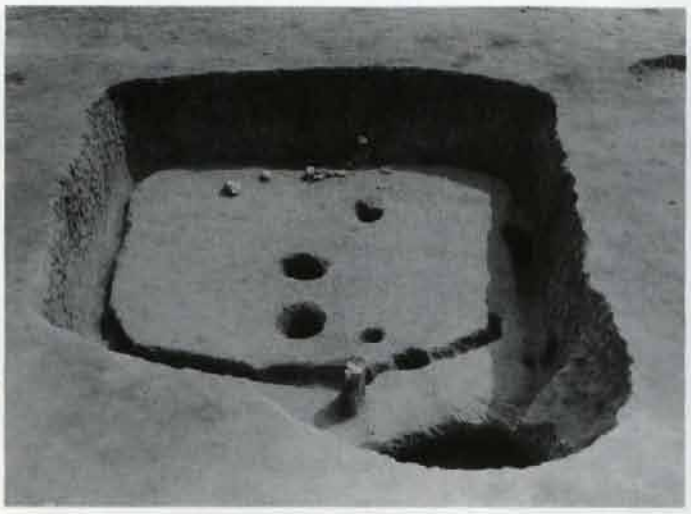


2－1　Ⅰ・Ⅱ調査区

2－2　Ⅲ調査区

3－1　J 1号住居跡

3－2　J 1号住居跡遺物出土状況



3－3　J 2号住居跡

3－4　1号集石土坑

3－5　J 3号住居跡

3－6　2号集石土坑

4—1　1号住居跡（西より）

4—2　同住居跡遺物出土状況

4—3　2号住居跡（西より）

4—4　同住居カマド跡

4—5　3号住居跡（西より）

4—6　同住居跡遺物出土状況

5—1　4号住居跡（東より）

5—2　同住居跡遺物出土状況

5—3　5号住居跡（西より）

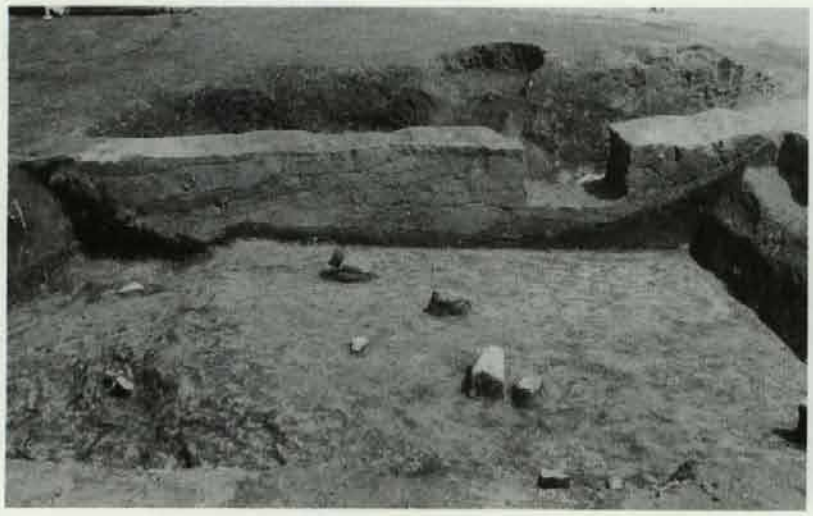
5—4　6号住居跡セクション

5—5　6号住居跡遺物出土状況

5—6　同住居跡遺物(No.1・2)出土状況

6－1　6号住居跡（西より）

6－2　7号住居跡円筒形土器(No.28)出土状況



6－3　同住居跡セクション

6－4　同住居跡編石出土状況

6－5　同住居跡遺物出土状況

6－6　同住居跡カマド前面遺物出土状況

7—1　7号住居跡（南より）

7—2　同住居跡カマド

7—3　8号住居跡（西より）

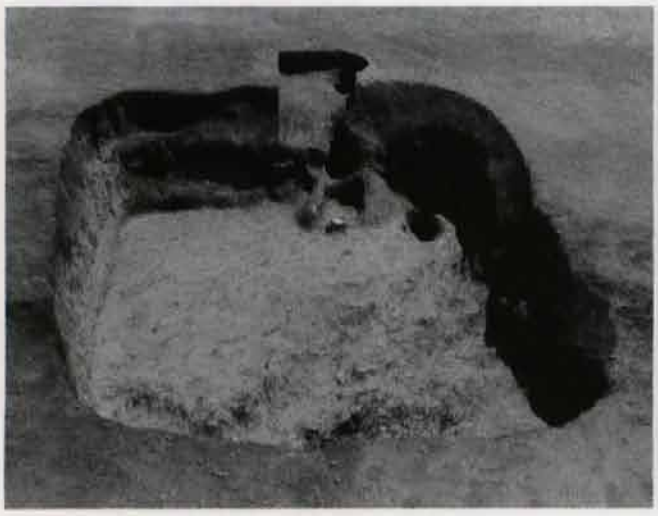
7—4　同住居跡遺物出土状況

7—5　9号住居跡遺物出土状況（南より）

7—6　同住居跡カマド

8—1　9号住居跡遺物出土状況（近撮）

8—2　9号住居跡（南より）



8—3　10号住居跡（西より）

8—4　10号住居跡カマド

8—5　11号住居跡（西より）

8—6　作業風景

9—1　12号住居跡（西より）

9—2　同住居跡遺物(No.4)出土状況

9—3　同住居跡カマド

9—4　13号住居跡（西より）

9—5　14号住居跡（西より）

9—6　同住居跡遺物出土状況

10—1　15号住居跡（西より）

10—2　同住居跡遺物出土状況

10—3　16号住居跡（東より）

10—4　同住居跡カマド

10—5　17号住居跡（西より）

10—6　同住居跡遺物出土状況

11—1　18号住居跡（南西より）

11—2　同住居跡カマド

11—3　同住居跡編石出土状況

11—4　19号住居跡（西より）

11—5　同住居跡カマド

11—6　1号溝

報告書抄録

フリガナ	イナリクボビーチテンイセキ
書名	稲荷窪B地点遺跡
副書名	団体営土地改良総合整備事業茂木地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II
編著者名	山下歳信
編集機関	大胡町教育委員会／〒371－0231　群馬県勢多郡大胡町堀越1,115番地
発行年月日	平成10年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
稲荷窪B（イナリクボビー）	大胡町茂木字（オオゴマチモトザアザ）稲荷窪（イナリクボ）・梅沢（ウメザワ）	10304	36°24′	139°09′15″	H7年6月10日～同年10月6日	8,866m²	土地改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲荷窪B	住居	縄文時代	竪穴住居　3軒	前期前葉～中期後葉	
			土坑　2基		
			集石土坑　2基		
		古墳時代	竪穴住居	土師器・須恵器・石製品	木の葉形土器・円筒形土器の出土
		平安時代	竪穴住居　1軒	土師器・須恵器・石製品	
	溝	不明			

茂木遺跡群発掘調査報告書第II集

稲荷窪B地点遺跡

平成10年3月30日

編　集　群馬県勢多郡大胡町教育委員会

発　行　群馬県勢多郡大胡町教育委員会
〒371-0231　群馬県勢多郡大胡町堀越1,115
☎027（283）1111

印刷製本　朝日印刷工業株式会社